

史跡中小田古墳群遺構状況 確認調査報告

2004

財団法人広島市文化財団

はしがき

広島市安佐北区口田南町（旧高陽町中小田）に所在する中小田古墳群は、昭和36年に第1号古墳から三角縁神獣鏡を出土したことで全国的にも重要な遺跡として有名になりました。その後の発掘調査で、その古墳群が合計12基からなる古墳群であること、第1号古墳、第2号古墳など全国的にみても優れた遺物を出土し、国指定クラスの重要な遺跡であることが分かってまいりました。広島市ではこの貴重な遺跡を恒久的に保存してゆこうと、昭和54年以降国史跡指定をめざして文化庁や関係諸機関・関係者に働きかけを行ってきたところでしたが、ようやく平成8年11月11日に国史跡として指定されることになりました。

今後広島市ではこの史跡中小田古墳群を単に保存するのではなく、この古墳群を核として学習活動・文化活動・野外レクリエイション活動の場あるいは憩いの場として、市民に有效地に活用していただくことを目的として整備してゆくこととしています。この度実施しました遺構状況確認調査は、こうした具体的な整備案作成に先立ち、その検討のための基礎資料を得ることを目的として未調査の古墳を中心に部分的発掘調査を実施したものです。今回の調査によって、中小田古墳群の重要性を再認識する結果となりました。今後はこの得られた貴重な資料をもとに整備計画を進めてゆきたいと思っております。

最後になりましたが、発掘調査にあたって、7年間もの長期にわたって、ご指導・ご助言をいただきました諸先生、ご協力いただきました関係諸機関・関係者の皆様並びに寒い中発掘調査に従事していただいた臨時作業員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成16(2004)年3月

広島市教育委員会生涯学習課
財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

例　　言

1. 本書は、平成8年度から平成14年度に実施した史跡中小田古墳群遺構状況確認調査の報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業・報告書作成は、広島市教育委員会が、財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課及び財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課（平成10年4月1日付で財団法人広島市歴史科学教育事業団と財団法人広島市文化振興事業団の統合により、財団法人広島市文化財団が発足）に委託し、実施した。
3. 本書の執筆・編集は、高下洋一が行った。なお、一部を除く各遺構の実測図、写真撮影については各年度担当者が実施し、遺構の製図、遺物の実測図・製図・写真撮影は高下・榎木敬太・岡野孝子が行った。
4. 第2図・第3図は株式会社瀬戸内開発コンサルタントが作成したものをおもに改変して使用したものである。
5. 第3図・第4図・第7図・第8図の遺構図面は写真測量によるもので、写測エンジニアリング株式会社に委託した。
6. 平成8年度に実施した地形測量図（第45図・第46図）のほか、第11図・第14図・第17図・第22図・第27図・第34図の各古墳の地形測量図面は、このたびの遺構状況確認調査において改めて地形測量を実施したものである。これらの地形測量にあたって、基準杭の設置を株式会社瀬戸内開発コンサルタントに委託した。
7. 第1図は国土交通省国土地理院発行の地形図（S=1:50,000／広島・海田市）を複製して使用した。
8. 本書に掲載した方位は座標北であり、座標は平面直角座標第III系に準拠した。
9. 水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
10. 遺構名の略号は以下のとおりである。
SD溝状遺構 SK土坑・土壙墓 SH住居跡 SXその他の遺構
11. 土層の名称は、一部 小山正忠・竹原秀雄編1998『新版標準土色帖』(21版) 日本色研事業株式会社によった。
12. 調査記録及び出土遺物は、広島市教育委員会の委託を受けて、財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課において保管している。

目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	5
III	遺構状況確認調査	
1.	平成9年度	13
2.	平成10年度	26
3.	平成11年度	38
4.	平成12年度	48
5.	平成13年度	58
6.	平成14年度	68
7.	平成8年度	80
IV	まとめ	85

図 版 目 次

1 a.	T5-1 莢石確認状況
b.	T5-2 莢石確認状況
2 a.	T5-3 莢石確認状況
b.	T5-4 莢石確認状況
3 a.	T5-5 莢石確認状況
b.	T5-6 莢石確認状況
4 a.	第13号古墳墳丘確認状況
b.	第13号古墳埋葬施設確認状況
5 a.	第13号古墳埋葬施設（箱形石棺）確認状況
b.	T5-3 貝塚確認状況
c.	T5-1 SH1 確認状況
6 a.	T6-1 莢石確認状況
b.	T6-1 莢石確認状況
7 a.	T6-2 莢石確認状況
b.	T6-3 莢石確認状況
8 a.	T6-4 莢石確認状況
b.	T6-4 莢石（一部）確認状況
9 a.	T6-5 莢石確認状況
b.	T6-6 莢石確認状況

- 10 a. T6—5 莼石（一部）確認状況
- b. T6—6 莼石（一部）確認状況
- c. T6—6 莼石（一部）確認状況
- 11 a. T4—1 第4号古墳埋葬施設確認状況
- b. T4—1 第4号古墳埋葬施設確認状況
- 12 a. T4—1 第4号古墳埋葬施設
- b. T4—1 第4号古墳埋葬施設内副葬品出土状況
- c. T4—1 SK4 内遺物出土状況
- 13 a. T4—2 完掘状況
- b. T4—3 完掘状況
- 14 a. T4—4 完掘状況
- b. T4—5 完掘状況
- 15 a. T1999—1 完掘状況
- b. T1999—1 SK5・SDa 確認状況
- 16 a. T1999—3 完掘状況
- b. T1999—3 SX2 確認状況
- 17 a. T1999—4 完掘状況
- b. T1999—2 完掘状況
- 18 a. T3—1 完掘状況
- b. T3—1 堆積状況
- 19 a. T3—1 第3号古墳埋葬施設確認状況
- b. T3—1 第3号古墳埋葬施設
- 20 a. T3—1 第3号古墳埋葬施設
- b. T3—1 第3号古墳埋葬施設副葬品出土状況
- 21 a. T3—2 完掘状況
- b. T3—3 完掘状況
- c. T3—4 完掘状況
- 22 a. T2—1 完掘状況
- b. T2—1 堆積状況
- 23 a. T2—2 鉄釘出土状況
- b. T2—2 完掘状況
- 24 a. T2—3 完掘状況
- b. T2—3 堆積状況
- 25 a. T2—4 完掘状況
- b. T2—4 堆積状況

- 26 a. T2—5 完掘状況
 - b. T2—5 堆積状況
- 27 a. T2—4 第14号古墳埋葬施設確認状況
 - b. T2—4 第14号古墳埋葬施設確認状況
 - c. T2—4 第14号古墳鉄製品出土状況
- 28 a. T1—1・T1—2 完掘状況
 - b. T1—1・T1—2 完掘状況
- 29 a. T1—1・T1—2 完掘状況
 - b. T1—1・T1—2 完掘状況
- 30 a. T1—2 完掘状況
 - b. T1—3 完掘状況
- 31 a. T1—4 完掘状況
 - b. T1—5 完掘状況
- 32 a. T1—6 完掘状況
 - b. T1—7 堆積状況
- 33 a. T1—6・T1—2 土壙墓確認状況
 - b. T1—7 土器出土状況
- 34 a. T1—7 拡張箇所完掘状況
 - b. T1—7・T1—8 完掘状況
- 35 a. T10—1 完掘状況
 - b. T10—1 第10号古墳埋葬施設確認状況
- 36 a. T10—1 第10号古墳SK1 確認状況
 - b. T10—3 第10号古墳SK2 確認状況
 - c. T10—1 第10号古墳SK3 確認状況
- 37 a. T10—3 完掘状況
 - b. T10—4 完掘状況
 - c. T10—5 完掘状況
- 38 a. T2003—1 完掘状況
 - b. T2003—2 完掘状況
 - c. T2003—3 完掘状況
- 39 a. T2003—1 堆積状況
 - b. T2003—2 遺物出土状況
 - c. T2003—3 SK1 確認状況
 - d. T2003—3 SK2 確認状況
- 40 平成10年度遺構状況確認調査出土遺物

- 41 平成11年度遺構状況確認調査出土遺物
 42 平成12年度遺構状況確認調査出土遺物
 43 平成13年度遺構状況確認調査出土遺物・平成14年度遺構状況確認調査出土遺物

挿 図 目 次

第1図 史跡中小田古墳群周辺遺跡分布図	7
第2図 史跡中小田古墳群地形図	11・12
第3図 平成9年度（第5号古墳・第6号古墳）トレント配置図	15・16
第4図 第5号古墳葺石立面図	17
第5図 第5号古墳T5-1・T5-2・T5-4土層断面図	18
第6図 第5号古墳T5-5・T5-6土層断面図	19
第7図 第6号古墳葺石立面図(1)	21
第8図 第6号古墳葺石立面図(2)	22
第9図 第6号古墳T6-1・T6-4土層断面図	23
第10図 第6号古墳T6-5土層断面図	24
第11図 第4号古墳トレント配置図	27・28
第12図 第4号古墳T4-3・T4-4土層断面図	29
第13図 第4号古墳埋葬施設実測図	31
第14図 第4号古墳南側平坦面トレント配置図	33
第15図 第4号古墳南側平坦面トレント土層断面図	34
第16図 平成10年度遺構状況確認調査出土遺物実測図	36
第17図 第3号古墳トレント配置図	39・40
第18図 第3号古墳T3-1・T3-3(T2-1)土層断面図	41
第19図 第3号古墳T3-2・T3-5土層断面図	42
第20図 第3号古墳埋葬施設実測図	43
第21図 平成11年度遺構状況確認調査出土遺物実測図	45
第22図 第2号古墳トレント配置図	49・50
第23図 第2号古墳T2-2・T2-3・T2-5土層断面図	51
第24図 第2号古墳T2-4土層断面図	52
第25図 第14号古墳（仮称）埋葬施設実測図	54
第26図 平成12年度遺構状況確認調査出土遺物実測図	56
第27図 第1号古墳トレント配置図	59・60
第28図 第1号古墳T1-1・T1-2・T1-3土層断面図	61
第29図 第1号古墳T1-6土層断面図	62

第30図	第1号古墳T1—7 土層断面図	63
第31図	第1号古墳T1—8 土層断面図	64
第32図	平成13年度遺構状況確認調査出土遺物実測図	64
第33図	第1号古墳T1—4・T1—5 土層断面図	65
第34図	第10号古墳トレンチ配置図	69
第35図	第10号古墳T10—1～T10—3・T10—2～T10—4 土層断面図	70
第36図	第10号古墳埋葬施設SK1 実測図	71
第37図	第10号古墳埋葬施設SK2 実測図	72
第38図	第10号古墳埋葬施設SK3 実測図	72
第39図	第10号古墳T10—5 土層断面図	73
第40図	弥生土器散布地範囲内トレンチ配置図	75
第41図	弥生土器散布地 T2003—1 土層断面図	76
第42図	弥生土器散布地 T2003—2 実測図・土層断面図	77
第43図	弥生土器散布地 T2003—3 実測図・土層断面図	78
第44図	平成14年度遺構状況確認調査出土遺物実測図	79
第45図	第7号古墳・第8号古墳測量図	81・82
第46図	第11号古墳・第12号古墳測量図	83・84
第47図	山城（狐城）縄張り図（略測・一部）	88

I はじめに

史跡中小田古墳群が知られるようになったきっかけは昭和36(1961)年に地元の中学生によって、第1号古墳の埋葬施設から中国製三角縁神獸鏡や玉類が掘り出されたことにある。その知らせを受け急遽広島大学文学部考古学研究室によって埋葬施設内の発掘調査が行われた。あわせて第1号古墳の北側墳裾にある第9号古墳と、第2号古墳埋葬施設の発掘調査が実施された。これによって新たに第1号古墳からは斜縁獸帶鏡、鉄斧が出土（のちの昭和54(1979)年の石室内清掃調査で車輪石が出土）し、第2号古墳からは素文鏡、短甲、衝角付冑、大刀、鉄劍、蛇行劍状鉄製品、鉄鏸、刀子、鎌、鉄斧が出土している。この結果、第1号古墳は4世紀中頃、第2号古墳が5世紀前半から中頃に築造されたと考えられ、前期から中期にかけて古墳が営まれたことが分かり、広島県を代表する古墳時代前半期の古墳群と評価されるようになった。

その後昭和54(1979)年に広島市教育委員会は、広島県教育委員会と広島大学文学部考古学研究室の協力を得て、保存措置を検討するため古墳群の範囲確認を目的として測量調査を実施し、新たに古墳6基のほか、弥生時代の土器蓋土壙墓と貝塚が発見された。

古墳群は、調査された2基の古墳からの副葬品等を見ると、いずれも太田川下流域の首長墓の中では中核的な地位を占めており、被葬者は沖積平野と内海交通を掌握していたと推定される。特に第1号古墳の築造された時期には、太田川下流域にとどまらず、対外的にも安芸地域を代表するような地位を確保していたとも考えられ、古代国家の形成期に果たした役割が極めて大きかったと考えられるに至った。こうした評価を踏まえて、広島市教育委員会では、文化庁・広島県教育委員会と協議を行い、平成6(1994)年には史跡指定に向けて文化庁に申請を行い、平成8(1996)年11月11日付けて指定を公示された（文部省告示第191号『官報』第2015号 大蔵省印刷局）。

広島市教育委員会は、平成2年に策定した整備基本構想にのっとり、整備案作成に先立ち古墳群及びその他の遺構の内容を確認するとともに、造成部分の遺跡の有無を確認する目的として、遺構状況確認調査を平成8年度から7ヵ年で実施する計画を策定し、財団法人広島市歴史科学教育事業団（平成10年度以降は、財団法人広島市文化振興事業団と統合し、財団法人広島市文化財団となる）に委託して行うこととした。遺構状況確認調査は、下記のように7ヵ年で、広島大学名誉教授潮見浩先生並びに広島市教育委員会の指導のもと実施し、調査終了後の平成15年度に発掘調査報告書を作成した。

各年度での調査内容及び調査関係者は以下のとおりである。

平成8(1996)年度

第7号・第8号・第11号・第12号古墳の測量調査の実施

調査期間 平成8年11月12日(火)～12月27日(金)

調査委託者 広島市教育委員会生涯学習部文化課

調査主体 財団法人広島市歴史科学教育事業団

調査担当課 財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課
調査関係者 中原照雄 常務理事
佐川 清 文化財課長
宮田浩二 事業係長
調査担当者 福原茂樹 指導主事 越智尚之 指導主事
調査補助員 岡野勝行, 川田勝, 山王哲司, 武本良広, 中村巖, 村越幸三, 森田信枝,
養祖昭, 養祖エミ

平成9(1997)年度

第5号・第6号古墳遺構状況確認調査

調査期間 平成10(1998)年2月3日(火)～3月27日(金)
調査委託者 広島市教育委員会生涯学習部文化課
調査主体 財団法人広島市歴史科学教育事業団
調査担当課 財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課
調査関係者 中原照雄 常務理事
佐川 清 文化財課長
宮田浩二 事業係長
調査担当者 高下洋一 主事 田村規充 主事
調査補助員 石原正行, 石原光江, 植木真澄, 川手ヨシエ, 川手好春, 久保田弘子,
佐久間寿美子, 高岡浩子, 宅見陽子, 戸井逸子(発掘作業員)
河合淳子, 菅原彰子, 住川香代子, 橋本礼子(整理作業員)

平成10(1998)年度

第4号古墳遺構状況確認調査

調査期間 平成11(1999)年2月15日(月)～3月30日(火)
調査委託者 広島市教育委員会生涯学習部文化課
調査主体 財団法人広島市文化財団
調査担当課 財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
調査関係者 竹本輝男 常務理事
堂官正昭 文化科学部長
佐川 清 文化財課長
調査担当者 高下洋一 学芸員 山脇一幸 学芸員
調査補助員 植木真澄, 川手京子, 川手ヨシエ, 川手好春, 久保田弘子, 佐久間寿美子,
高岡浩子, 高本すがこ, 宅見陽子, 坪木征子, 戸井逸子, 殿岡鉄博(発掘作業員)
酒本由理郁, 菅原彰子, 住川香代子, 橋本礼子(整理作業員)

平成11(1999)年度

第3号古墳遺構状況確認調査

調査期間 平成12(2000)年2月28日(月)～3月30日(火)
調査委託者 広島市教育委員会生涯学習課文化財担当
調査主体 財団法人広島市文化財団
調査担当課 財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
調査関係者 竹本輝男 常務理事
堂官正昭 文化科学部長
佐川 清 文化財課長
高下洋一 学芸員 山脇一幸 学芸員
調査補助員 植木真澄, 川手京子, 川手ヨシエ, 川手好春, 久保田弘子, 佐久間寿美子,
高本すがこ, 宅見陽子, 坪木征子, 戸井逸子(発掘作業員)
酒本由理郁, 菅原彰子, 住川香代子, 橋本礼子(整理作業員)

平成12(2000)年度

第2号古墳遺構状況確認調査

調査期間 平成13(2001)年3月19日(月)～3月30日(金)
調査委託者 広島市教育委員会生涯学習課文化財担当
調査主体 財団法人広島市文化財団
調査担当課 財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
調査関係者 玉田常行 常務理事
桑野克彦 常務理事
堂官正昭 文化科学部長
石田彰紀 文化財課長
調査担当者 若島一則 主任指導主事 高下洋一 学芸員
調査補助員 植木真澄, 大塚勝宏, 川手京子, 川手ヨシエ, 川手好春, 久保田弘子,
高本すがこ, 宅見陽子, 森田美恵子, 横光美里, 河本翔吾, 野田希和子(発掘作業員)
酒本由理郁, 菅原彰子, 住川香代子, 橋本礼子(整理作業員)

平成13(2001)年度

第1号古墳遺構状況確認調査

調査期間 平成14(2002)年2月25日(月)～3月28日(木)
調査委託者 広島市教育委員会生涯学習課
調査主体 財団法人広島市文化財団

調査担当課 財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
調査関係者 桑野克彦 常務理事
堂官正昭 文化科学部長
石田彰紀 文化財課長
調査担当者 高下洋一 学芸員 山脇一幸 学芸員
調査補助員 大塚勝宏, 川手京子, 川手ヨシエ, 川手好春, 木戸順枝, 高本すがこ,
坪木征子(発掘作業員)
酒本由理郁, 菅原彰子, 住川香代子, 橋本礼子(整理作業員)

平成14(2002)年度

第10号古墳及び史跡範囲内弥生土器散布地遺構状況確認調査
調査期間 平成15(2003)年2月17日(月)～3月31日(月)
調査委託者 広島市教育委員会生涯学習課
調査主体 財団法人広島市文化財団
調査担当課 財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
調査関係者 桑野克彦 常務理事
井川 實 文化科学部長
石田彰紀 文化財課長
調査担当者 高下洋一 学芸員 松田雅之 学芸員
調査補助員 植木真澄, 梶谷ミエ子, 川手好春, 木戸敏明, 木戸順枝, 宅見陽子,
森田美恵子, 横光美里(発掘作業員)
酒本由理郁, 菅原彰子, 住川香代子, 橋本礼子(整理作業員)

平成15(2003)年度

調査委託者 広島市教育委員会生涯学習課
調査主体 財団法人広島市文化財団
調査担当課 財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
調査関係者 桑野克彦 常務理事
沼田眞之輔 文化科学部長
石田彰紀 文化財課長

発掘調査にあたっては、広島市教育委員会、地元町内会、広島市口田公民館をはじめ多くの方々にご配慮とご協力をいただいた。また、当財団の埋蔵文化財発掘調査指導委員の広島大学名誉教授潮見浩先生、同川越哲志先生、広島大学大学院教授河瀬正利先生、同古瀬清秀先生から7ヵ年にわたりてご指導・ご助言をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

II 位置と環境

史跡中小田古墳群（以下、中小田古墳群とする）は、広島市安佐北区口田南町字胡磨ケ谷、字岩坪及び口田南三丁目に所在する。

中小田古墳群は、標高331.5mの最高所から北西に延びる標高130mから60mの丘陵尾根上に位置するが、この丘陵は稜線が狭く、傾斜もかなり強い。また、ところどころに花崗岩の露頭があり、それぞれの古墳は自然の地形を最大限に利用して築成されている。この丘陵は、県北西部にある冠山山塊を源とする太田川が、可部町付近で流路を南に変え、まさに広島の三角州に出ようとするところの東側に位置する。

1. 中小田古墳群の歴史的概観

この中小田古墳群には、12基の古墳が点在するが、大きく第1号古墳・第9号古墳の一群、第2号古墳から第4号古墳の一群、第5号古墳から第8号・第11号・第12号古墳の一群に分かれている（第10号古墳を含めると、4群に分けられる）。これが地形的な制約のためなのか、何か別の意味があったのか、現在のところ不明である。

現在までのところ、中小田古墳群については、昭和36（1961）年度と昭和54（1979）年度の過去二度発掘調査が実施され、第1号古墳の埋葬施設及び墳丘の一部、第2号古墳の埋葬施設、第9号古墳の埋葬施設（箱形石棺4基）、土器蓋土壙墓1基が発掘調査されているほか、7基の古墳と弥生時代の貝塚の存在が明らかとなった（のちの現地踏査によって、新たに2基の古墳、さらには本報告にあるように確認調査で更に2基の古墳の存在が確認され、計14基の古墳からなる古墳群となった。この数字は古墳時代前半期の古墳群としては広島市内最大規模である。）（潮見1980）。

南側から北に傾斜する尾根上の北端近くに造られた第1号古墳は全長約30mの前方後円墳と推定され、埋葬施設は全長3.5m・幅0.9～1.1mの竪穴式石室である。石室内に銅鏡2、緑色凝灰岩製車輪石1、玉類38（紫水晶製勾玉1、翡翠製勾玉2、管玉30、算盤玉5）、鉄斧2（短冊形1、有袋1）が副葬されていた。銅鏡は2面とも中国製で、鏡面を向かい合わせた形で重なっており、上の鏡は吾作銘三角縁四神四獸鏡で、下の鏡が上方作銘斜縁獸帶鏡である。このうち三角縁神獸鏡は、京都椿井大塚山古墳（2面）（梅原1964）、奈良黒塚古墳（1面）（奈良県立橿原考古学研究所1999）、大阪万年山古墳（1面）（梅原1915）、兵庫西求塚古墳（1面）（安田1995）、福岡石塚山古墳（1面）（長嶺1988）出土鏡と同範関係にある。第2号古墳は、第1号古墳から約80m南側に離れた尾根上にあるが、直径約15m・高さ2.5mの円墳である。西にやや偏った位置に内法長さ3.1m・幅0.8mで、床面に礫が敷きつめられた竪穴式石室が埋葬施設として造られている。石室内からは、素文鏡1、三角板鉢留短甲1、横矧板鉢留衝角付冑1、鉄劍2、蛇行剣形鉄製品1、鉄刀5、有棘猾形鉄製品2、鉄鏃83、刀子1、鎌1、鉈鎌1、手鎌1、鉄斧1、鑿2が、墳丘上からは、土師器、鉄鏃1が出土している。第9号古墳は第1号古墳の北に造られており、墳丘の封土の流出が著しく4基の箱形石棺が露呈している状態であった。その4基のうち3基の石棺から人骨が出土したほか、第2号石棺からは葉ロウ石製勾玉4、碧玉製管玉2、ガラス製小玉18が出土している。第1号古墳が4世紀中頃、

第2号古墳が5世紀中頃と考えられることから、中小田古墳群の形成された年代はこれを前後する年代幅を想定して4世紀から5世紀後半までと考えられる。

この中小田古墳群は、現在の広島市街地となる三角州地帯よりもやや奥まった太田川下流域を見渡せる好位置にある。古墳群が立地する丘陵の西北には太田川が形成した沖積低地が広がっており、現在中小田古墳群の眼下に流れる太田川の流路は江戸時代以降でそれ以前は別の流路であったことはよく知られた史実であるが(高下2003)，このことからこうした沖積地が古墳群を継続的に造営した首長層の経済的基盤であったと考えられる。古墳時代においては現在の安芸大橋付近まで海が入りこんでいたと推定されるが、この沖積低地は直接内海に面してはいないものの、内海交通の一つの拠点であったことが考えられるとともに、太田川下流域の沖積地を扼していた点に、この地域での優位を保持しながら中小田古墳群が形成された理由があると言え、その優位性を背景に、特に第1号古墳の時期には近畿政権などと密接な関係を持つことによって、安芸地域を代表するような地位を確保したと考えられている。

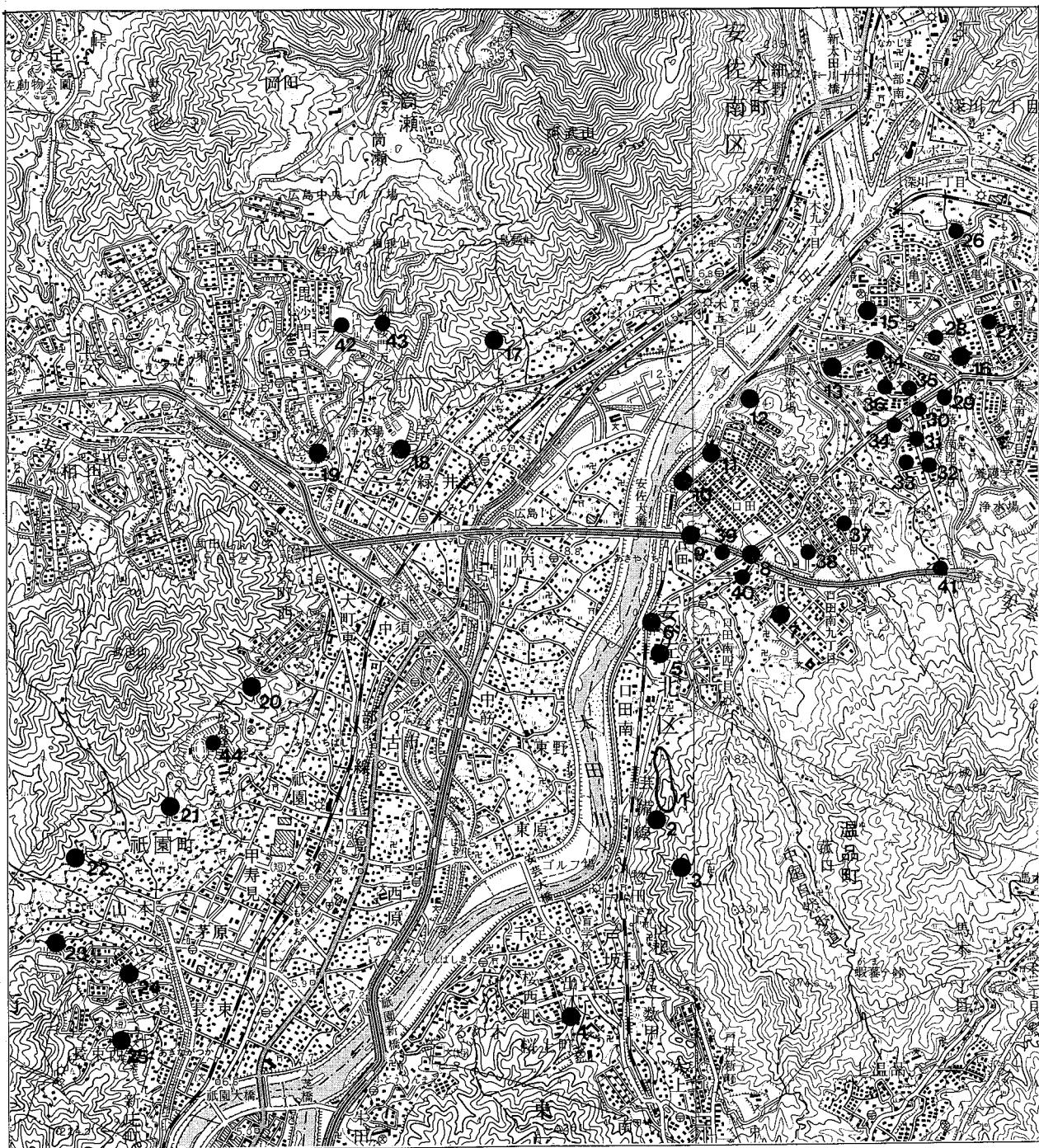
このように中小田古墳群は古墳時代前半期におけるわが国の国家形成期の状況を解明する上で重要な位置を占めていることから、平成8(1996)年11月に国史跡として指定されるに至ったのである。

2. 中小田古墳群周辺の遺跡概観

中小田古墳群の所在する安佐北区旧高陽町は昭和50(1980)年以降広島市のベッドタウンとして大規模な住宅団地の造成が相次ぎ、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多数明らかにされている。ここでは、旧高陽町地域を中心とした太田川下流域の歴史を概観したい。

旧高陽町内で最も古い資料は弘住遺跡の発掘調査で出土した縄文時代後期後半の津雲A式土器片である(石田1983)。しかし資料が増加するのは弥生時代以降であるが、弥生時代前期の遺跡はなく、また中期の遺跡は弘住遺跡、大明地遺跡(植田・妹尾1987)、狐ヶ城遺跡(小都1977)などと少なく、やはりその大半は後期以降のものである。この時期から水稻農耕を基盤とする生活が定着し、人口が急増していくことを窺わせる。なお、調査された集落遺跡を見てみると、概ね標高50m~70mの南ないしは東側向きの低丘陵上に、住居単位がせいぜい3,4戸を一単位とする小さな集団を形成していたものが多いようである(河瀬1979)。太田川が度々氾濫してその流路を変えており、耕作に適した沖積低地が広がらず、したがって生産力もあまり向上しなかったものと考えられる。むしろ、その支流となる小河川が流れる谷あいを耕地とし、そこを眼下に見下ろすような、丘陵緩斜面上に集落が形成されている傾向にある。およそ古墳時代初頭頃までは集落の地として丘陵尾根上が利用されているが、それ以降は集落に変わって古墳が造営されるようになる。

古墳時代の遺跡のうち明らかになっているものは古墳である。中小田第1号古墳の築造された前期段階には、太田川東岸側では弘住第3号古墳、弘住第1号古墳、大明地第1号古墳、山武士塚第1号古墳などがある。このうち弘住第3号古墳は直径約25mの円形の墳丘に東西方向に幅5mの突出部が付く墳形で、内法全長約2.7m・幅1.2mの竪穴式石室を埋葬施設にもつ。石室内から槍1, 刀子状鉄製品1, 鉄鏃形鉄製品1, 大型鉄鏃4, 類銅鏃形鉄鏃26, やす6, 鉄斧1, 鍔2が出土し、石室上に供献された土師器から、中小田第1号古墳に先行する3世紀末に築造されたものと考えら



第1図 史跡中小田古墳群周辺遺跡分布図 (S=1:50,000)

- | | | | | | |
|------------|-------------|----------------|------------|------------|------------|
| 1 史跡中小田古墳群 | 2 山武士塚古墳群 | 3 湯釜古墳 | 4 長尾古墳群 | 5 上小田古墳 | 6 弘住古墳群 |
| 7 道川古墳群 | 8 大久保古墳 | 9 大明地遺跡 | 10 西願寺遺跡群 | 11 西願寺北遺跡 | 12 梨ヶ谷遺跡 |
| 13 地蔵堂山古墳群 | 14 山手古墳群 | 15 恵下古墳群 | 16 諸木古墳 | 17 宇那木山古墳群 | 18 神宮山古墳 |
| 19 白山古墳群 | 20 大町七九谷遺跡群 | 21 三王原古墳 | 22 寺山古墳群 | 23 空長古墳群 | 24 池の内古墳群 |
| 25 権地古墳 | 26 狐ヶ城遺跡群 | 27 西山・北山遺跡群 | 28 寺迫遺跡 | 29 未光C地点遺跡 | 30 未光A地点遺跡 |
| 31 未光D地点遺跡 | 32 未光B地点遺跡 | 33 未光E地点遺跡 | 34 岩の上山田遺跡 | 35 大井遺跡群 | |
| 36 金平遺跡 | 37 城前遺跡 | 38 高陽台A地点遺跡 | 39 大久保遺跡 | 40 中矢口遺跡 | 41 金川遺跡 |
| 42 毘沙門台遺跡 | 43 毘沙門台東遺跡 | 44 広島経済大学構内遺跡群 | | | |

れ、現在のところ太田川下流域では最古の古墳と考えられる（石田 1983）。ところで、この竪穴式石室に類似する埋葬施設を持つ墳墓がこの北側約1.3kmの太田川に突き出した丘陵上に、南から西願寺遺跡群（金井 1974）、西願寺北遺跡（石田 1991）、梨ヶ谷遺跡B地点（荒川 1998）と、集中して認められる。これらは弥生時代終末期の首長墓と考えられ、恐らくはこれらの首長墳墓から弘住第3号古墳を経て中小田第1号古墳に続く様相を辿ることができると考えられる。第1号古墳に続くのが中小田古墳群と同一丘陵に位置する、全長33mの前方後円墳で葺石を持つ山武士塚第1号古墳であろう。後円部には全長3.7m・幅1.1mの竪穴式石室が造られている（石井・角田 1995）。

ところで、太田川西岸側には、同時期の前方後円墳として宇那木山第2号古墳（全長約40m）、神宮山第1号古墳（全長約20m）がある。宇那木山第2号古墳の後円部には2基の埋葬施設が造られており、中央の竪穴式石室からは仿製珠文鏡1、槍1、鉄剣1、鉄斧1、鉈1が出土し、北側の竪穴式石室からは舶載画文帶神獸鏡1が出土している。墳丘覆土から土師器が出土しており、4世紀前半の築造と考えられている（広島大学 2002）。なお、この古墳の墳丘形態と東岸の弘住第1号古墳が類似することから、弘住第1号古墳の築造時期を4世紀前半まで遡らせる考え方もある（広島大学ほか 2003）。また神宮山第1号古墳は後円部に3基の竪穴式石室が造られているが、そのひとつから内行花文鏡の破片が見つかっている。4世紀中頃と推定されている（中摩ほか 1986）。これらの西岸の古墳と、東岸にある中小田第1号古墳との関係は不明であるが、東岸側には前代から首長墓が連続して営まれた様相を辿れるという優位性が認められる。

山武士塚第1号古墳に続く首長墓としては、4世紀末頃と推定される全長42mの前方後円墳である東区長尾第1号古墳が続くのではないかと推定される（広島市教育委員会 2001）。

その後5世紀以降、太田川下流域においては、目立った規模の古墳はみられなくなり、直径30m以下の小規模古墳が小単位毎に築造される傾向にあるようである。このことは、この5世紀代に中小の首長が台頭してきたことを示唆しているものと考えられる。東岸側では、上小田古墳、山手古墳群（小都・脇坂 1977）、真亀第1・2号古墳（中田・松村 1977）、恵下古墳群（中田 1977）、道川古墳群（石田 1982）、大明地第2・3号古墳（妹尾 1987）、大久保古墳（妹尾 1987）、地蔵堂山古墳群、諸木古墳（檜垣 1977）などが、西岸側では、大町七九谷古墳（村田 1999）、白山第1号古墳、三王原古墳、池の内第2号古墳（池の内第2号古墳発掘調査団 1985）、空長第1号古墳、寺山第3号古墳（高下 1997）などがあげられる。このうち、上小田古墳は組合式石棺を埋葬施設とする直径25mの円墳で、床面に玉砂利を敷いた棺内から鉄剣1、鉄刀1、鎌1、鉄斧1、棺外から鉄剣1、鉄斧1が出土しており、5世紀初頭頃に築造されたと考えられる（本村 1960）。地蔵堂山第1号古墳は、木棺直葬の17m×14m・高さ約3mの方墳で、墓壙内から素環頭大刀1、鉄刀1、鋸造鉄斧2、刀子1、鉗具1、鉄鎌1、針1、U字形鋤もしくは鍬先1、鎌1、有孔円板15が、周溝から銅1が出土している。5世紀前半頃と推定される（松村 1977）。三王原古墳は円墳であったらしく、ここからは獸形鏡1、短甲、鉄刀2、鉄剣4、銅2、椎1、鉄鎌10、玉類10、馬具飾金具などが出土している（中田 1973）。空長第1号古墳からは、鉄剣1、蛇行劍形鉄製品1、金銅製三輪玉、滑石製有孔円盤1、ガラス小玉11、鏡5が出土している（石田 1978）。白山第1号古墳は箱形石棺を埋葬施設とし、短甲などが出土したらしい（広島県教育委員会 1973）。いずれにしても、いくつか鉄製品を大量に副葬する古墳が認

められるが、中小田第2号古墳は小規模ではありながらも竪穴式石室を埋葬施設とし、副葬品も傑出した内容を誇っており、それまで首長墓の系譜が追えた同一丘陵上に継続的に造営されていることから見ても、太田川下流域での優位を引き続き保ち得たものと考えられる。

6世紀以降については、中小田第1号古墳南上手700mに湯釜古墳が存在しているが、全長約28mの前方後方墳で初期の横穴式石室を埋葬施設としている（妹尾1985）。6世紀初頭頃の築造で、恐らくは本古墳群と密接な関連を持つものと考えられよう。

引用・参考文献

- 荒川正己編 1998『梨ヶ谷遺跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団
石井隆博・角田徳幸 1995「山武士塚古墳群の測量調査」『芸備』第24集 芸備友の会
石田彰紀編 1978『空長古墳群発掘調査報告書』（広島市の文化財第13集）広島市教育委員会
石田彰紀編 1982『高陽台遺跡群発掘調査報告』（広島市の文化財第21集）広島市教育委員会
石田彰紀編 1983『弘住遺跡発掘調査報告』（広島市の文化財第25集）広島市教育委員会
石田彰紀 1991「中山の歴史のあけぼの」『中山村史』広島市
植田千佳穂・妹尾周三 1987「大明地遺跡」植田千佳穂・妹尾周三編『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（IV）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
梅原末治 1915「河内枚方町字萬年山の遺蹟と発見の遺物に就きて」『考古学雑誌』第7巻第2号 日本考古学会
梅原末治 1964「椿井大塚山古墳」『京都府文化財調査報告』第23冊別刷 京都府教育委員会
小都隆・脇坂光彦 1977「山手古墳群」金井亀喜編『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会
金井亀喜編 1974『西願寺遺跡群』広島県教育委員会
河瀬正利 1979「歴史のあけぼの」『高陽町史』広島市
高下洋一編 1997『寺山遺跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団
高下洋一 2003「太田川下流域における約1700年前の地形復元について」『研究連絡誌』II 財団法人広島市文化財団
潮見浩編 1980『中小田古墳群』（広島市の文化財第16集）広島市教育委員会
妹尾周三 1985「広島市安佐北区湯釜古墳について」『芸備』第16集 芸備友の会
妹尾周三 1987「大明地古墳群」植田千佳穂・妹尾周三編『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（IV）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
妹尾周三 1987「大久保古墳」植田千佳穂・妹尾周三編『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（IV）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
中田昭 1973「広島市祇園町三王原古墳について」『芸備』第1集 芸備友の会
中田昭 1977「恵下古墳群」金井亀喜編『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会
中田昭・松村昌彦 1977「真亀第1号・第2号古墳」金井亀喜編『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会
中摩浩太郎ほか 1986「神宮山第1号古墳・第3号古墳の測量調査成果報告」『続トレンチ』第6巻第4号 広島大学文学部考古学研究室続トレンチ編集委員会
長嶺正秀編 1988「石塚山古墳発掘調査概報」苅田町教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所 1999『大和の前期古墳 黒塚古墳調査概報』学生社
檜垣榮次 1977「諸木古墳」金井亀喜編『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会
広島県教育委員会編 1973『白山城跡発掘調査報告』
広島市教育委員会 2001『長尾古墳群発掘調査報告』
広島大学大学院文学研究科考古学研究室 2002『宇那木山第2号古墳発掘調査報告会資料』

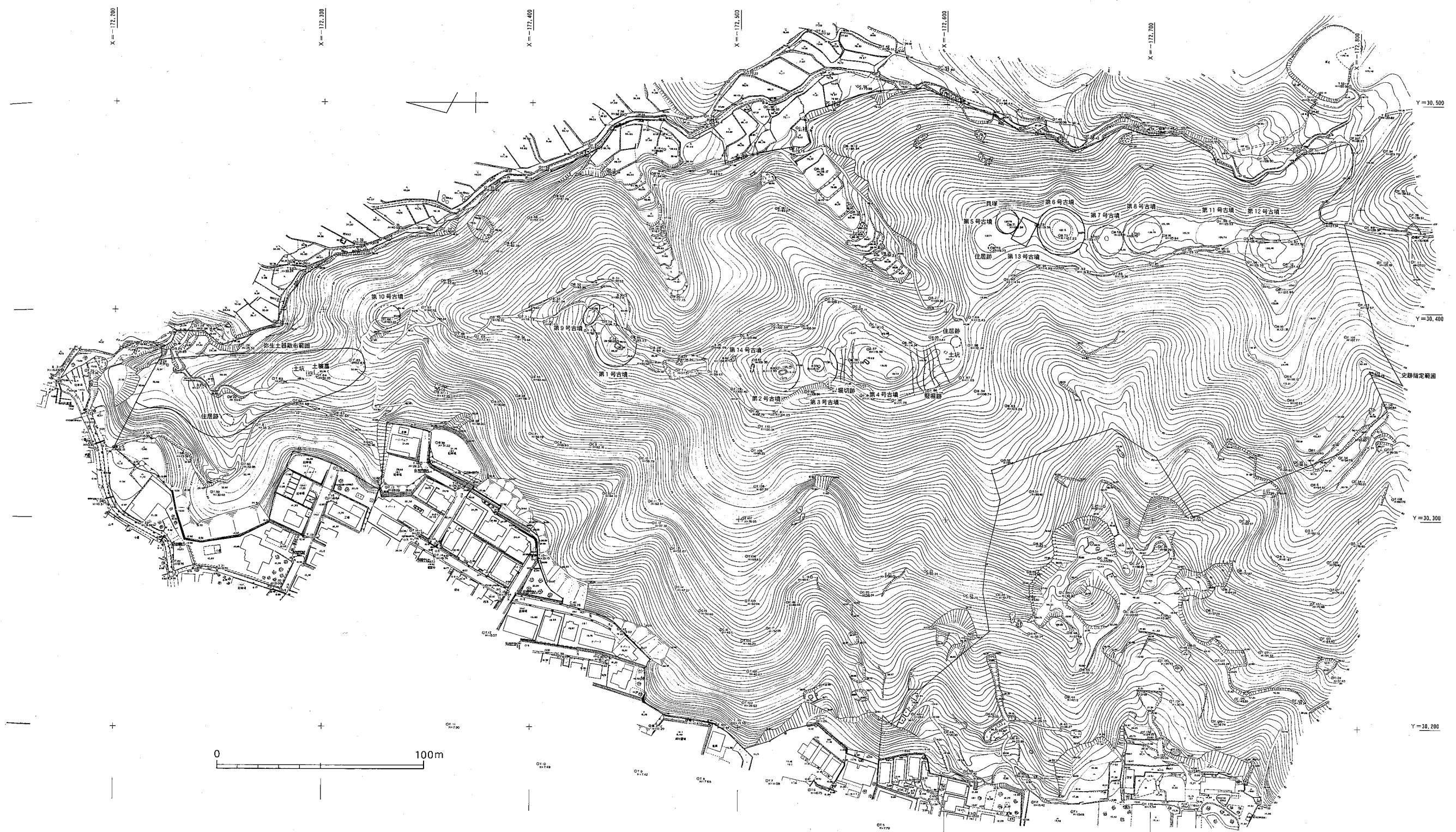
広島大学大学院文学研究科考古学研究室・財団法人ひと・まちネットワーク広島市佐東公民館 2003『安芸の古墳文化探訪』

松村昌彦 1977「地蔵堂古墳群」金井亀喜編『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会

村田亜紀夫編 1999『大町七九谷遺跡群』財団法人広島市文化財団

本村豪章 1960「広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告」「広島考古研究」第2号 広島考古研究会

安田滋編 1995『西求女塚古墳第5次・第7次発掘調査概報』神戸市教育委員会



第2図 史跡中小田古墳群地形図 (S=1:2,000)

III 遺構状況確認調査

広島市教育委員会は、史跡の具体的な整備案作成に先立ち、その検討のための基礎資料を得ることを目的として、古墳群及びその他の遺構の内容確認調査を平成8年度から7ヵ年で実施することとした。実施計画については、以下のとおりである。

平成8年度（第1年次）は第7・8・11・12号古墳の墳形・規模等の概要把握を行うために地形測量調査を実施する。第2年次以降については、平成9年度（第2年次）が第5・6号古墳の、平成10年度（第3年次）が第4号古墳の、平成11年度（第4年次）が第3号古墳の、平成12年度（第5年次）が第2号古墳の、平成13年度（第6年次）が第1号古墳の、古墳範囲・墳形等の確認を行うために墳丘及びその周辺に部分的発掘調査を実施し、平成14年度（第7年次）は第10号古墳の古墳範囲・墳形等の確認を行うために墳丘及びその周辺に部分的発掘調査を実施するほか、他の史跡範囲内の遺物散布状況や遺構の配置及び性格を把握するため遺構の存在の可能性が高い地点に部分的発掘調査を実施する、というものであった。

以下、第2年次からの遺構状況確認調査の報告を年次ごとに行い、末尾に第1年次の古墳測量調査結果の報告をすることとする。

1. 平成9年度

発掘調査は、平成10(1998)年2月3日(火)から3月27日(金)まで実施した。対象とした古墳は、第5号古墳と第6号古墳である。

第5号古墳については任意に6本のトレンチを設定した。各トレンチの名称はT5-○とし、T5-1から南側を向いて時計周りにT5-2からT5-6とした。このうちT5-1については、「第5号古墳を含む一帯は、幅10m・長さ20mの比較的傾斜の緩やかな丘陵鞍部となっており、弥生後期の集落址の存在が推定」(潮見1980)されるので、このことにも考慮した。T5-3は昭和54年の発掘調査において第5号古墳の東崖面に確認された弥生時代後期の土器を含む小貝塚にも考慮したものである。一方、T5-5は第5号古墳の南西側にみられる平坦面に何らかの遺構の存在が予測されたため設定した。

第6号古墳については任意に6本のトレンチを設定した。各トレンチの名称はT6-○とし、T6-1から南側を向いて時計周りにT6-2からT6-6とした。このうち、T6-1については第5号古墳との、T6-4は第7号古墳との切り合い関係についても考慮した。

i. 第5号古墳（第3～6図・図版1～3）

第5号古墳は「第4号古墳の南東上手90mの尾根上平坦部の標高121mのところに位置する」。「墳丘東側の一部は土砂崩れにより原形を保っていない。墳丘裾の一部は、人頭大ほどの石を用いた列石が確認され」、「内部主体はあきらかでない」(潮見1980)。推定される規模・墳形は直径9m・高さ1mの円墳である。

a. 墳丘と規模

6本のトレンチすべてから墳丘斜面に施された葺石を、またT5-2とT5-3以外のトレンチからは本古墳に伴う周溝と考えられる溝を確認した。葺石は人頭大よりもやや小振りの礫を5~6段程度斜面に沿って敷き並べていた。その最下段部は、崖面で確認できなかったT3-3以外では礫を二段積みしていたが、上記の周溝の底部直上面にこれらの礫が配置されていたことから、この二段積みの礫をもって本古墳の墳端とみなした。なお、葺石の範囲は水平距離で幅約1m、高さ約0.5mである。

この結果、本古墳の推定される規模・墳形は直径約12mの円墳となる。また、外表施設として葺石を施している。墳丘の高さは北側に設定したT5-1では約1.5m、南側に設定したT5-4では約1mで、北側が若干高くなる傾向を呈する。周溝は上記のように西半部に設定した4箇所のトレンチにおいて確認された。周溝の規模は南側に設定したT5-4及び西側に設定したT5-6では幅約1m、深さ約0.5mであるが、北側に設定したT5-1では幅約3m、深さ約0.5mとなる。このことから周溝は南側が狭く、北側にいくに従って幅広になる傾向を示すと推定された。なお、この周溝については東半部のトレンチのうち、T5-2では確認ができておらず、全周をしていなかった可能性もある。

ところで、T5-1とT5-2では、墳端とみなした葺石最下段部と並行に巡る列石と、幅約1mの犬走り状の平坦面が確認された。このことから、本古墳においては少なくとも西半部に列石を伴う何らかの外表施設が存在していた可能性も考えられる。

本古墳に伴う遺物は出土していない。

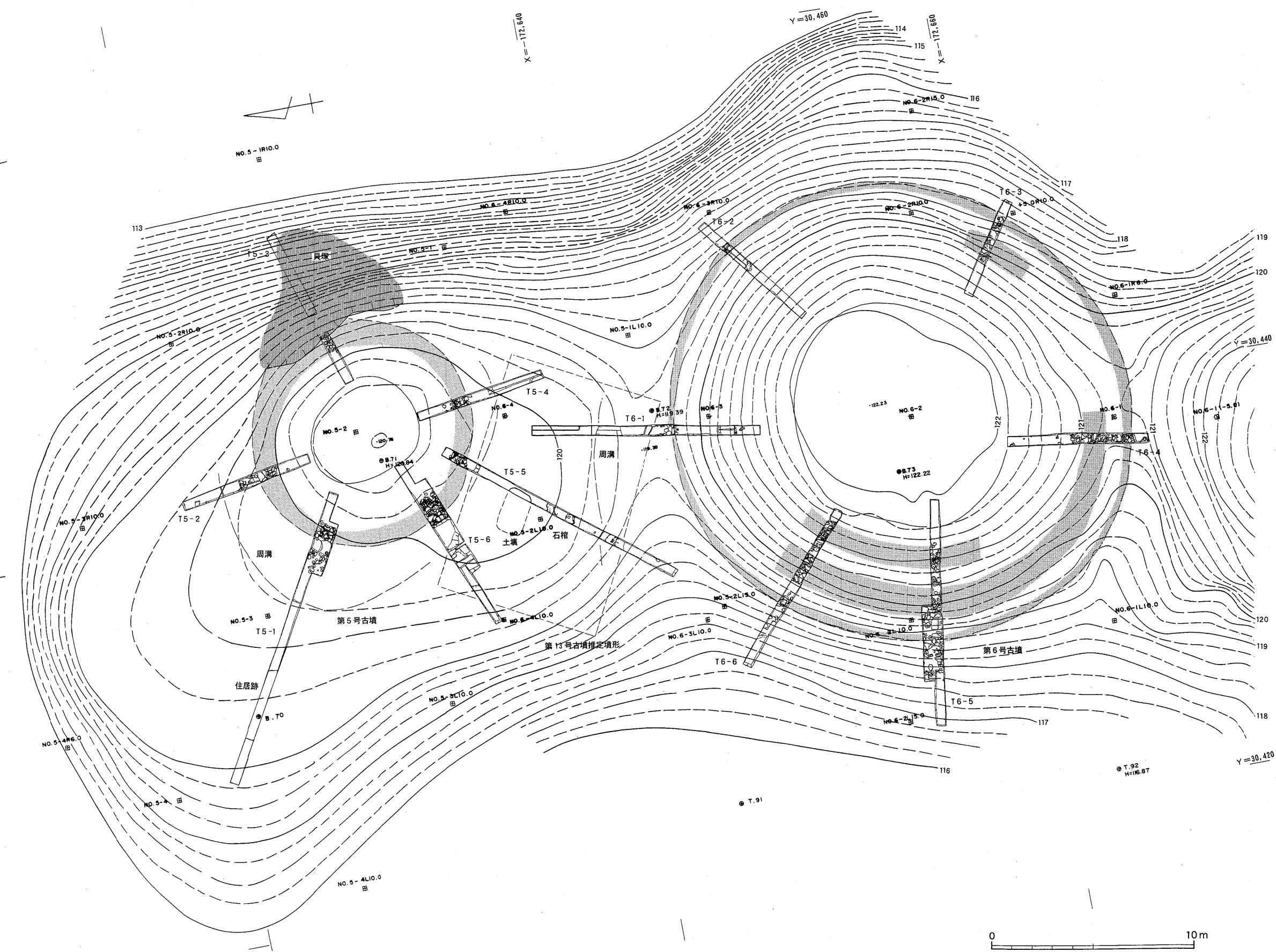
ii. 第6号古墳（第3図、第7~10図・図版6~10）

第6号古墳は「第5号古墳の南28mに位置し、墳頂部の標高は122.5mである」。「墳丘は、尾根に直交する南北両側を切断しており墳丘南側裾には、列石がわずかにみとめられた。埋葬施設として「墳頂平坦部の中央に石室ないし石棺の存在が推定され」とある（潮見1980）。推定される規模・墳形は直径22m・高さ3mの円墳で、「本古墳群の円墳中最大で保存がよい」（潮見前掲書）。

a. 墳丘と規模

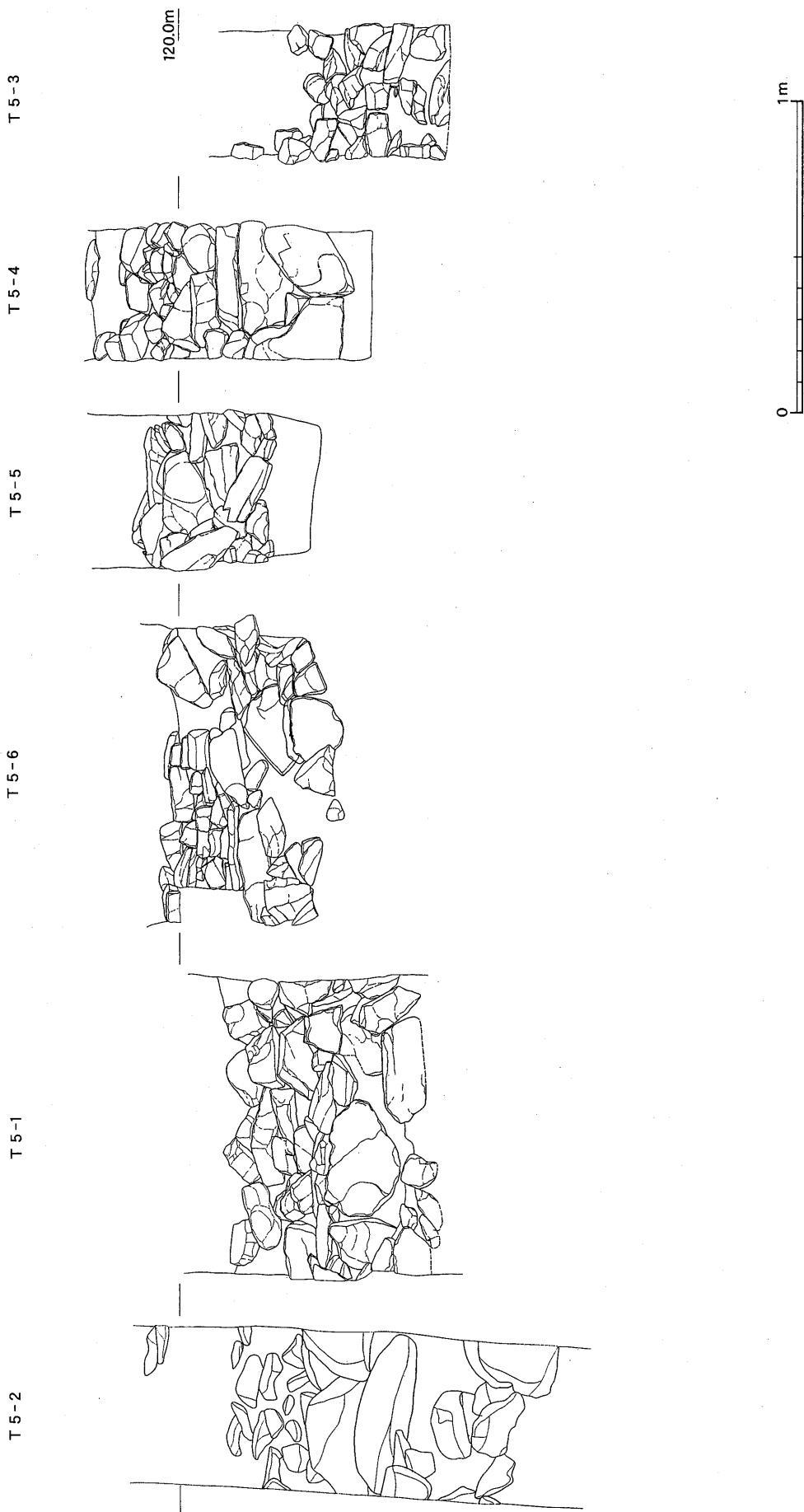
6本のトレンチのうち、最も遺存状況が良好であったのは、西側斜面に設定したT6-5とT6-6である。これらのトレンチでは墳丘斜面上において、やや大型の平石状の礫を二~三段程度広口積みにしたり、あるいは大型の平石状の礫を立て並べたりした、いわゆる立石状の施設を、上・中・下と三段にわたって確認することができた。この立石状施設の上方にはそれぞれやや小振りな礫を使用して葺石が施されていた。また、その施設の前面には幅狭ながらも平坦面が形成されていた。これらのうち、下段の立石状施設についてはその前面の約1m西あたりから徐々に傾斜が強くなり、そのまま丘陵斜面につながっていることから、この下段の立石状施設をもって本古墳の墳端とみなした。

一方、他のトレンチにおいては、上述した立石状施設がそれぞれ二段ずつしか確認できなかった。これらのトレンチで確認できた立石状施設と、上述した2箇所のトレンチで確認できた三段に施さ

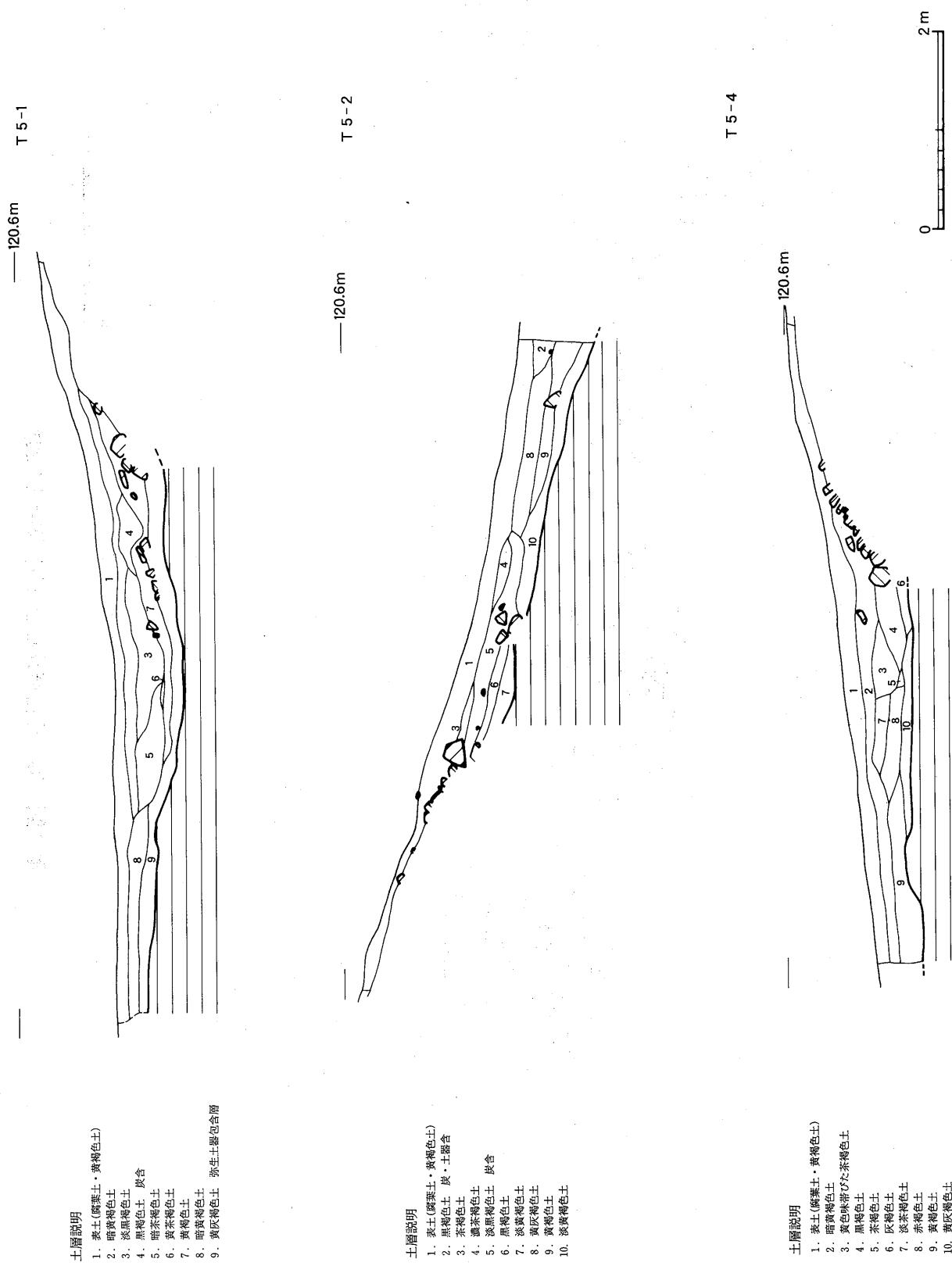


第3図 平成9年度（第5号古墳・第6号古墳）トレンチ配置図（S=1:200）

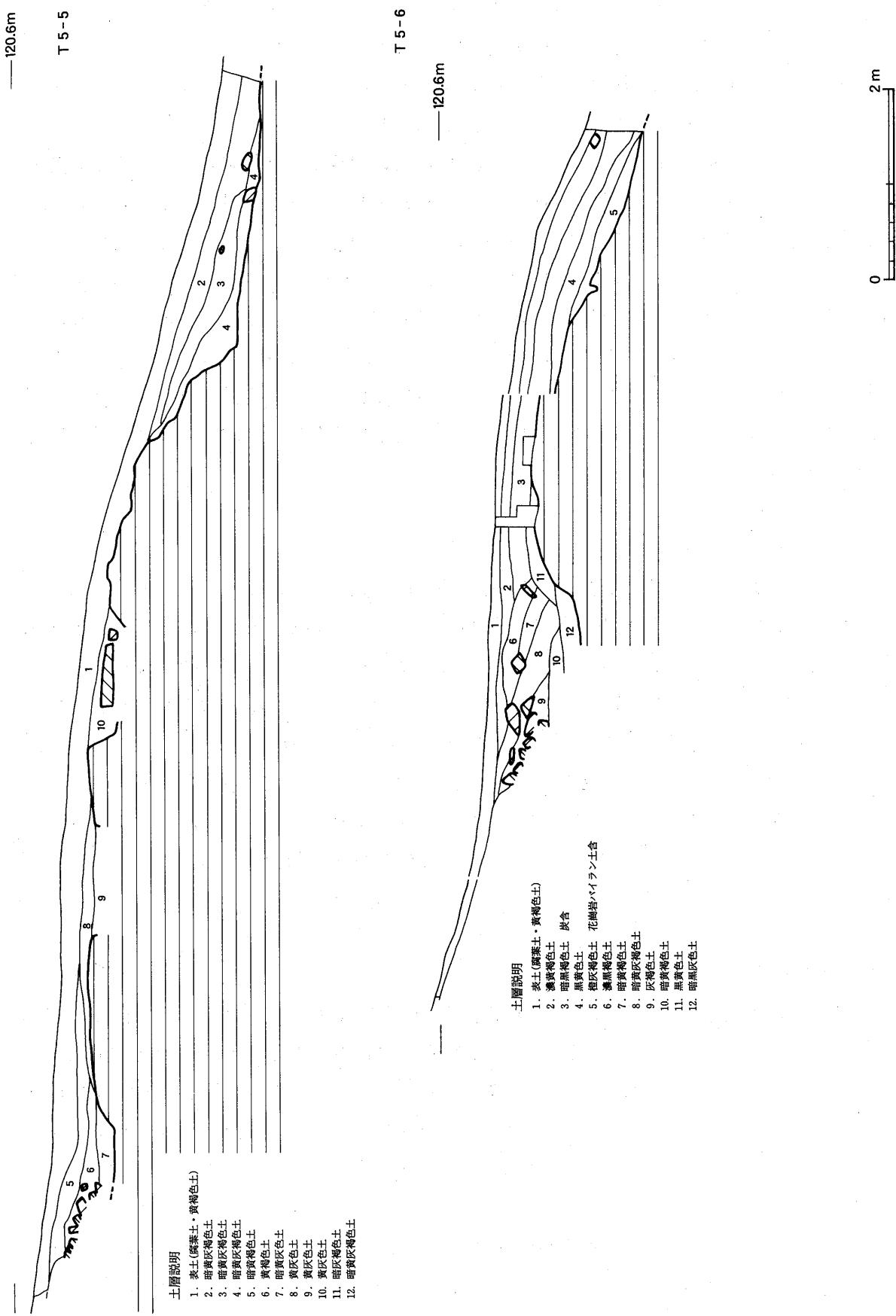
第4図 第5号古墳石立面図 ($S=1:20$)



第5図 第5号古墳T5—1・T5—2・T5—4土層断面図 (S=1:60)



第6図 第5号古墳T5—5・T5—6土層断面図 (S=1:60)



れた立石状施設との関係を、標高などを手がかりに考察すると、T6-1で確認された施設は上段と下段に、T6-2~4で確認された施設は中段と下段に、それぞれ対応すると考えられる。なお、T6-1についてはその確認状況から中段の施設は後世に削平を受けたため消失したと考えられる。T6-2~4についても、上段の施設は消失している可能性が高い。

その結果、本古墳の規模と形状については、直径約23mの円墳で、外表施設として葺石が施されて、三段の立石状施設を伴う三段築成の古墳であると推定された。なお、設置したトレンチにおける葺石の遺存状況からみると、この古墳の建造にあたっては西方を意識している可能性も考えられる。墳丘の高さは西側に設定したT6-5において最も高く約4m、また北側に設定したT6-1で約3.5m、南側に設定したT6-4では約2.8mである。このことから尾根筋上はやや低く、斜面側は高くなっている。ところで、北側に設置したT6-1において幅4m、深さ約1.1mの溝が確認されたが、地形観察などによれば全周はしていなかったとみなされるので、尾根を断ち切っただけの溝と想定される。なお、今回は確認できていないが、地形観察によれば、南側にも同様の溝が存在している可能性が高い。

本古墳に伴う遺物の出土はない。

iii. 新たに確認された古墳（第13号古墳（仮称））（第3図・図版4, 5a）

T5-5では第5号古墳周溝掘り方から南西約2mと、約4mの位置にそれぞれ土壙と箱形石棺が1基ずつ確認された。また、同トレンチとT5-6においてそれぞれ約0.9mと約0.7mの段差を有する地山の削り込み痕跡が認められた。そしてT6-1においては、土層観察によって、第6号古墳の溝の堆積土を約0.6m程度掘り込んでいることが確認された。これらの地山ないし溝堆積土の削り込みと、T5-6で確認した第5号古墳周溝のラインを結ぶと、上述したふたつの埋葬施設を中心として、方形に地山成形された墳丘が想定できた。従来本古墳群では未確認であった方墳1基の存在が推定され、この古墳を第13号古墳と仮称する。本古墳の規模は長さ約10m・幅約7mで、高さは確認できる範囲内で約1.2mである。

iv. その他の遺構（第3図・図版5b, c）

T5-1ではその西端から約2~6mの範囲に掘り込みを確認した。一部掘り下げを行ったところ、東西両端の掘り方の壁はほぼ垂直となることから、竪穴式住居跡と考えられる。図示していないが、埋土中から出土した土器によれば、弥生時代後期のものと考えられる。そのほか、細片のため図示していないが、今回設定した各古墳のトレンチからも同時期と考えられる土器片が出土している。こうしたことから、この第5号、第6号古墳の存在する尾根上にはこの1軒だけでなく何軒かの住居跡が存在している可能性が高い。

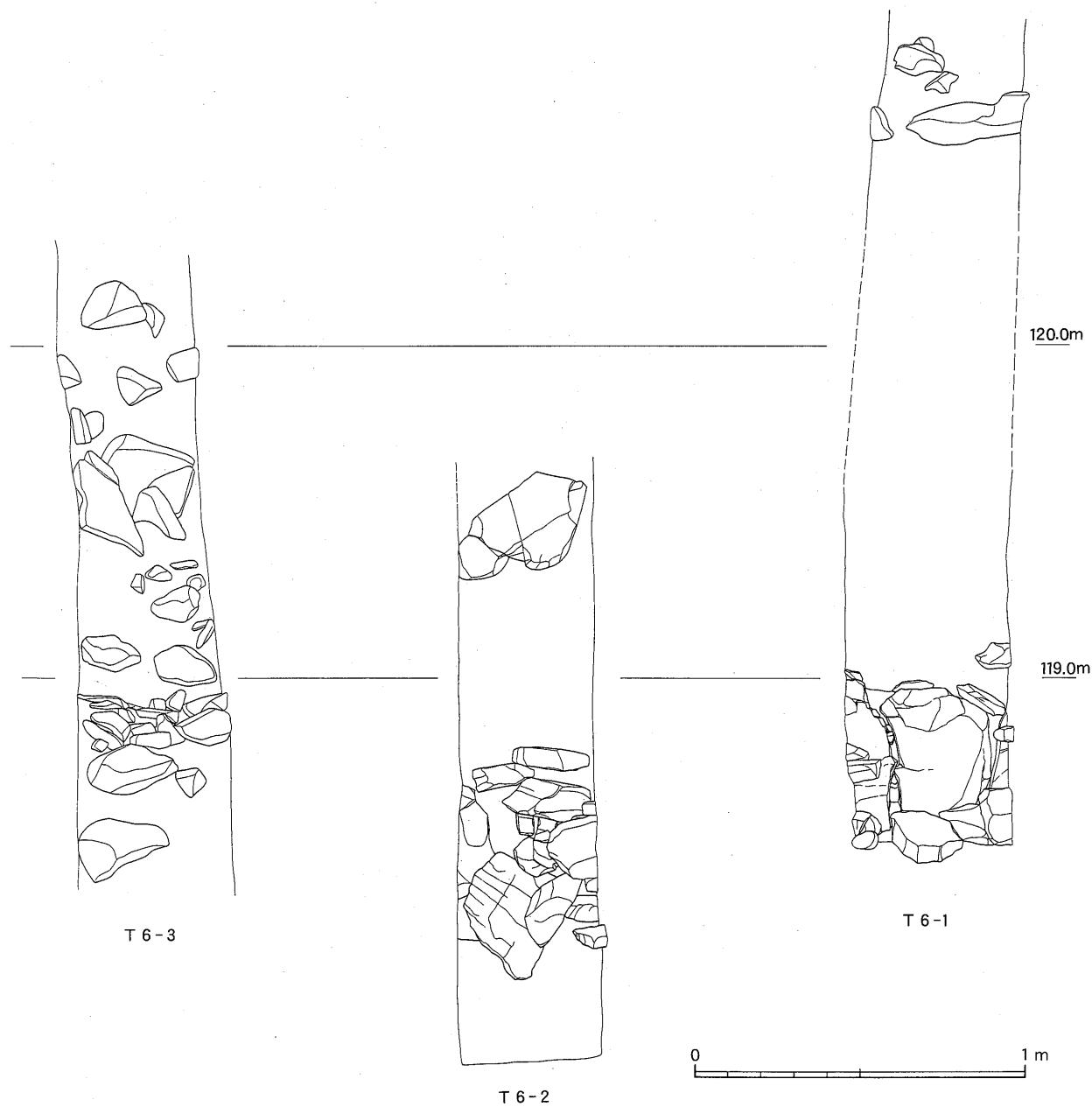
また、T5-3では既に第5号古墳東崖面に露呈していた貝塚についても、良好に遺存していることが確認できた。この貝塚も出土した土器から住居跡と同時期の弥生時代後期に形成されたと考えられる。カキ・ハマグリ・アサリ・シジミ・テングニシを中心に構成されるが、太田川下流域で確認された貝塚と同じ様相である。

v. 小結

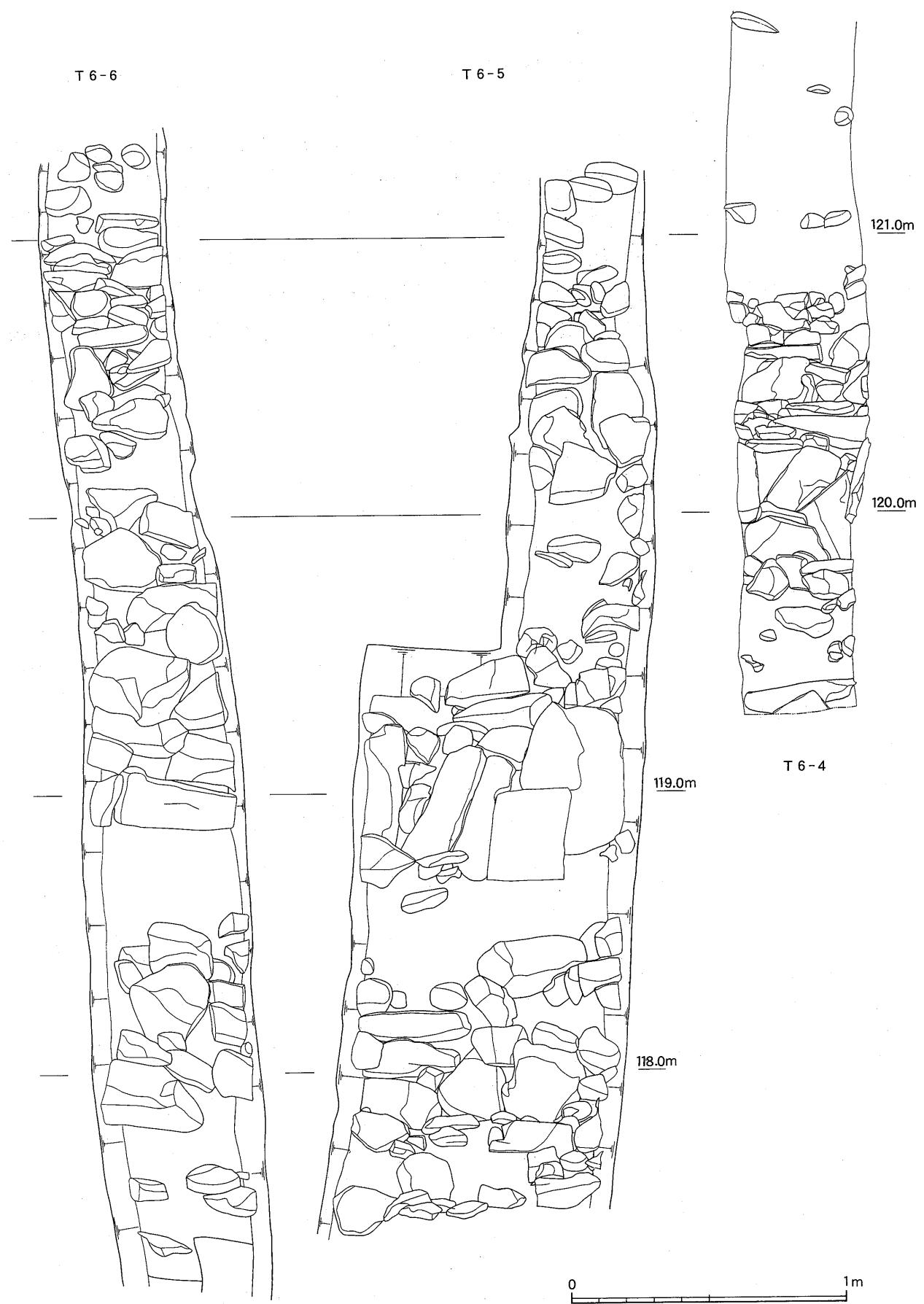
この度の確認調査では調査対象古墳2基の内容を把握できたほか、新たに1基の古墳（方墳）を確認することができた。

第5号古墳は直径約12m、高さ1~1.5mの円墳で、第6号古墳は直径約23m、高さ2.8~4mの円墳である。両古墳とも外表施設として葺石が施されており、しかも良好に遺存していることが確認できた。特に第6号古墳は三段築成を意識したように、三段にわたって立石状施設と平坦面が確認できた。この第6号古墳の葺石の遺存状況をみると、西側が比較的丁寧に構築されていることから、本古墳が西側、太田川が形成した沖積地を意識した築造になっている可能性がある。

このほか、両古墳間に第13号古墳（仮称）が新たに確認できた。その墳形は、本古墳群では未確

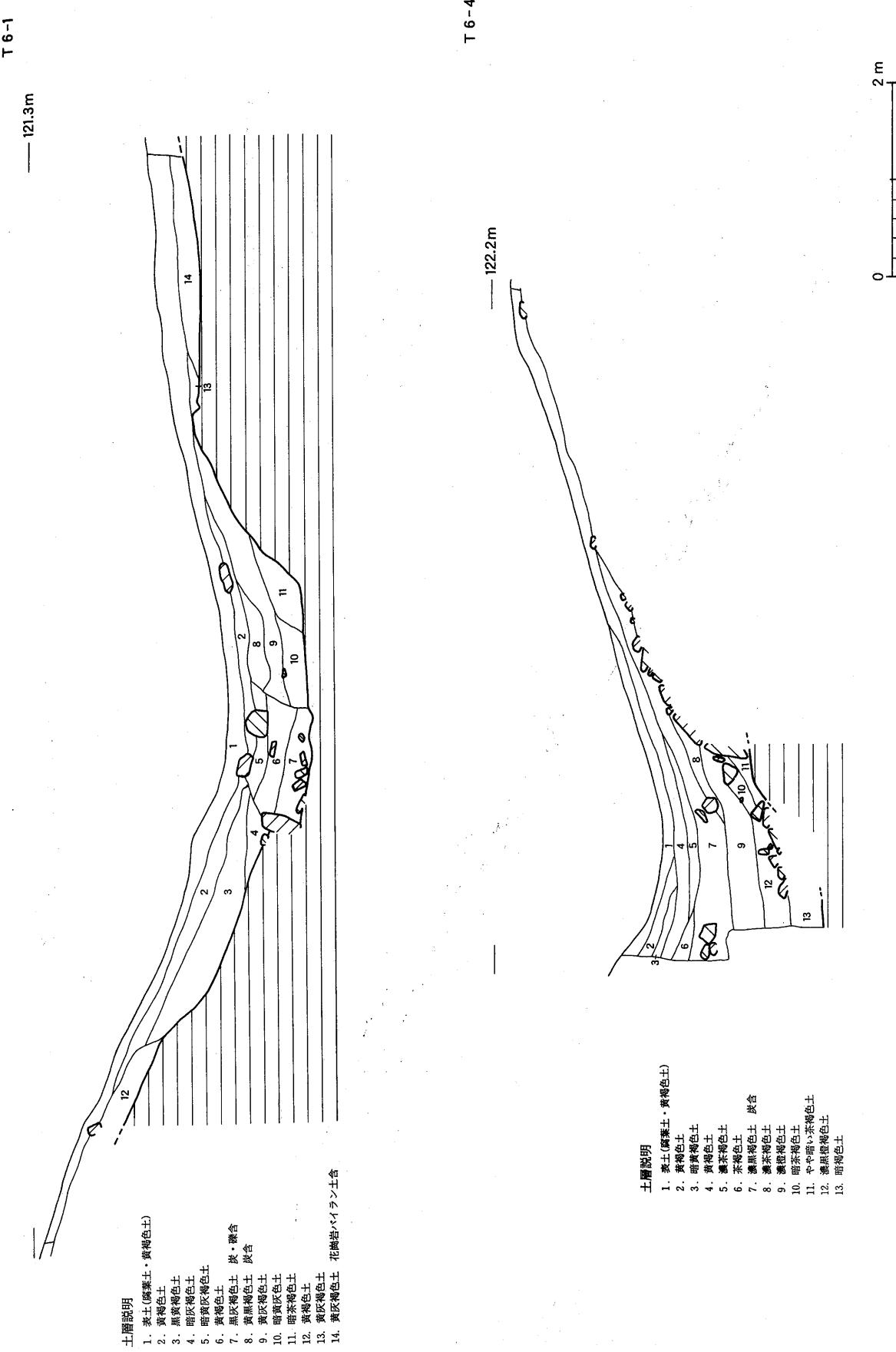


第7図 第6号古墳葺石立面図(1) (S=1:20)

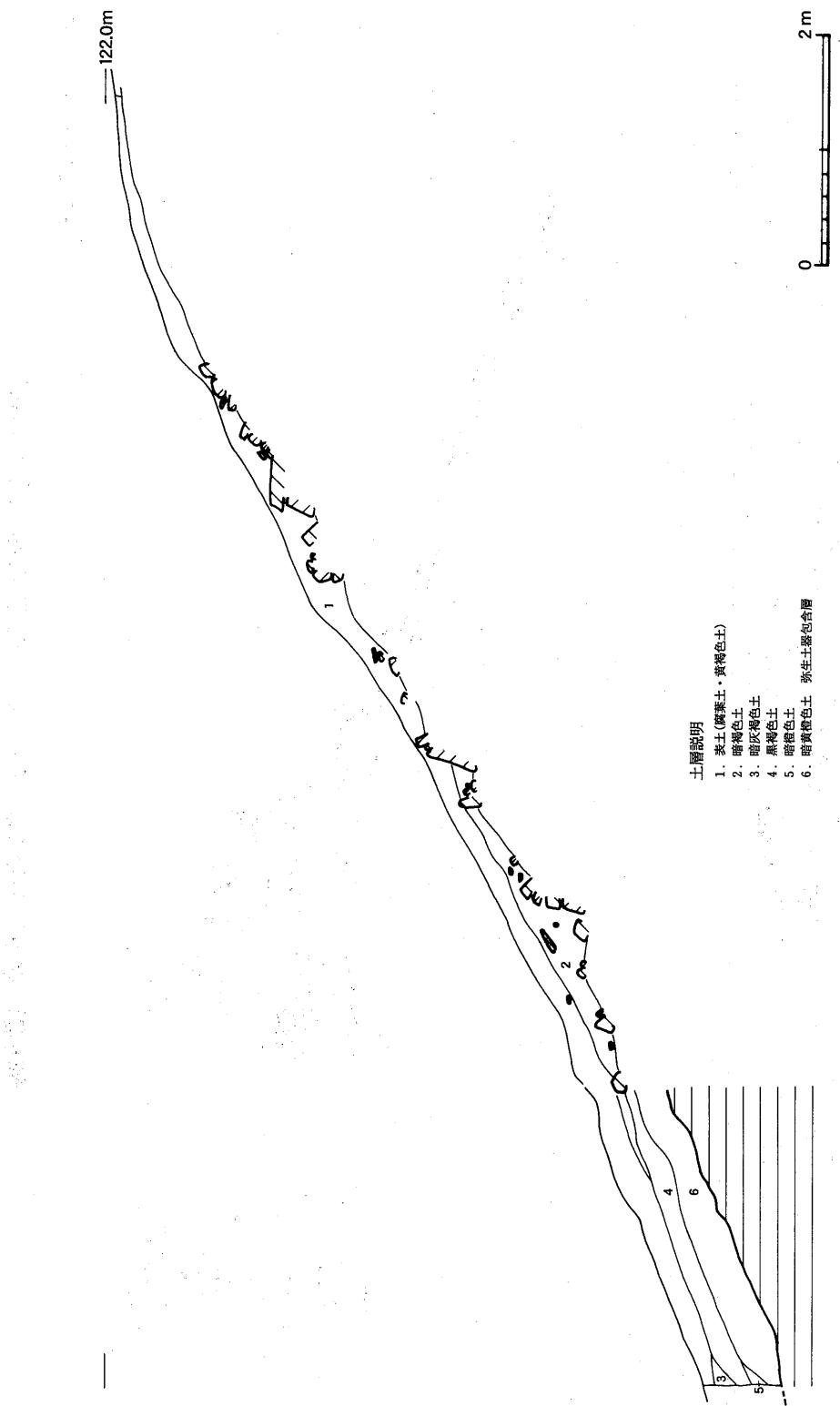


第8図 第6号古墳葺石立面図(2) (S=1:20)

第9図 第6号古墳T6—1・T6—4土層断面図 (S=1:60)



第10図 第6号古墳T6—5土層断面図 ($S=1:60$)



認であった方墳で、規模は長さ約13m・幅約7m、高さ1.2mである。埋葬施設は土壙と箱形石棺が1基ずつ構築されている。

いずれの古墳ともそれに伴う遺物は出土していないため、築造時期は明確にできなかった。ところで、太田川下流域における葺石が施された古墳事例としては、弘住第1号古墳（全長約40mの前方後円墳）（石田 1983），山武士塚第1号古墳（全長33mの前方後円墳）（石井・角田 1995），池の内第2号古墳（直径30mの円墳）（池の内第2号古墳発掘調査団 1988），長尾第2号古墳（直径25mの円墳）（広島市教育委員会 2001）と少ない。池の内第2号古墳事例はほとんど形骸化したもので、弘住第1号古墳事例や山武士塚第1号古墳事例は削平を受けた崖面から観察する限りでは比較的丁寧であった。これらの事例と第5号及び第6号古墳の状況を比較すると、弘住や山武士塚事例に近いといえよう。弘住第1号古墳は4世紀前半、山武士塚第1号古墳は4世紀末頃と考えられており、第5号古墳や第6号古墳は古墳時代前期の範囲内におさまると考えられる。

各古墳の築造順序は、土層観察や各古墳の立地関係などからある程度推察される。第6号古墳の溝堆積土を掘り込んで第13号古墳（仮称）が築造されていることから、第6号古墳よりも第13号古墳（仮称）は新しい。一方、第13号古墳（仮称）の墳丘の一部は第5号古墳の周溝によって削られていることもあり、第5号古墳は第13号古墳（仮称）よりも新しい。このことから、3基の古墳は第6号→第13号（仮称）→第5号の順序で築造されたと考えられる。第6号古墳とその南に築造されている第7号古墳との関係については、T6-4の土層観察による限りでは、第7号古墳の築造が新しい可能性が高い。

またT5-1からは弥生時代後期のものと考えられる住居跡を確認した。第5号古墳東崖面周辺に広がる貝塚を形成した住民のものである可能性が高い。この住居跡が確認された場所は「幅10m・長さ20mの比較的傾斜の緩やかな丘陵鞍部となって」おり、集落跡の存在が推定されていた（潮見 1980）。各トレンチからは弥生土器が多く出土しており、太田川下流域の弥生時代後期の事例を挙げるまでもなく、この1軒だけでなく何軒かの住居跡が存在している可能性が高い。

引用・参考文献

- 石井隆博・角田徳幸 1995 「山武士塚古墳群の測量調査」『芸備』第24集 芸備友の会
石田彰紀編 1983 『弘住遺跡発掘調査報告』（広島市の文化財第25集）広島市教育委員会
池の内第2号古墳発掘調査団 1985 『池の内第2号古墳の発掘調査現地説明会資料』
潮見浩編 1980 『中小田古墳群』（広島市の文化財第16集）広島市教育委員会
広島市教育委員会編 2001 『長尾古墳群発掘調査報告』

2. 平成10年度

発掘調査は、平成11(1999)年2月15日(月)から3月30日(火)まで実施した。対象とした古墳は、第4号古墳である。

地形測量によって推定された墳形に沿って、任意に5本のトレンチを設定した。また、南側に認められる平坦面についても、何らかの遺構の存在する可能性があるため、遺構確認を目的として4本のトレンチを設定した。なおトレンチの名称は、第4号古墳に設置したトレンチについてはT4—○とし、頂部にT4—1を設置し、ここから北側を向いて時計周りにT4—2からT4—5とした。また南側平坦面上に設定したトレンチについてはT1999—○とし、南側に設置したT1999—1から北側を向いて時計周りにT1999—2からT1999—4とした。

i. 第4号古墳(第11図)

第4号古墳は「第3号古墳の南約25mに位置し、墳頂部の標高は120mである」。「北側には、幅10m・長さ8mの突出部が認められる」「帆立貝式古墳」で、「後円部の直径約18m・高さ約4m・造り出しと後円部の比高は2m」(潮見1980)と推定されている。この昭和54年の調査の段階で推定された墳形及び規模を確認する目的で、墳丘頂上部にT4—1、くびれ部にT4—3、突出部にT4—4を設定した。また東西墳丘斜面にそれぞれT4—5、T4—2を設定した。

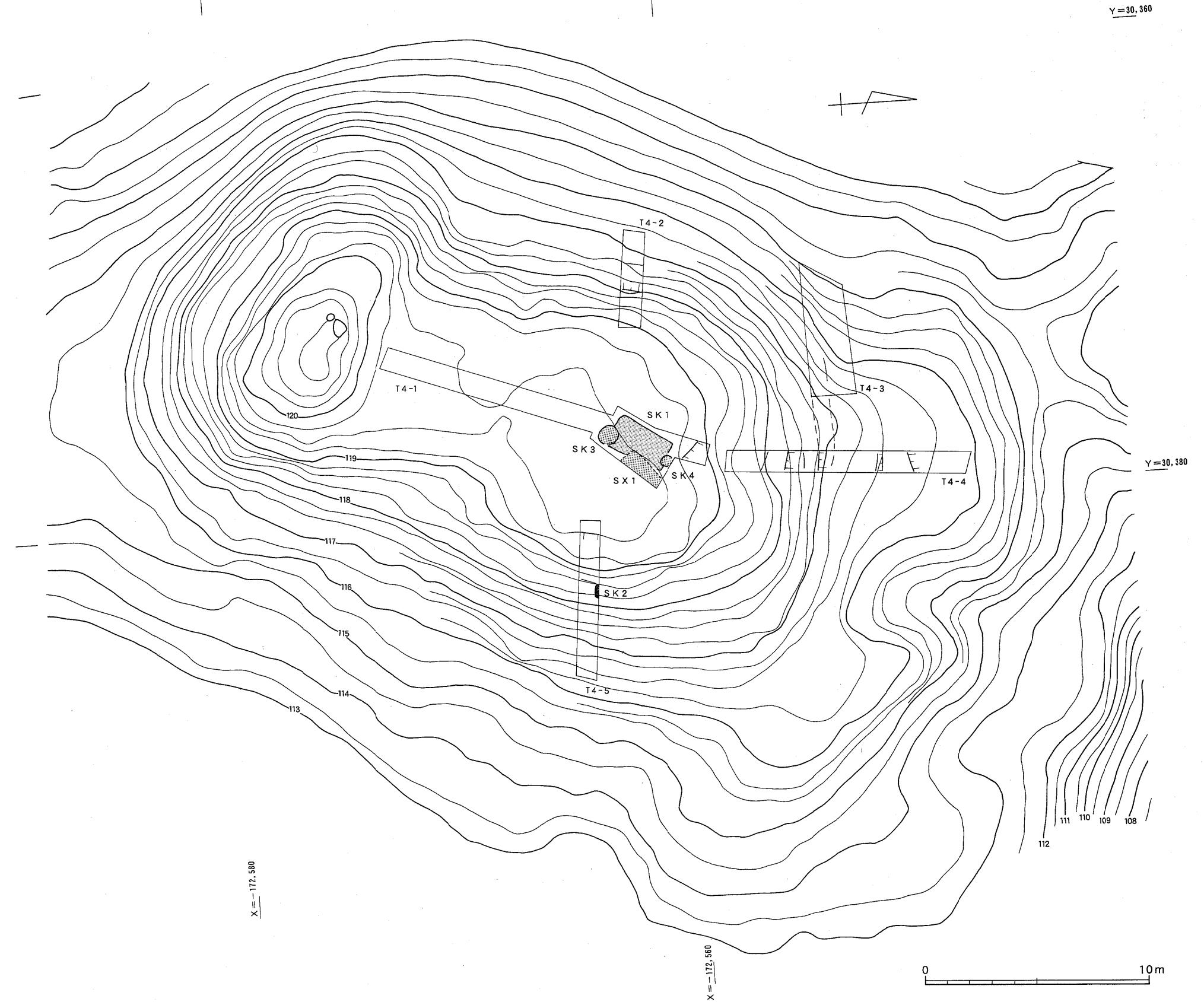
a. 墳形と規模(第11、12図・図版13、14)

調査の結果、T4—1の北半部において本古墳に伴うと考えられる埋葬施設を確認したが、この埋葬施設は現地表面下約10cmで確認したこと、またこの埋葬施設自体も深さが5~40cm程度しかなかったことから、本古墳の墳頂平坦面は、後世、恐らく後述するように中世以降の地形改変により削平を受けていると確認された。また南側には地形観察で「中世の郭の築造によって埋め立てられたと推定され」(潮見1980)たように丘陵尾根を立ち切った堀切状の溝が遺存する可能性もあったが、その痕跡も留めていなかった。

T4—3、T4—4においても、後述するように中世山城築造に伴う堀切跡が確認されたため、この2本のトレンチでは推定された突出部の存在については確証が得られなかった。

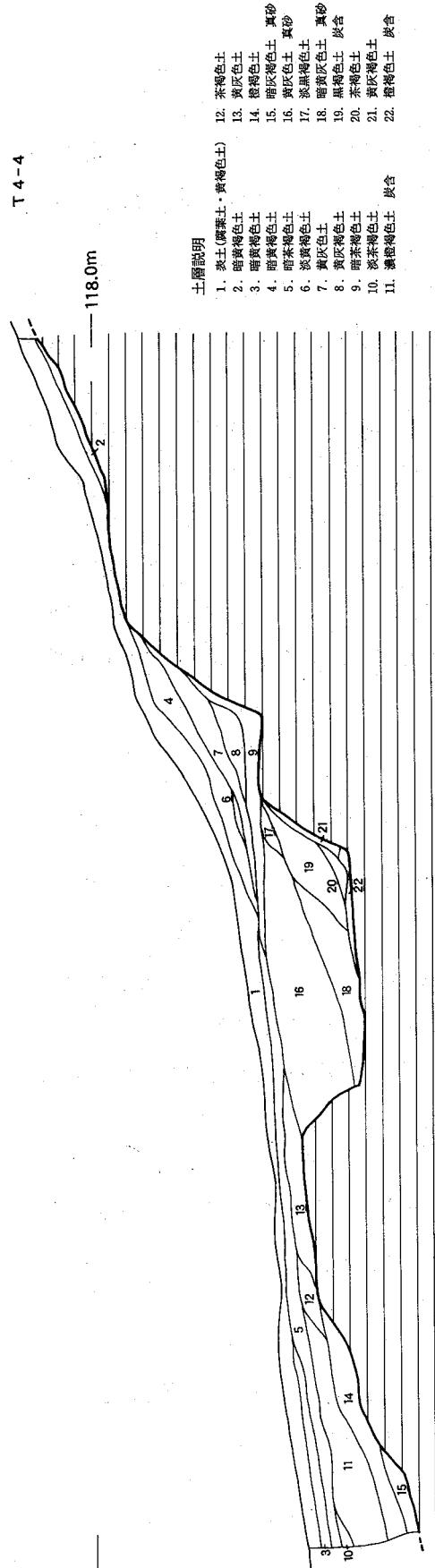
一方、墳丘斜面に設定したT4—2、T4—5においては本古墳に伴う外表施設は認めることができなかった。しかしながら、墳頂平坦面端から、それぞれ約2.5m下と、約2.0m下の位置で傾斜変換点と地山を削り出した平坦面が確認された。これを墳端とみなすこともできるかもしれないが、後述するように墳頂部が中世以降大幅に削平を受けていたこと、また本古墳の周辺には中世山城築造に伴って形成された郭と考えられる平坦面や堀跡が地形観察で認められることから、この傾斜変換点と平坦面が本古墳に伴うものかについては確認できなかった。

以上のことから、今年度の調査対象である第4号古墳については、その築造後古墳周辺の地形改変が行われたという結論に至った。後述するように突出部と推定された箇所については中世山城築造に伴う堀切及び郭によって、円丘部についても郭の築造によって、削平されていたことから、本古墳の墳形並びに規模の詳細については明確にしえなかつたのである。しかし、前述したT4—2とT4—5において確認した傾斜変換点が本古墳の墳端を示すと仮定した場合、円丘部の直径について

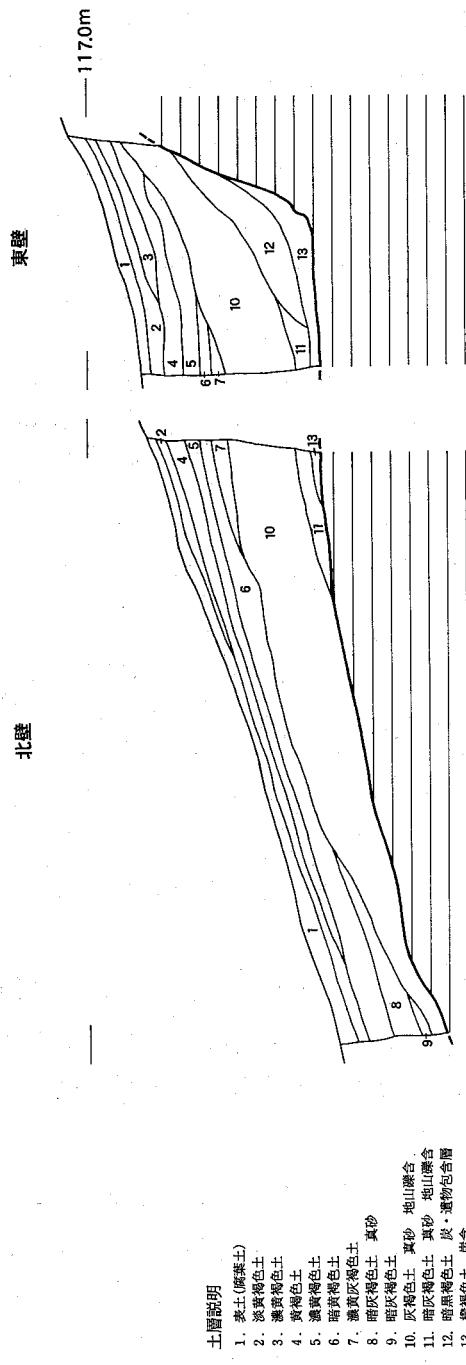


第11図 第4号古墳トレンチ配置図 (S=1:200)

T 4-4



T 4-3



第12図 第4号古墳T 4-3・T 4-4土層断面図 (S=1:60)

は16mほどの規模になろう。

b. 埋葬施設（第13図・図版11, 12）

前述のとおり、T4-1の北半部において第4号古墳に伴う埋葬施設と考えられる平面形態が長方形を呈する墓壙を確認した。SK1とする。SK1の掘り方は、現状で長さ約2.8m、幅は北側で約1.2m、南側で約1.4mである。深さは南側で約40cm、北側では約5cmであった。墓壙の主軸はN29°Eである。この墓壙内においては木棺痕跡など認められなかったものの、土層観察によると、長さ約170cm、幅65cmの木棺がほぼ中央に納められていることが確認できた。床面に赤色顔料などの塗布は未確認である。

SK1内からは鉄剣と鉄斧が出土した。これらは北側掘り方から南へ約60cmの位置で、南北小口側掘り方に対して平行、すなわち墓壙主軸方向に直交して、南側に鉄剣、北側に鉄斧がほとんど接した状態で確認された。これらの出土状況についてさらに詳述すれば、鉄剣は切先側を西方向に向けて刃を立てた状態であり、また鉄斧は刃部を東方向に向け、剣同様あたかも立てたような状態で出土した。土層観察及びこれらの出土状況から、これらは木棺内に副葬品として、木棺の小口の内壁に立てかけられて埋置されたと考えられる。被葬者の埋葬頭位方向については墓壙床面の高低差から言えば北側が高いことから、北頭位であったと推定される。このことからすれば、副葬された鉄製品は被葬者の頭部付近に置かれていたのであろう。

c. 出土遺物（第16図・図版40）

第4号古墳に伴う遺物としては、SK1内から出土した鉄剣と鉄斧がある。そのほかに、T4-5の覆土中から須恵器片が2点出土しているが、本古墳に伴うものかどうかについては不明である。

鉄剣（1） 全長36.8cm、茎部4.2cm、刃部幅最大3.6cm、茎部幅2.2cmである。剣身両面中央部に鎬が認められる。茎部には直径4mmの目釘穴が1個穿たれている。重量は284.6gである。

鉄斧（2） いわゆる袋状を呈する。全長は13.7cm、刃部幅7.4cm、袋部厚さ2.8cm、幅6.2cmである。重量は388.0gである。

須恵器（3） T4-5から2点出土しているが、胎土や色調からほぼ同一個体と推定されるので大きい破片1点のみを図示した。甕か壺の破片と考えられる。内外面とも丁寧に磨り消しが施されている。色調は内外面とも黒灰色を呈し、胎土は精緻、焼成は良好である。

ii. その他の遺構（第14, 15図・図版15~17）

これまで見てきたように、本古墳については築造後地形改変が行われていることが確認された。

また第4号古墳南側平坦面に設定したトレンチも含めると、中世段階と、弥生時代と、時期或いは性格が不明な遺構が確認されている。

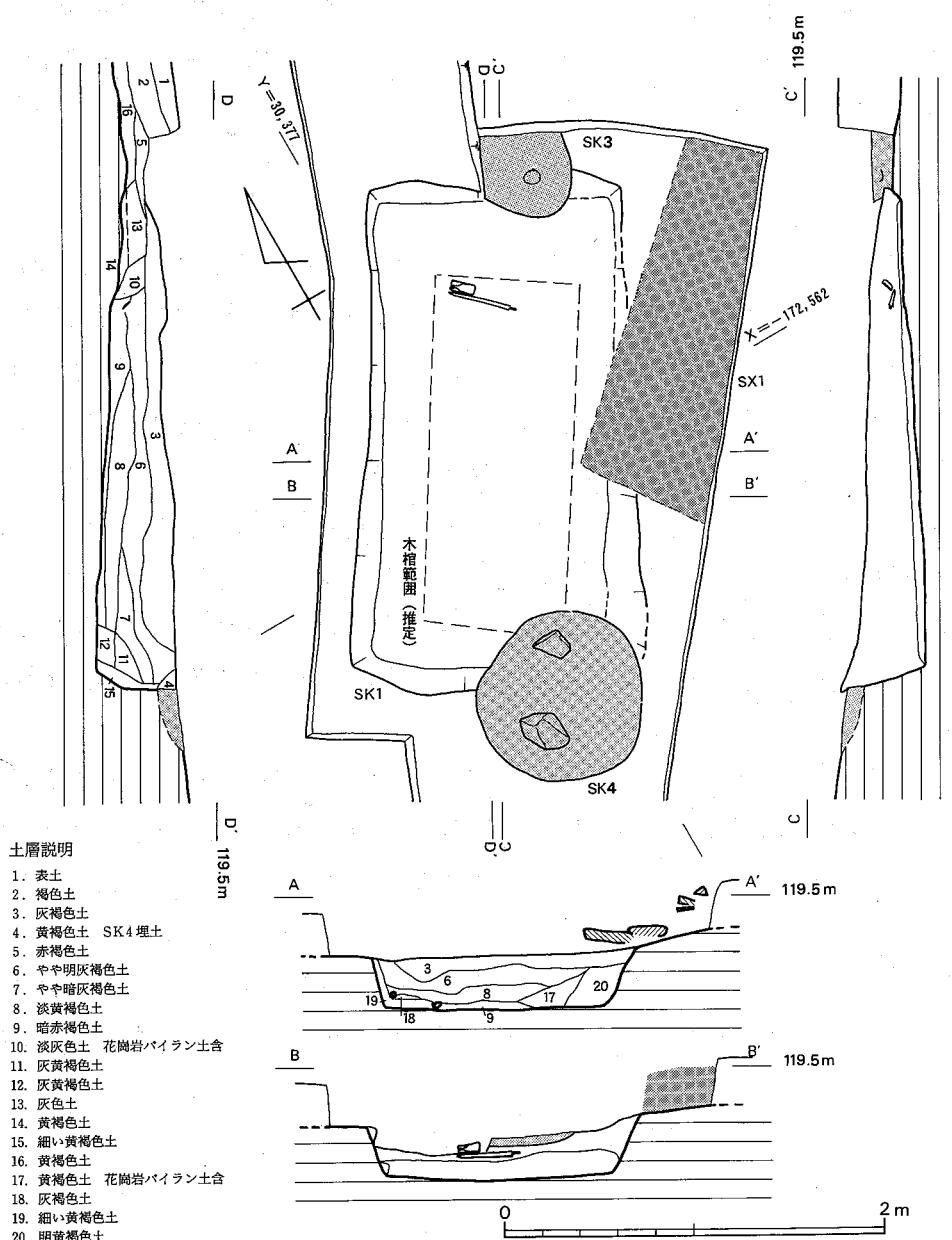
a. 中世

中世段階と考えられる遺構には、その確認状況や埋土中から出土した遺物から、T4-3やT4-4で確認された中世山城築造に伴う堀切跡と、T1999-4で確認された3条の堅堀跡がある。

堀切跡はT4-4では南北に2箇所確認されたが、土層観察によれば南側の堀切跡は埋められた形跡があり、恐らくは当初幅約3m・深さ0.7~2mの南側堀切を穿ち、その後この堀切を埋め立て長さ約5m・幅約8mの平坦面（郭）を形成してその北側に再度堀切を穿ったと推定された。なおT4-3で確認された堀切については位置関係からT4-4の南側の堀切跡に対応すると考えられる。

また、T1999-4で確認された3条の堅堀跡は、南から堅堀aが幅約2m・深さ約0.7m、堅堀bが幅約1.4m・深さ約0.8m、堅堀cが幅約2.8m・深さ約0.5mの規模のもので、三者とも断面形状が箱築研形状を呈している。この第4号古墳南側平坦面周辺の地形観察によれば、この堅堀跡群のいずれもが丘陵東西斜面まで続いていることがその痕跡から確認することができる。

以上の遺構の確認状況によれば、第4号古墳墳頂部で確認された削平も中世山城築造による郭の



第13図 第4号古墳埋葬施設実測図 (S=1:40) 薄網目は中世遺構、濃網目は石積基壇遺構

形成に伴ってなされたと考えられ、この第4号古墳及びその周辺には墳頂部を主郭とし、その北側に堀切や郭、また南側に豊堀を配した山城跡が存在していたと考えられる。

その他、第4号古墳の周辺地形観察によれば、推定突出部の東側に豊堀及びその東側に郭が確認されたほか、その下方や周辺にも幾条かの豊堀や小郭が認められた。

ここで確認された山城跡は、『芸藩通志』に記載されている小田村狐城と考えられる。

b. 弥生時代

T1999-1から弥生時代のものと考えられる土坑（SK5）と豊穴住居跡（SH1）を1基ずつ確認した。SK5の規模は直径約1.4m・深さ0.5mである。貯蔵用の土坑と考えられる。SH1については未発掘で円形プランを確認しただけであるが、その形状や遺物の出土状況などから豊穴住居跡と判断したものである。それぞれの遺構の埋土中及び確認面からは弥生土器片（第16図4～7）が出土している。その特徴からいざれも後期後半段階のものと考えられ、遺構の所属する時期についてもほぼ同時期と推定される。

c. 時期及び性格不明の遺構

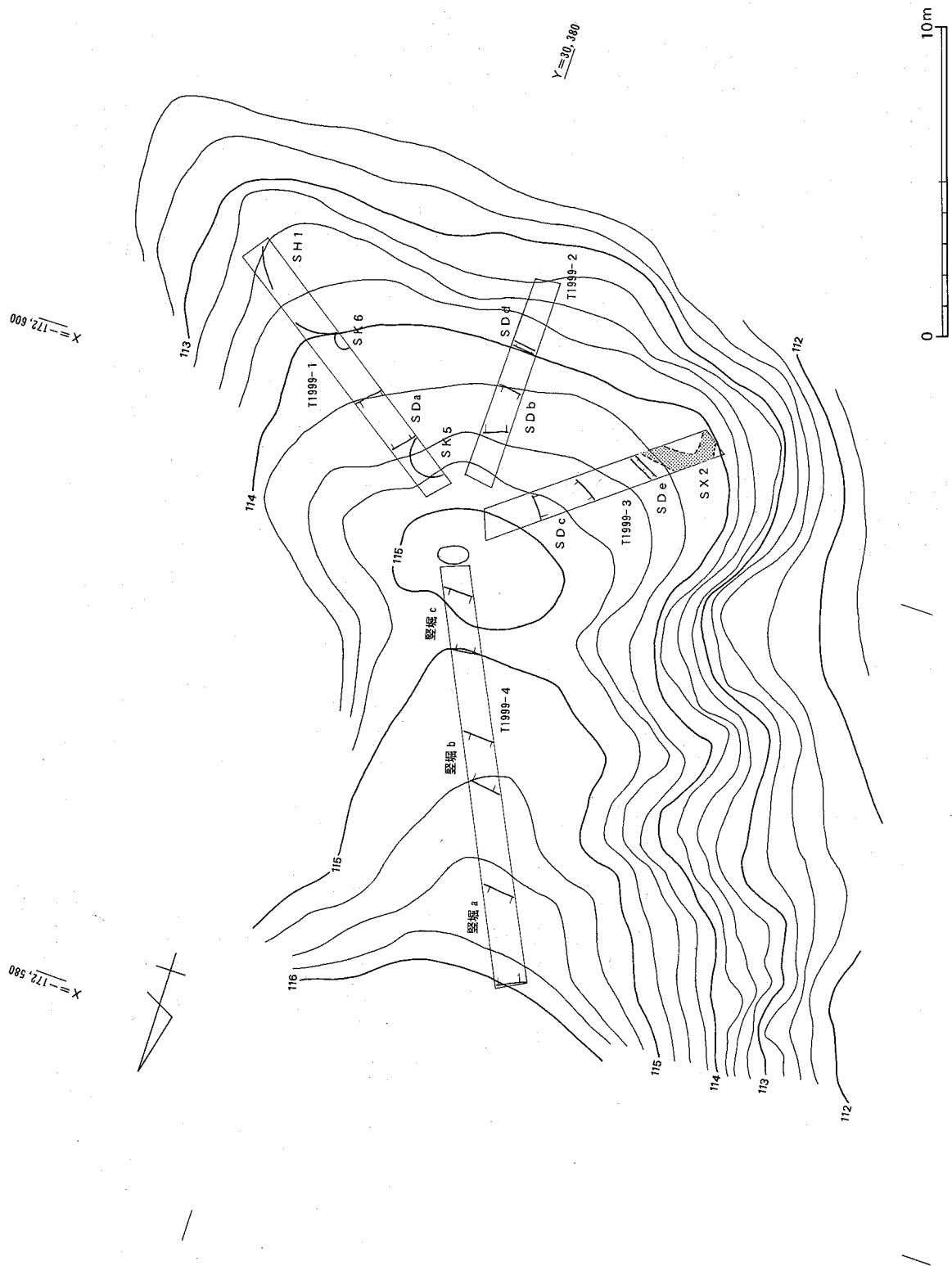
時期不明及び性格不明の遺構には、T4-1からの土坑2基（SK3, SK4）、基壇状石積遺構1基（SX1）、T4-5からの土坑1基（SK2）、T1999-3からの石積状遺構1基（SX2）及び溝状遺構2条（SDc, SDe）、T1999-1からの溝状遺構1条（SDa）、土坑1基（SK6）がある。

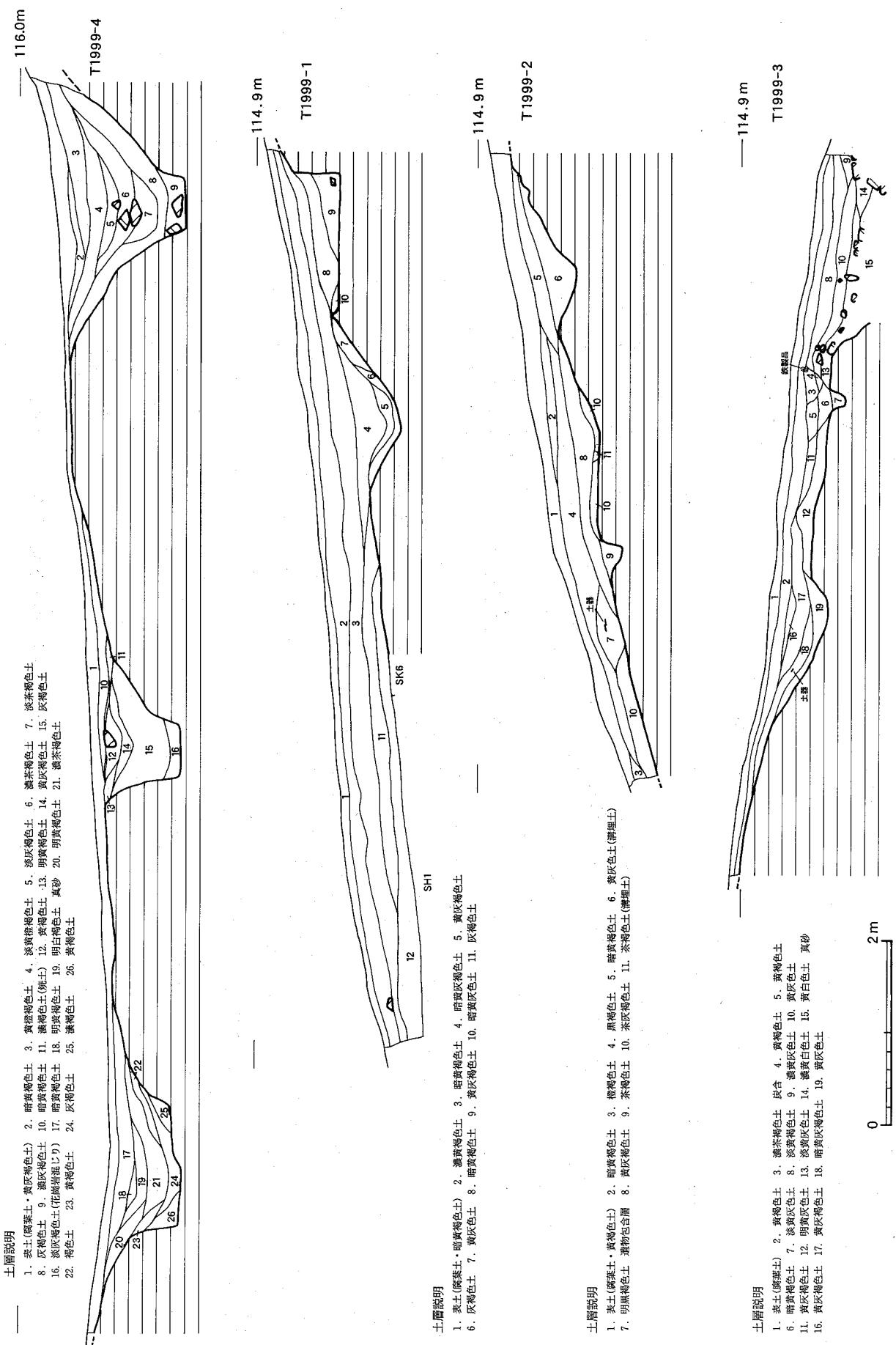
T4-1で確認されたSK3は規模が直径約0.5m・深さは10cm程度の断面鉢形を呈し、その中央部からは椀状の銅製品（第16図19）が出土している。また同SK4は直径1.35～1.4mの規模で、埋土中に礫が見られた。未掘のため深さは不明である。いざれも第4号古墳の埋葬施設の掘り方を一部壊しているが、その構築は墳頂部が削平を受けた以降に形成されており、中世以降のものと考えられる。また、SX1についても検出状況は土坑2基と同様であるが、覆土中からは近世代と考えられる瓦の破片が見つかっていることから、土坑よりも新しい時期になる可能性もある。規模は現状で東西約0.8m以上、南北約2m以上のものである。

T1999-1のSDaは幅1.8m・深さ0.4～0.6mの規模のもので、T1999-3においても同規模である幅約1.6mのSDcを確認した。このうちT1999-1のSDaの埋土中からは弥生土器片が出土しているが、土層観察から見ればその南北の弥生時代の遺構が埋まりきってから掘られていると見られるので、時期は下る可能性がある。両者の関連を確認するために設置したT1999-2では、この溝状遺構と考えられる痕跡（SDb）は確認できたものの、この3箇所で確認された溝状遺構が同一なものかどうかについては明らかにできなかった。もし三者が一体であるとした場合でもその性格についてはよくわからなかった。

T1999-3のSX2の東側には幅約25cmの溝状遺構SDeが確認された。これについてはT1999-2からも同規模の溝状遺構SDdが確認されているが、位置関係から両者はつながるものと考えられる。この溝状遺構とSX2の関連についてはその可能性は否定できないけれども、不明である。T1999-3において確認されたSX2については、東西約2m以上、南北約1.4m以上の方形を呈して

第14図 第4号古墳南側平坦面トレーンチ配置図 (S=1:200)





第15図 第4号古墳南側平坦面トレーンチ土層断面図 (S=1:60)

いるが性格については不明である。埋土中からは釘が出土していることから（第16図17、18），中世以降の段階のものと考えられる。

d. 出土遺物（第16図・図版40）

弥生土器（4～7） いずれも小破片で口縁径は復元できていない。4・5は甕，6は複合口縁の壺，7は高坏である。4は逆ハの字状に外反する口縁で，端部は面をもち，強く横ナデして少し窪む。内面には横方向，外面には縦方向の二枚貝による条痕文を施す。橙色を呈し，胎土は砂粒を多く含み，焼成は良好である。5はあまり張らない体部から口縁部が直線的に逆ハの字状に外反する。端部は面をもつ。外面にススが付着する。体部内面はヘラ削りを施す。にぶい黄橙色を呈し，胎土は砂粒を多く含み，焼成は良好である。6は内傾する複合口縁部の外面に波状文を施す。内外面ともナデ仕上げ。橙色を呈し，胎土は細砂粒を含み，焼成は良好である。7は内湾する口縁で，端部は僅かに内側に拡張する。外面に4条，口縁上端面に3条の凹線文を施す。にぶい黄橙色を呈し，胎土は僅かに砂粒を含み，焼成は良好である。

7は中期末葉頃（妹尾編年の安芸IV-2様式（妹尾1992））と考えられるほか，4～6は後期中頃（若島編年のII-2-①（若島2002））と考えられる。

土師器（8） T4-4出土。復元底径6cmの皿の破片で口縁部は欠損する。底部は糸切り離し。にぶい黄色を呈し，胎土は精緻，焼成は良好である。

鉄釘（9～18） T4-3とT4-4の堀切跡埋土中から出土したほか，豎堀が確認されたT1999-4埋土中やT4-1埋土中からも出土している。いずれも遺存状況は一部欠損するか折れ曲がっている。長さは6cm以上，重さ5gを超えるものと，長さ4cm程度，重さ2g前後のものに分けることができる。

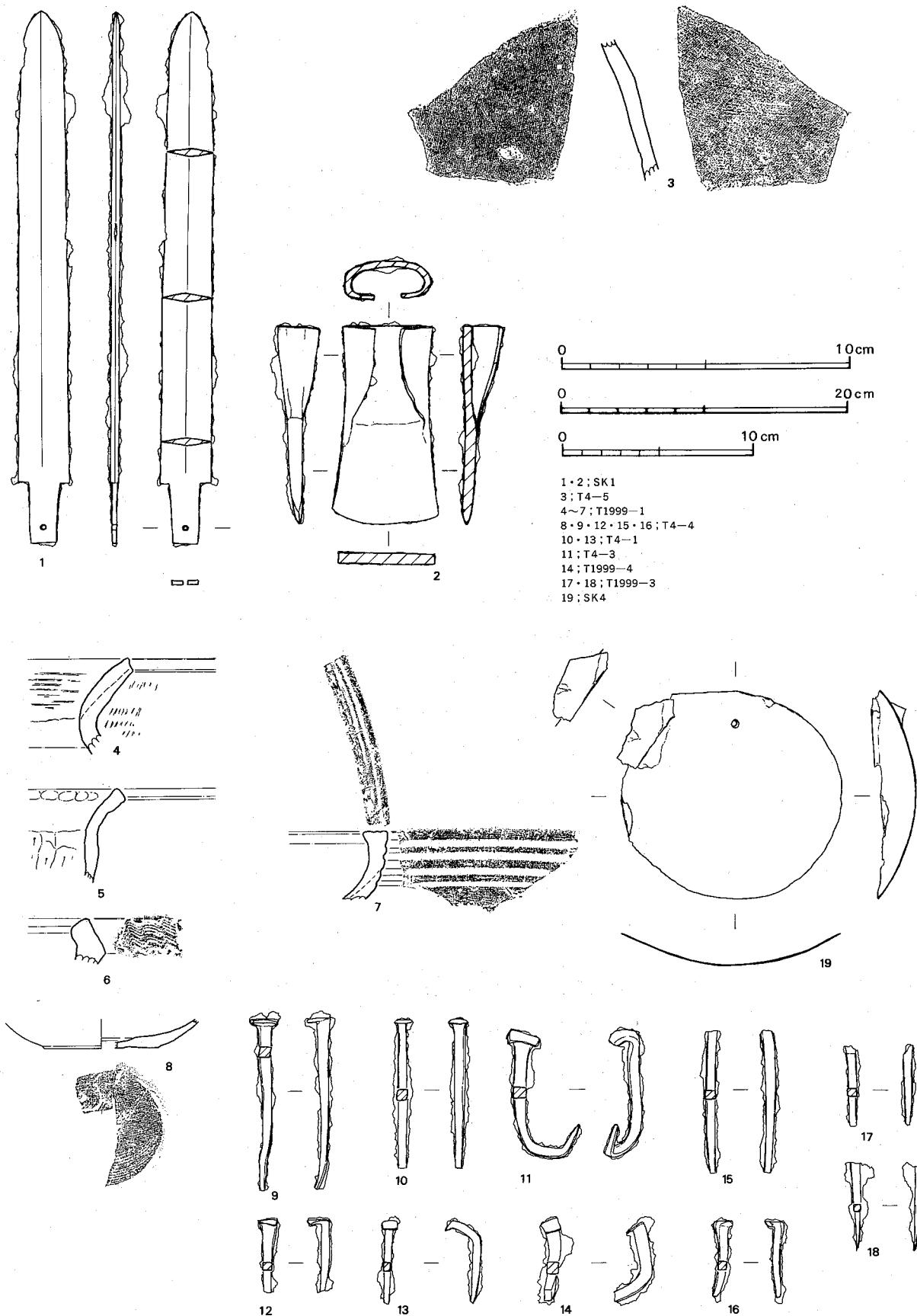
銅製品（19） SK4から出土。直径7～7.5cm，深さ1.3cm程度の椀状を呈する。底部には径2mmの穿孔が認められる。縁の一部が折れ曲がる。用途不明品。

iii. 小結

調査の結果，第4号古墳においては中世山城の築造に伴って大規模な地形改変がなされていたため，その墳形・規模については明確にできなかった。すなわち，従来墳形として考えられていた帆立貝式古墳とするまでの資料は得られなかった。今後整備にあたっては，今一度確認調査を実施するなど，慎重に取り扱う必要がある。

墳頂平坦面には削平を受けながらも埋葬施設が良好に遺存していたことが確認できた。この埋葬施設の規模は現状で長さ約2.8m・幅1.2m～1.4mで，土層観察から長さ約170cm・幅65cm程度の木棺が埋置されていたと考えられる。副葬品として剣と斧が1点ずつ確認された。

本古墳の築造時期については，この2点以外伴う遺物がないので，この遺物や周辺古墳の状況から推測するしかない。この第4号古墳の丘陵上には近接して，第3号古墳と第2号古墳が築造されているが，発掘調査がなされた第2号古墳は豎穴式石室を埋葬施設とし，大量に出土した副葬品から5世紀中葉頃の築造と推定されている。それに比べ，前述のとおり，本古墳は木棺直葬であるこ



第16図 平成10年度遺構状況確認調査出土遺物実測図
(1・2; S=1:4, 9~19; S=1:2, 3~8; S=1:3)

と、しかも副葬品として剣と斧が1点ずつのみであること、また、各鉄製品は第2号古墳出土のものに比べて古い様相を呈していることから、第2号古墳の時期よりももう少し古い時期、4世紀代に築造されたと考えられる。

なお、T4-5出土須恵器片が仮に本古墳に伴うとした場合、その内外面が丁寧に磨り消されているなど、古式の様相を呈していることから5世紀中頃から後半頃までのものと推定されるが、鉄製品から推定される年代観とは少し開きがあるし、本古墳は後世の地形改変が認められたことは既に述べたとおりであるからこの須恵器片を持って本古墳の築造時期とすることは直ちにできないであろう。今後の調査に期待したい。

ところで、本古墳の位置を中心に中世の山城（狐城）が築造されていることが明らかとなった。発掘調査によって、主郭と考えられる幅9m・長さ14mの平坦面を中心として、その南側には幅9m・長さ5m・高さ2m程度の高まりがあり、見張りの機能を果たしていた可能性がある。そのほか、その南には堅堀が3条めぐっていた。一方、北側裾部には堀切が認められたが、それを埋めて長さ5m・幅8mの小郭を形成していること、その北側に新たに堀切を穿っていることも確認でき、この山城は幾度か拡張を繰り返しているものと推定された。

そのほか、周囲の地形観察によれば、第4号古墳の東西斜面に堅堀の痕跡が認められ、この新たに造り出された小郭の北東側には堅堀とほぼ同規模の長さ4m・幅7mの小郭が2段形成されていると推察される。また、第3号古墳との間にも、堀切跡が存在すると考えられた。

引用・参考文献

- 潮見浩編 1980『中小田古墳群』（広島市の文化財第16集）広島市教育委員会
妹尾周三 1992「安芸地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社
若島一則 2002「広島湾岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌』I 財団法人広島市文化財団
賴杏坪・加藤景續ほか編纂 1825『芸藩通志』巻74

3. 平成11年度

発掘調査は、平成12(2000)年2月28日(月)から3月30日(火)まで実施した。対象とした古墳は、第3号古墳である。

地形測量によって推定された墳形に沿って任意に5本のトレンチを設定した。各トレンチの名称についてはT3—○とし、T3—1から北側を向いて時計周りにT3—2からT3—5とした。

i. 第3号古墳(第17図)

第3号古墳は、「第2号古墳の南約20mに位置し、墳頂部の標高は115.5mで、その規模は直径東西12.5m・南北11m・高さ2mの円墳である。墳丘は尾根に直交する南北両側を切断して築造されている。(中略) 墳頂部(ママ)には盜掘によるとみられるくぼみがある」(潮見1980)。

昭和54年の段階で推定された墳形及び規模を確認するため、墳丘頂部とされた平坦面を除いて、丘陵尾根線上にT3—1とT3—3を、またそれにほぼ直交方向にT3—2とT3—5を設定した。そのほかに、T3—3とT3—5との間の、北東方向にT3—4を補足的に設定した。

a. 墳形と規模(第17~19図・図版18, 21)

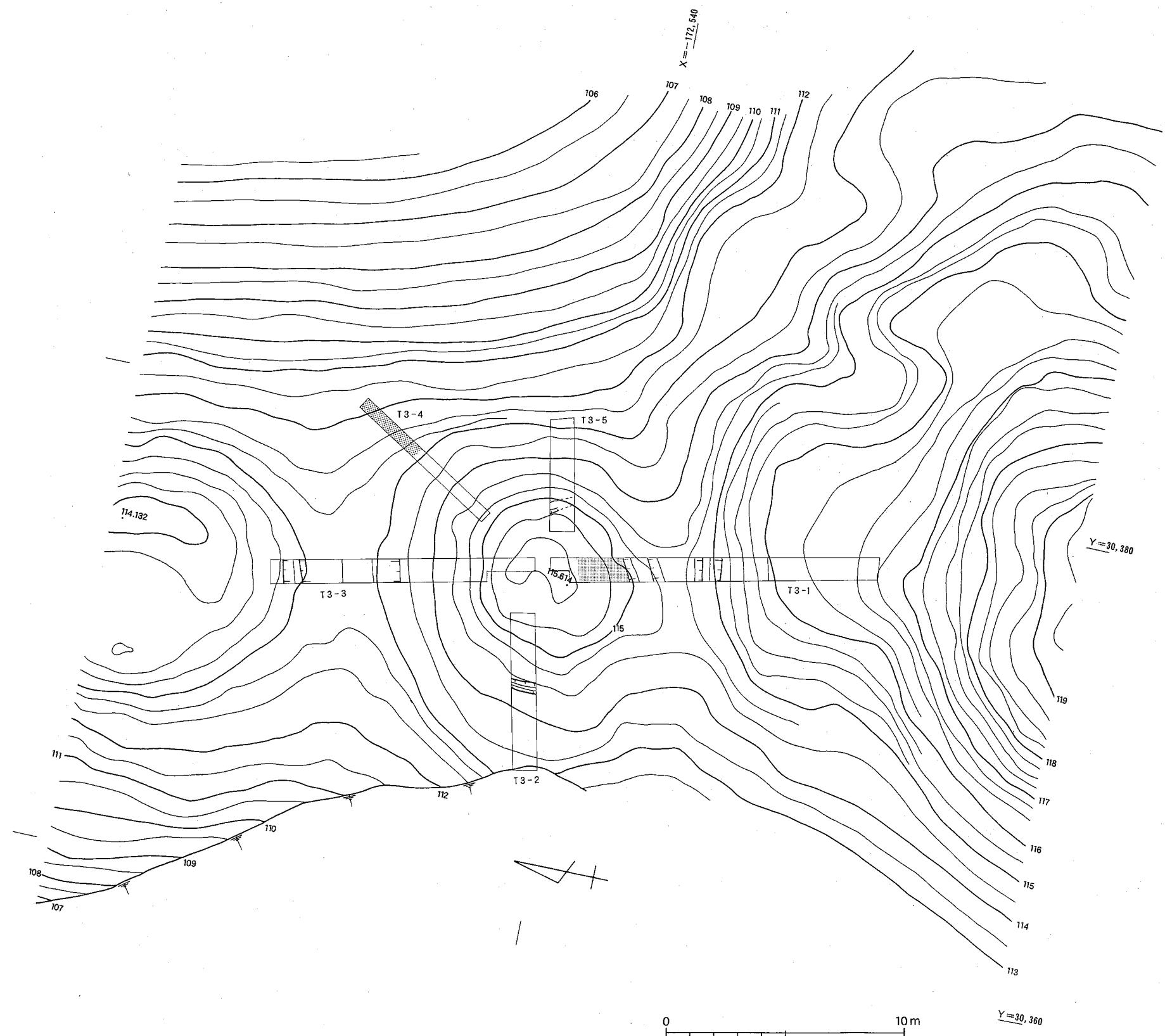
調査の結果、T3—1から、現地形で墳丘斜面とみなされる箇所、つまりトレンチ北端から2.5m南までの範囲において埋葬施設を確認した。ただし、その南側についてはT3—1のほぼ中央で確認された幅約4m、深さ約1mの二段掘りの溝状遺構によって削り取られ、また残存した埋葬施設についても半壊状態であった。この溝状遺構については、その埋土中からその掘り込まれた時期を確定できる遺物は小刀状鉄製品(第21図12)のみであったが、前年度の調査成果でみたとおり本古墳の南に隣接する第4号古墳の立地する箇所は中世山城の主郭として利用されていること、第4号古墳の北側で確認した堀切跡にはほぼ平行していること、土層観察などから、中世段階山城築造に伴う堀切跡であると考えられる。このことから、もともと本トレンチで確認した埋葬施設を中心として築造された第3号古墳が、中世段階に山城築造に伴う堀切の掘削によって南半分が削り取られたものと推定された。つまり、本古墳の現地形は中世以降に改変されたものであるため、本来の形状を留めておらず地形観察のみでは本古墳の墳形と規模の推定は困難であった。

T3—2では、幅約50cmの溝状遺構を伴う傾斜変換点を確認した。その溝状遺構の埋土中から土器片が出土しているものの細片であるため時期の確定はできなかった。そのため本古墳に伴うものは不明である。T3—3では、北側斜面において本古墳に伴うと考えられる傾斜変換点は確認できなかったものの、本古墳の北側に位置する第2号古墳との間には溝状遺構が確認された。しかし、本トレンチの土層観察によれば、土砂の堆積状況は先述したT3—1のものと類似していることから、この溝状遺構についても堀切の可能性が高い。つまり、本古墳の北側にも中世山城築造に伴って堀切が掘り込まれていたと推定される。

なお、T3—4及びT3—5においては、明確な墳丘の盛土と考えられる存在は確認することができなかった。

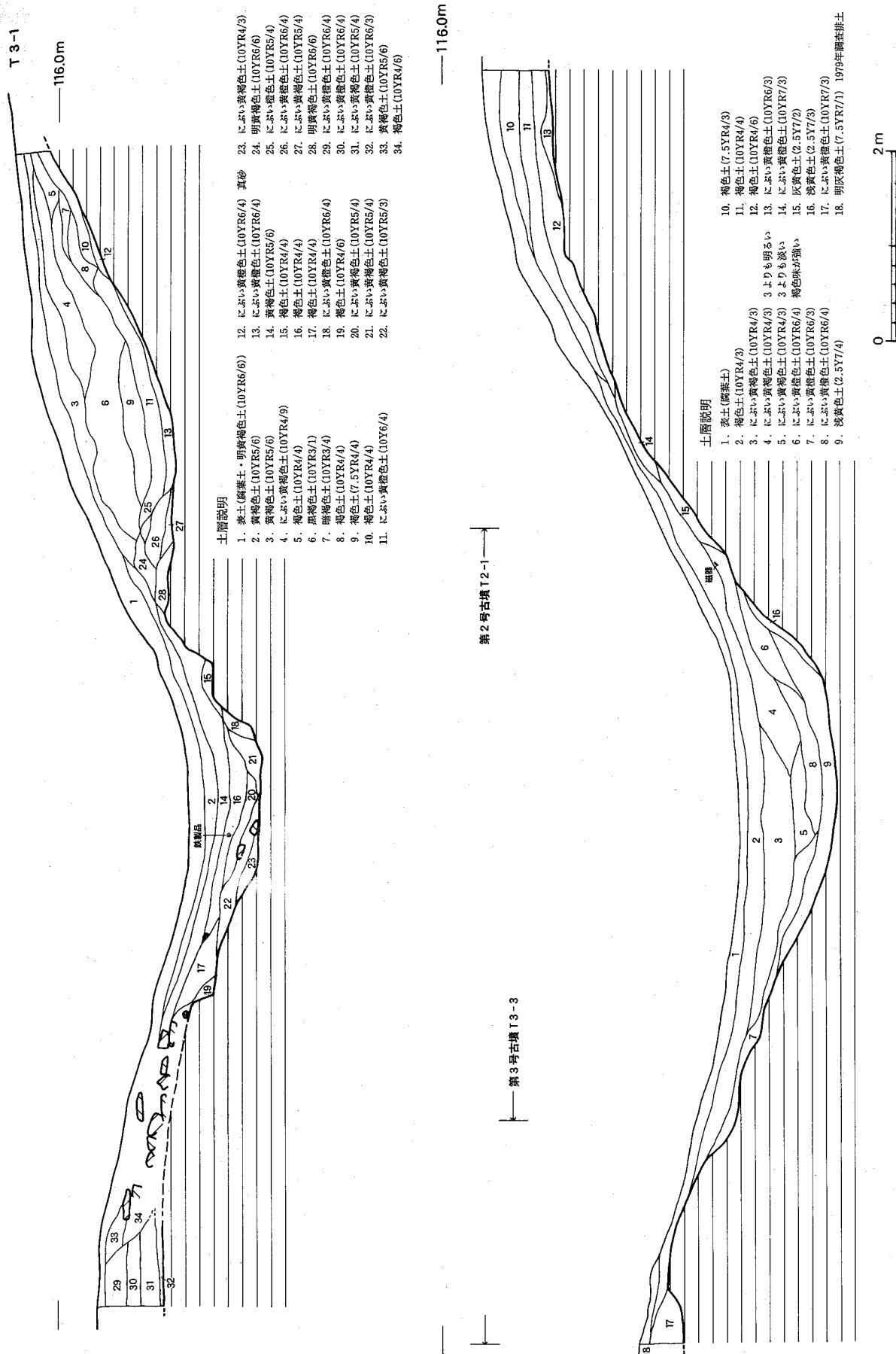
以上のことから、第3号古墳の範囲については明確にしえなかった。

ところで、T3—1の土層観察によれば、一部人工的な堆積状況を呈する箇所(第18図24~28層)



第17図 第3号古墳トレンチ配置図 (S=1:200) 網目は地山礫群

第18図 第3号古墳T3—1・T3—3 (T2—1) 土層断面図 (S=1:60)

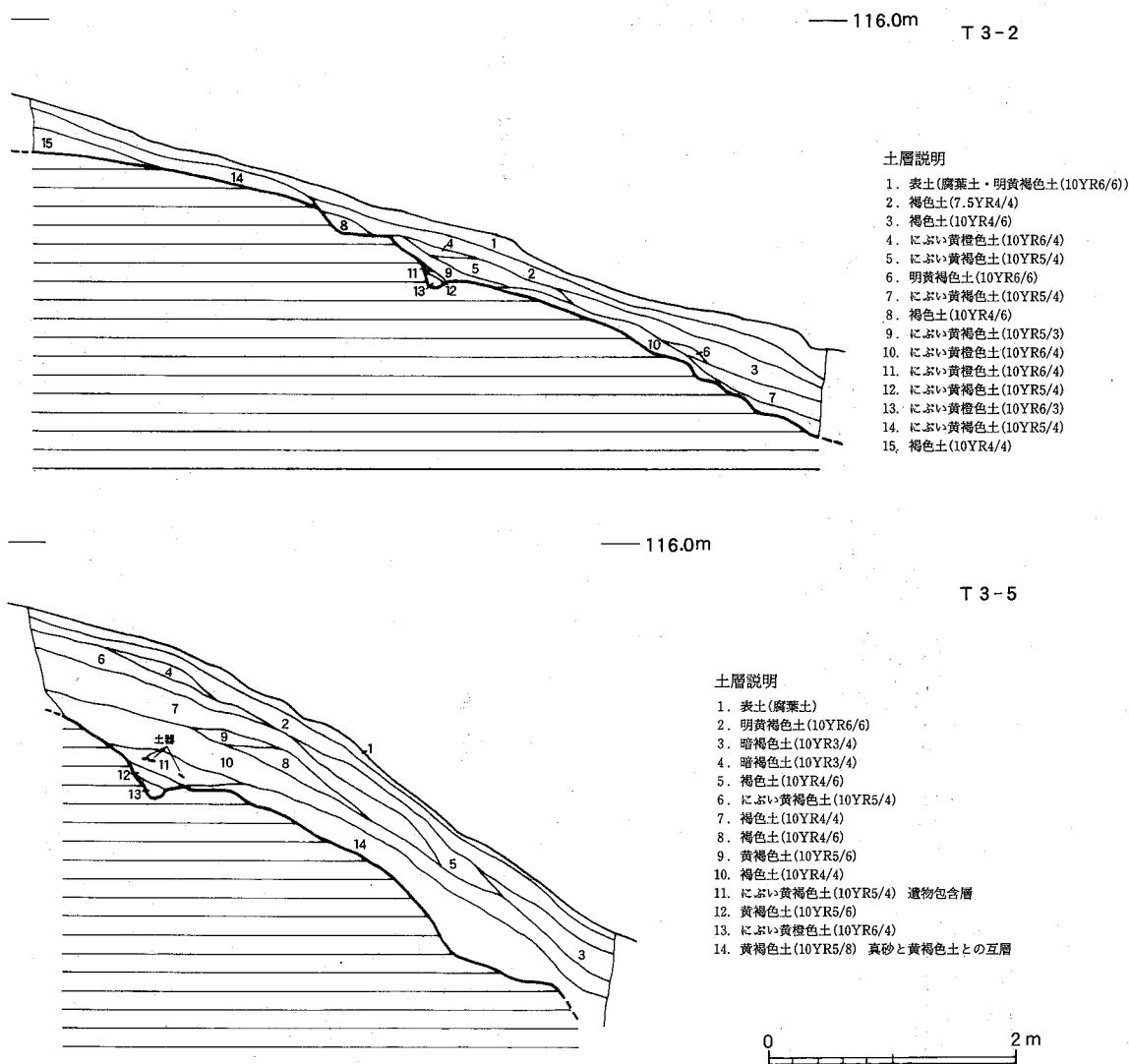


が確認された。その南側の炭まじりの堆積土については前述した人工的な土層と地山とで形成される溝状を呈する地形に水平に堆積しており、後述する埋葬施設との位置関係から、これらの土層が第3号古墳の墳丘残土及び南側周溝内堆積土と推測された。その場合、この人工的な土層の南側端が本古墳の南側墳端とみなしてよいと考える。埋葬施設が墳丘のほぼ中心に構築されているとすれば、本古墳の規模は直径ないし一辺約13m程度と推定することができる。そうした場合、T3-2で確認された時期不明の傾斜変換点については、本古墳に伴うとした場合先の想定とは合わなくなるため、他の時期（恐らくは中世段階）のものと考えられる。

b. 埋葬施設（第20図・図版19, 20）

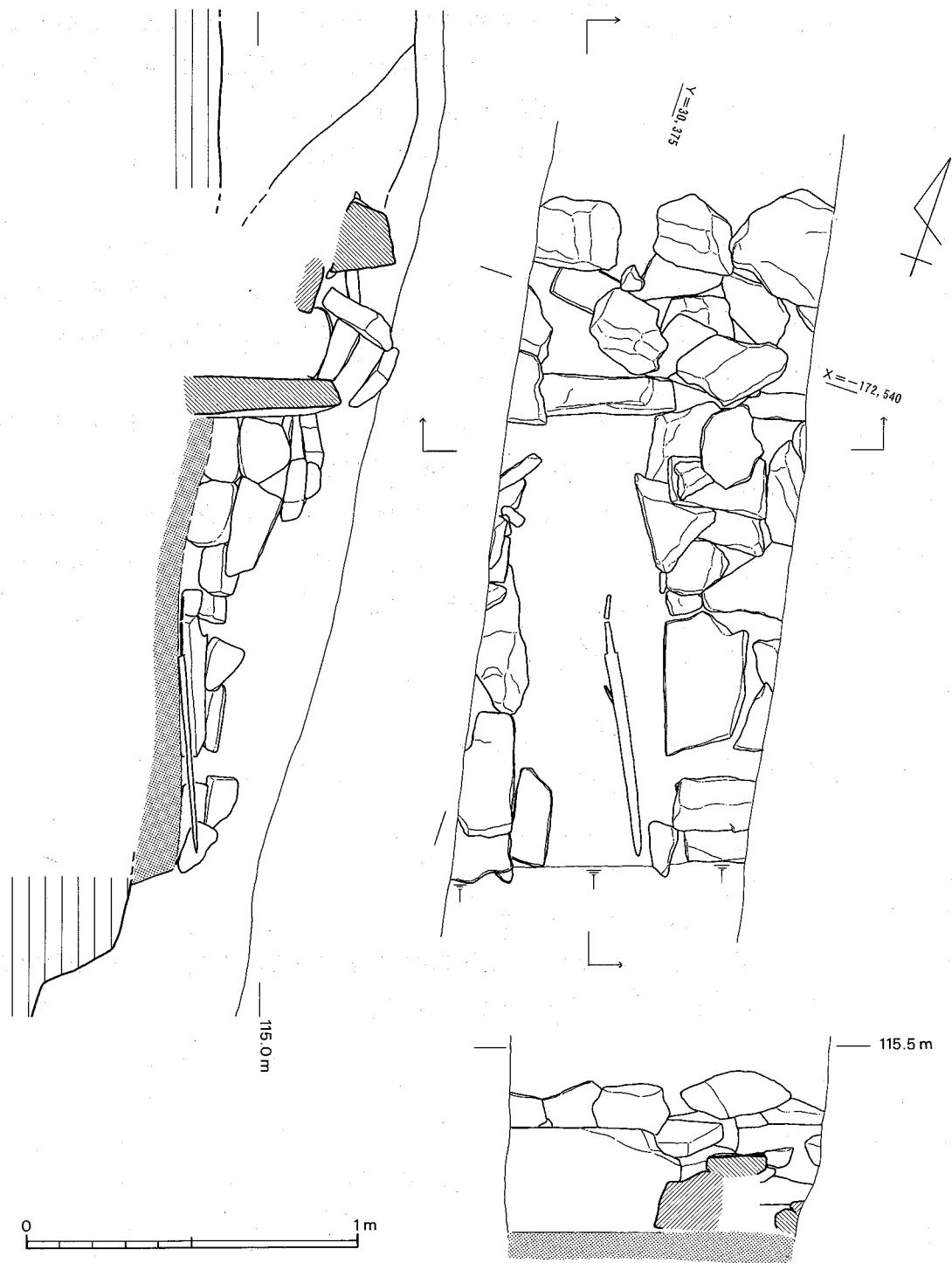
T3-1において第3号古墳に伴う埋葬施設を確認した。前述したように、その南半部は中世山城跡に伴う堀切跡が掘り込まれて半壊状態であるが、ほぼ南北方向に、尾根主軸方向に平行に構築されていた。遺存状況から竪穴式石室と考えることができる。

前述したとおり、南半部は損失しており、遺存した箇所についても半壊状態であった。遺存した



第19図 第3号古墳T3-2・T3-5土層断面図 (S=1:60)

石室の状況からみれば、側壁は根石を含む基底部のみの遺存と考えられるが、東西両側壁とも比較的平らな礫を積み上げた、いわゆる長手積みにしていた。小口については北側のみ遺存していたが、この北側小口については、根石は石材を立てて使用し、その上方の積み石は長手積みにしていた。恐らくは南側も同じ様相を呈していたと推定されるが、側壁とは積み方を異にしている。また、北側小口及び東西両側壁には人頭大の礫を用いて、控え積みがなされていた。なお、石室床面には礫



第20図 第3号古墳埋葬施設実測図 ($S = 1:20$)

など、石材を敷いてはいなかったが、棺台石と考えられる礫・石材が認められた。

石室の内法は、長さ現状で約1.36m・幅北小口側で約0.5mである。高さについては現状で最大約0.5mである。石室の主軸はN19°Wである。

石室床面から原位置で出土した遺物は鉄剣1点とその下方から出土した鉄製品1点の2点のみである。そのほかは、石室埋土中ないしは中世山城堀切跡掘削土中から出土している鉄鏃があるのみである。

鉄剣は北側小口から南へ約50cmの位置で、中心軸線からやや東寄りに、南に切先を向けて、ほぼ刃を床面に対して水平にして埋置されていた。茎部は根元三分の一箇所で分離していた。この鉄剣の関部分から北約90cmの位置で、鉄剣の直下に鉄製品を確認した。

埋葬頭位方向は鉄剣の切先方向から推察すれば、北頭位であったと考えられる。

c. 出土遺物（第21図・図版41）

本古墳に伴うと考えられる遺物は、石室内外から出土した上記鉄製品のみである。そのほかでは、各トレンチから土師器や須恵器片が出土しているが、細片であること、また埋土中であることから、本古墳に伴うかどうかは不明である。

鉄剣（1） 全長78.8cm・刃部60.6cm・刃幅3.8cm・茎部最大幅3.2cmである。剣身断面は凸レンズ状を呈し、鎬はない。茎部に目釘穴が2箇所穿たれている。重量は606.6gである。

鉄鏃（3～11） すべて長頸鏃形式で、鏃身については両刃造りである9を除きすべて片刃造りである。片刃造りの鏃身は逆刺を有する。ほとんど破損しており、大きさについては不明であるものがほとんどである。なお、10と11は鏃の茎と考えられる（＊は現状数値である）。

3 全長 14.0cm・刃部長さ 1.9cm・重量 15.3g

4 全長 12.9cm・刃部長さ 2.7cm・重量 10.7g

5 全長 *11.9cm・刃部長さ 3.1cm・重量 10.7g

6 全長 *11.7cm・刃部長さ 3.3cm・重量 10.5g

7 全長 *11.5cm・刃部長さ *3.1cm・重量 11.4g

8 全長 *11.5cm・刃部長さ 3.4cm・重量 9.9g

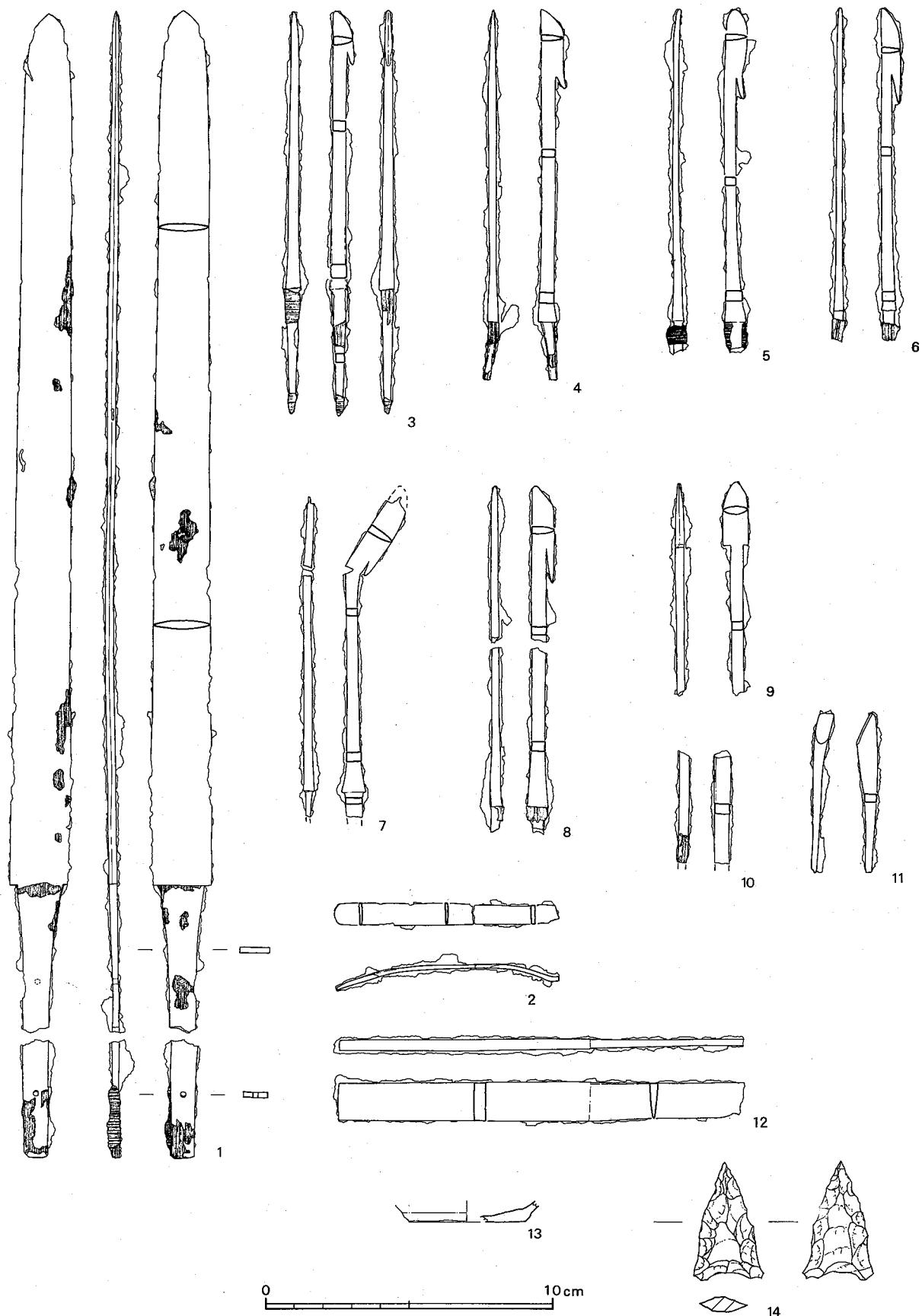
9 全長 *7.4cm・刃部長さ 2.2cm・重量 6.2g

鉄製品（2） 全長7.8cm・幅0.8cmの若干湾曲した長方形状を呈するものである。片側中央部幅約4cm程度の範囲が刃状に薄くなっている。重量は4.2gである。

ii. そのほかの遺構

a. 弥生時代

T3—4から、地山面を約30cm程度掘り込んだ、幅約30cmの溝を伴う約60cmの平坦面を確認した。これについては、検出面は現地表面から約105cm下であったが、その掘り込みの埋土中から弥生土器が出土している。このことから、この確認した遺構は第3号古墳築造以前の段階に、この第3号古墳の位置する尾根上に構築された竪穴住居跡ないしは段状（テラス状）遺構の一部と考えられる。



第21図 平成11年度遺構状況確認調査出土遺物実測図
(1; S=1:4, 2~12; S=1:2, 13; S=1:3, 14; S=1:1)

なお、この弥生土器は小破片で図化していないが、同トレンチ埋土中からは石鎌が出土している。

b. 中世

先述したように、T3-1とT3-3からは、中世山城築造に伴う堀切跡が認められた。特にT3-1では埋葬施設を破壊する形で掘り込まれており、現地形はこの段階で形成されたものであることが明らかとなった。このことから、当初墳頂平坦面とされていた場所も地形改変を想定せざるを得なかった。この平坦面は第4号古墳の位置する場所を主郭とする中世山城に伴う郭と考えられる。

T3-1の堀切内埋土中から小刀状鉄製品のほか、T3-3から土師質土器が出土している。

c. 出土遺物（第21図・図版41）

小刀状鉄製品（12） 現存長14cmで、刃部は一部欠損している。柄部は8.7cm・幅1.3cmである。重さは33.9g。

土師器（13） 底部径6cmで、口縁部は欠損する。糸切り離し後ナデ消している。にぶい黄橙色を呈し、胎土は精緻、焼成は良好である。

石鎌（14） 安山岩製。三角形状を呈し基部にわずかに抉りが入る。長さ2cm・最大幅1.2cm・厚さ2.5mmである。

iii. 小結

調査の結果、第3号古墳の現形状が、本来の形態を呈していないことが明確となったことは、大きな成果といえよう。しかしながら、中世段階によって地形改変が行われているため、本来の墳丘形状は明らかにしえなかつた。ただし、先述したように土層観察によって直径ないしは一辺13m程度の規模と推定される。また、中世山城築造に伴う堀切によって半壊状態であったものの、第3号古墳の埋葬施設が竪穴式石室であったことが判明したこと、副葬品とともにその築造時期を知る上で大きな成果であったと言える。

すなわち本古墳の築造時期であるが、後世、特に中世段階において地形の改変がされていること、また各トレンチから出土した土器についても細片であることなどから、推定できる材料は竪穴式石室とその内外から出土した鉄製品のみである。これらをみていくと、前者は床面における石材等の有無という相違はあるが、構造については小口側の根石部分を小口積みないしは長手積みにはせず板石状の石材を立てている特徴は、第2号古墳のものに類似している（潮見1980）。また、副葬品についても、第2号古墳とは質及び量とも比較はできないものの、鉄剣と長頸形式の鉄鎌との組み合せは両者とも共通している。第2号古墳は埋葬施設である竪穴式石室からは、素紋鏡、衝角付冑、三角板鎧留短甲、鉄剣、鉄刀、鉄鎌など多量の鉄製品が出土している。須恵器の出土は認められなかつたが、甲冑、鉄鎌の型式から第2号古墳は5世紀前半から中葉段階に築造されたと考えられている（古瀬1999）。

第2号古墳と本古墳との間にはT3-3を設定しているが、土層観察をみると中世段階における山城築造に伴う堀切跡が認められた。このことから切り合い関係についても明確にしえなかつた。だ

から、本古墳については第2号古墳との前後関係は不明であるが、埋葬施設や副葬品の一部が類似していることからすると、第2号古墳に近い時期の築造と捉えておきたい。すなわち5世紀中頃としておきたい。

なお、前年度確認した第4号古墳が位置する場所に存在する山城跡については、その北側の本古墳との間や、本古墳と第2号古墳との間に堀切跡が認められたことから、そこを主郭としてふたつの堀切跡を挟んだ小郭からなる連郭式の山城であったと考えられる。

引用・参考文献

- 潮見浩編 1980『中小田古墳群』(広島市の文化財第16集) 広島市教育委員会
吉瀬清秀 1999「コラム4 中小田古墳群」脇坂光彦・小都隆編『考古学から見た地域文化 一瀬戸内の歴史復元一』
溪水社

4. 平成12年度

発掘調査は、平成13(2001)年3月19日(月)から3月30日(火)まで実施した。対象とした古墳は、第2号古墳である。

墳形に沿って、任意に5本のトレントを設定した。また、『中小田古墳群』報告書(潮見1980)において指摘されているように、第2号古墳北側の平坦面が本古墳に伴うものかどうかについても考慮して設定している。なおトレントの名称は、T2-○とし、T2-1から北側を向いて時計周りにT2-2からT2-5とした。

i. 第2号古墳(第22図)

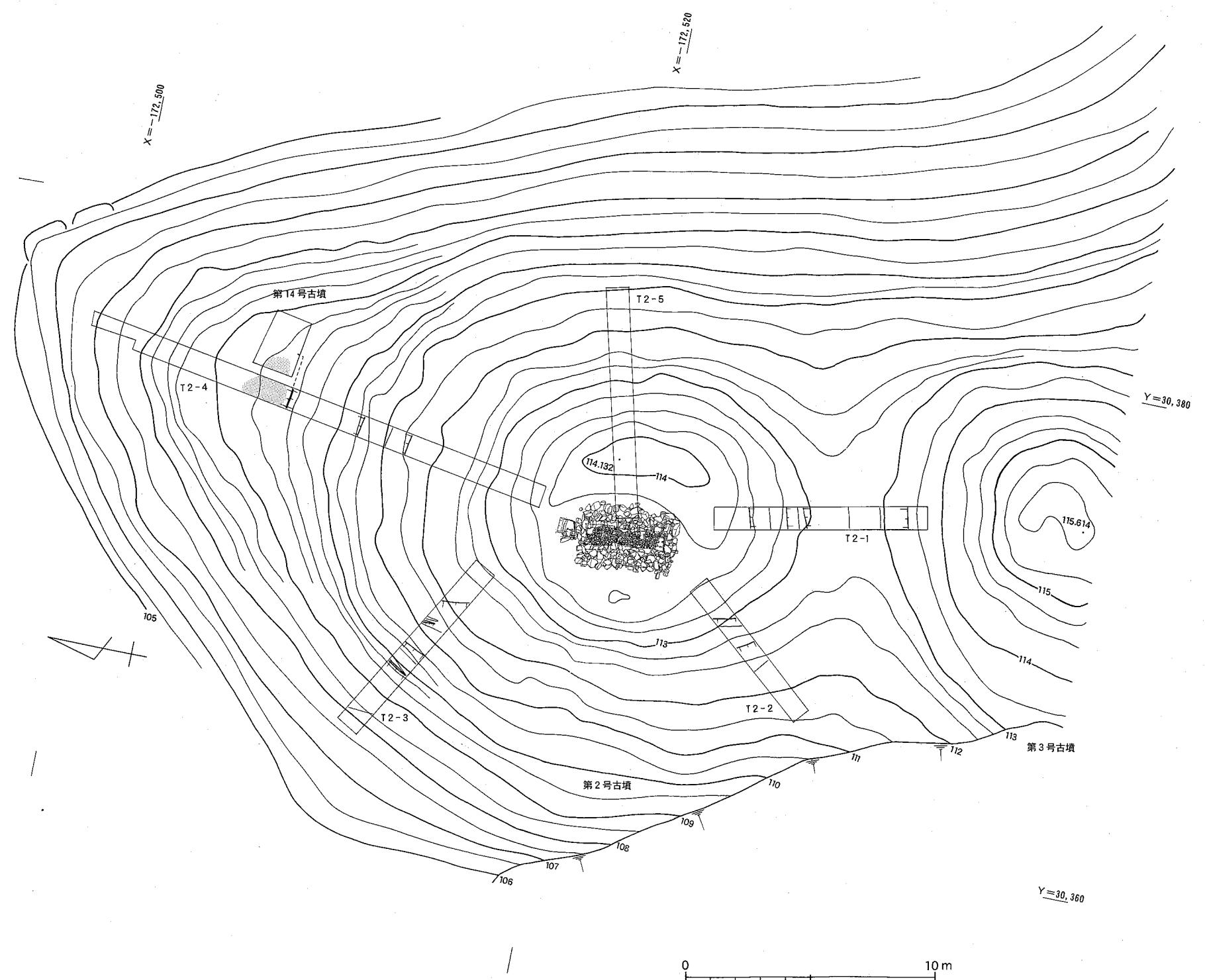
第2号古墳は、「第1号古墳の南方上手約80mの標高は114.5mの丘陵尾根上に位置する円墳である。「丘陵尾根は狭く、墳丘南側は、尾根と直交するように切断している。北側は約20度の緩傾斜となっている。東・西側は、約40度の自然の急斜面をそのまま利用しており、主として地山を削り整えることによって墳丘外形を形成しているとみられ」とある。「墳頂より北約13mには、長さ・幅約7mの三角形状のやや平坦な面があり、ここに造り出しの存在する可能性」が指摘されている。「規模は直径15m、高さ約2.5mである」(潮見1980)。埋葬施設については墳頂中央部やや西よりに構築された竪穴式石室であるが、昭和36年と昭和54年の段階に発掘調査がなされている。なお、埴輪・葺石などの外表施設は確認されていない。

墳丘と規模の確認を目的とし、第22図のとおり合計5本のトレントを設定した。すなわち、T2-1は第3号古墳との前後関係をみるため第3号古墳で設定したT3-3を延長しつつ、再発掘した。T2-2は南西方向の墳端を、T2-3は北西方向の墳端を、T2-5は西方向の墳端及び、現地形で認められた墳頂部東側の高まりの性格、並びに埋葬施設である竪穴式石室の掘り方を、T2-4は、先述したところの、造り出しの存在の有無を、それぞれ確認する目的で設定した。

a. 墳形と規模(第18図下段、第22~24図・図版22~26)

調査の結果、いずれのトレントにおいても第4号古墳が位置する箇所を中心とする中世山城(狐城)築造に伴う地形改変が認められた。T2-1では堀切跡と小郭2箇所が認められた。しかしながら、堀切跡については、その埋土と考えられる「にぶい黄褐色土」(第18図下段3~5層)が確認された地山面までは達していないことから、それ以下の堆積土層については古墳時代における古墳築造に伴う堀切状の溝の埋土となる可能性もある。このことから、ここで確認された地山の最深部は第2号古墳の墳裾となると考えられる。T2-2においても小郭2箇所が確認されたが、その上方に堆積した覆土には前述した堀切跡でみられたような「にぶい黄褐色土」が認められた(第23図上段3~4層)。このトレントについても、この堆積土は一部地山面にまで達していない箇所があり、古墳時代の遺構面、すなわち第2号古墳にともなう遺構面が残存している可能性があろう。

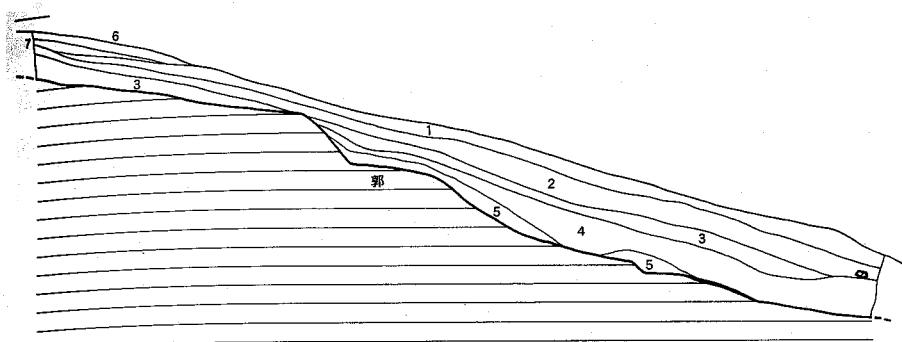
そのほかの3箇所のトレントでは明確な第2号古墳に関連する遺構面は遺存している状況ではなかった。特に、確認されている埋葬施設が西側に偏って位置していることから、その「東側には別の内部主体の存在が想定され」(潮見1980)たが、T2-5の調査状況によれば、竪穴式石室上端と



第22図 第2号古墳トレンチ配置図 (S=1:200)

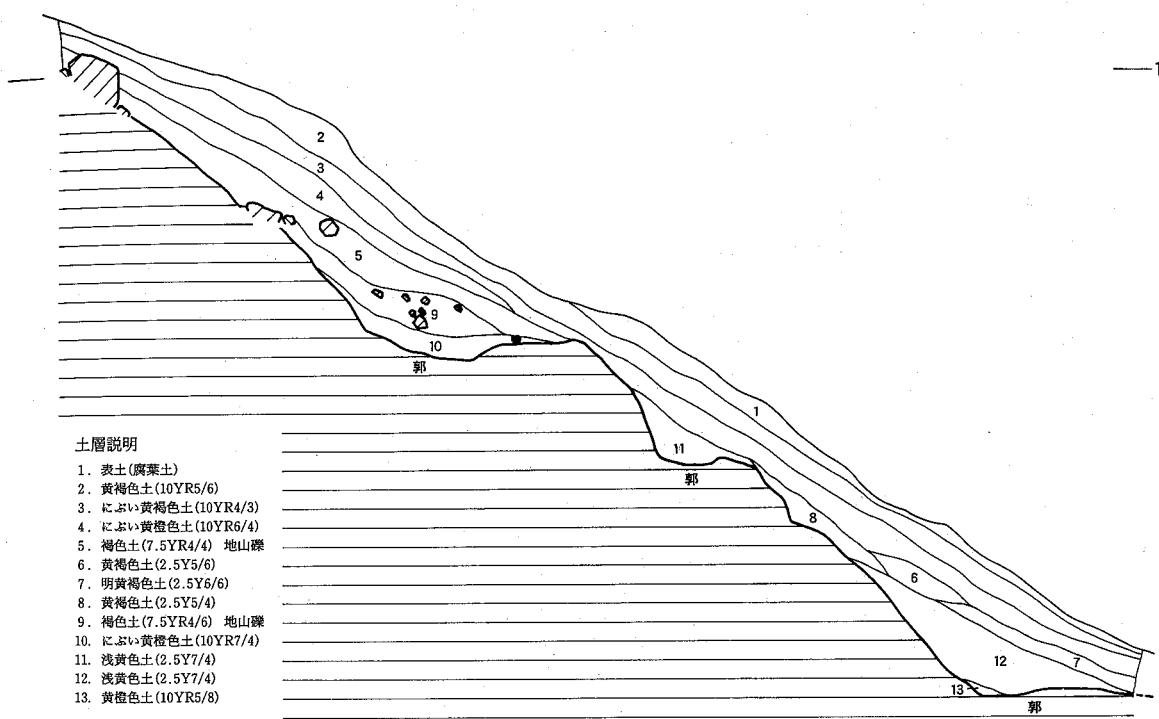
T 2-2

— 113.7m —



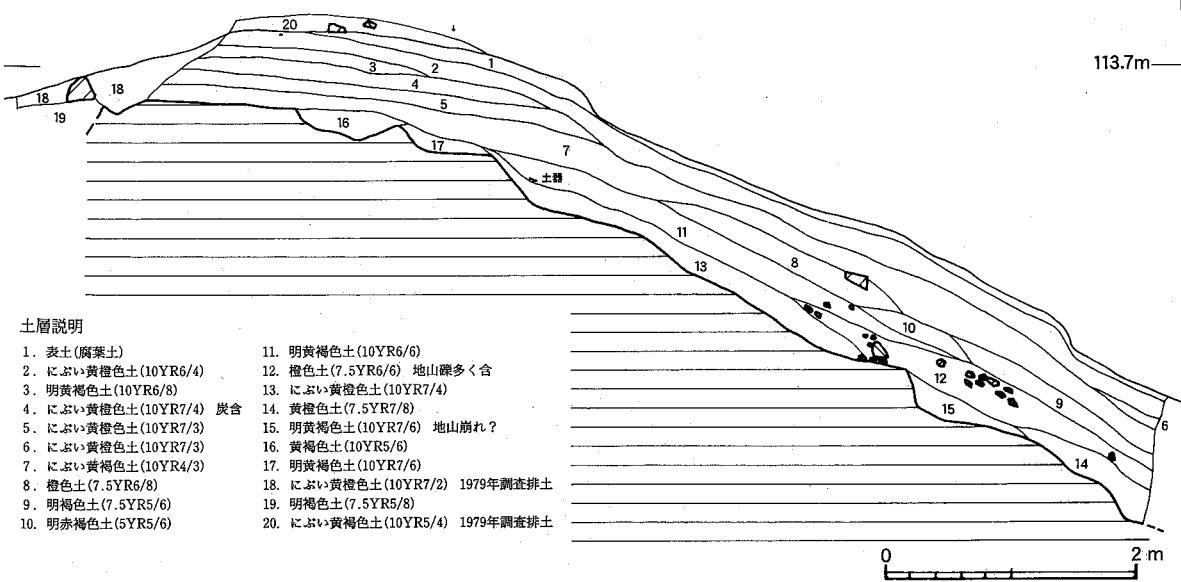
T 2-3

— 111.7m —



T 2-5

— 113.7m —



第23図 第2号古墳T2-2・T2-3・T2-5 土層断面図 (S=1:60)

第24図 第2号古墳T2—4 土層断面図 (S=1:60)



同じレベルに上記した「にぶい黄褐色土」(第23図下段7層)が確認され、中世段階の墳頂部の削平が「蓋石や側壁上端の一部」(潮見1980)を失うまでだったと考えられる。地形改変が著しく、現状では東側墳端は未確定であるが、確認されている竪穴式石室は本来は中心に位置していた可能性が高い。

そのため、2箇所のトレンチからの情報でしかないけれども、第2号古墳については、推定されていたとおり、墳形は円形で、地山の削り出しと盛土によって構築されていると考えられた。墳丘周辺やトレンチ内からは石材と考えられる礫が認められないことから、葺石などの外表施設については本来から存在していなかった可能性が高いと考えられる。規模については、東西方向が未確定で南北方向のみのデータであるが、直径約20m程度と考えられる。高さについては、墳頂部における削平が埋葬施設にまで及んでいることが確認されたことから、T2-1では現状で約1.9mとなるが、古墳築造当時においてはもう少し見積もって2.5m程度あったのではないかと考えられる。

本古墳に伴う遺物については、T2-5の堆積土中から鉄器破片が出土したのみであった。土器については出土していない。なお、T2-4とT2-5の堆積土中から、管玉がそれぞれ1点ずつ出土しているが、いずれも中世段階における山城築造に伴う地形改変後の堆積土中からの出土であった。第26図1は碧玉製で、2は赤石英製であることから、既発掘調査で確認された埋葬施設から推定される時期とは少しずれもあることから、本古墳に伴う可能性は少ないと考えられる。

b. 出土遺物 (第26図・図版42)

管玉 (1, 2) 1はT2-5から、2はT2-4から出土した。いずれも中世以降の堆積土中からの出土で、本古墳に伴うかについては不明である。築造時期とは少しずれていると考えられ、伴う可能性は低い。1は碧玉製で長さ1.7cm・直径0.65cmである。両側穿孔。2は赤石英製で長さ1.4cm・直径0.35cmである。両側穿孔。

鉄製品 (3, 4) いずれもT2-5からの出土で、中世以降の再堆積土中からの出土である。特に4は出土層位が昭和36年に埋葬施設を調査された際の排出土の可能性があり、副葬品の一部であったと推定される。いずれも小片のため器種は不明である。3は刀子の茎部と考えられ、4についても刀子になる可能性がある。

ii. 新たに確認された古墳 (第14号古墳(仮称)) (第22, 24, 25図・図版27)

a. 埋葬施設

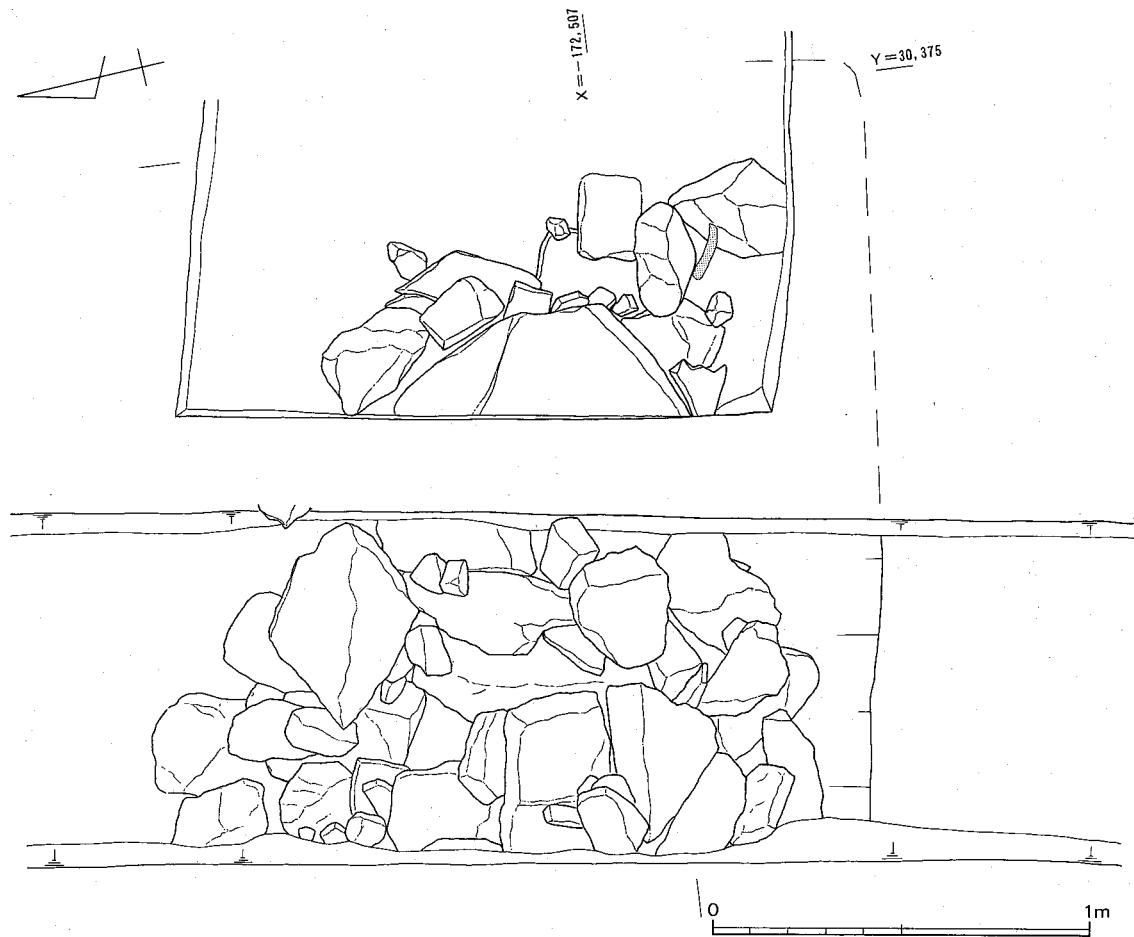
北側に想定された「造り出し」についてであるが、T2-1で推定された南墳端と、仮に堀切による削平を想定したとしても、北側に位置する平坦面側との標高差は3m以上、この平坦面の削平される前の旧地形を想定しても2m以上もあり、このままだと墳形も歪な形状を描かざるを得ない状況にあることから、その存在の可能性は低いと言わざるをえなかった。この「造り出し」の存在の有無を確認する目的で設定したT2-4においては、丘陵斜面に小郭が2箇所と、北側に存在する平坦面との傾斜変換点付近に堀切跡が確認されたが、こうした後世の地形改変を考慮してもそれを想定することは難しい。その代わりとして、その堀切跡の北側に長軸を東西方向にとる、すなわち尾

根軸線に直交方向に築造された竪穴式石室と考えられる埋葬施設が確認された。この北側の平坦面は、土層観察や蓋石が表土直下から確認されたこと、そして蓋石直上からは土師器片に混じって釘が出土していることなどから、中世段階以降、恐らくは山城築造に伴う地形改変によって削平を受けていたが、埋葬施設の遺存状況は良好であった。

この埋葬施設については、東側にトレンチを拡張したところ、蓋石直近の掘り方埋土中から鉄鎌が出土した。この形態的特徴などから見て、この鎌は古墳時代のものと考えられるので、この埋葬施設についても古墳時代に所属するものと考えられる。この埋葬施設をもって第14号古墳と仮称する。

埋葬施設の規模については、未掘のため不明であるが、蓋石の範囲については、幅約1.5m、長さはボーリング調査の結果から約4mと推定される。掘り方については、南側箇所のみ地山を掘り込んでいたものであるが、そのほかの箇所では盛土中から掘り込まれていた。石室の裏込めされた構築土はこれらの周辺の盛土とほぼ同色で、しかも同じ質感の堆積土であったので区別はしにくかったが、わずかに掘り方内の裏込めされた埋土は白っぽい印象を受けた。これによって分層した結果、掘り方の長さは未掘箇所があるため不明であるが、幅は約2.9mとなる。その場合北側や東側は掘り方と竪穴式石室とは広い空間ができる、南側に片寄っている。

なお、本古墳については、全掘していないため、しかも中世段階における削平や堀切の掘削により周溝などについても確認できていないため、その範囲は不明である。



第25図 第14号古墳（仮称）埋葬施設実測図（一部）（S=1:20）網目は鉄鎌

b. 出土遺物（第26図・図版42）

鉄鎌(5) 第14号古墳（仮称）の埋葬施設の蓋石直近から出土している。いわゆる曲刃形式である。直刃から曲刃への変化は5世紀前葉であるから、この鎌もそれ以降の時期が与えられる。刃先を左に向けた場合、手前側に折り返しがくる。基部と刃部は段がついて明確に区別される。長さは16.7cm・刃の長さは13.3cm・刃幅は最大2.5cm・基部幅は3.1cmである。重量は69.9gである。

iii. その他の遺構

a. 中世段階

先述したように、各トレンチで中世段階の山城築造に伴う地形の改変が認められている。T2-1では堀切と郭状の幅の狭い平坦面が1箇所、T2-2では郭状の幅狭の平坦面2箇所、T2-3では郭状の平坦面を2箇所、T2-4は郭2箇所と堀切跡を確認した。そしてT2-5では第2号古墳の墳頂部を郭として地形を改変するため墳丘を削平した痕跡を確認した。

また、そのほかに、地形観察によれば、西側斜面などに堅堀の痕跡が認められるが、大幅に地形の改変が成されているものと推定される。

山城跡に伴う遺物としては、T2-1で堀切跡の埋土中から青磁の破片が出土しているほか、T2-2でにぶい黄褐色砂質土中や、T2-4において中世段階以降の堆積土中から、釘が数点出土している。

b. 弥生時代

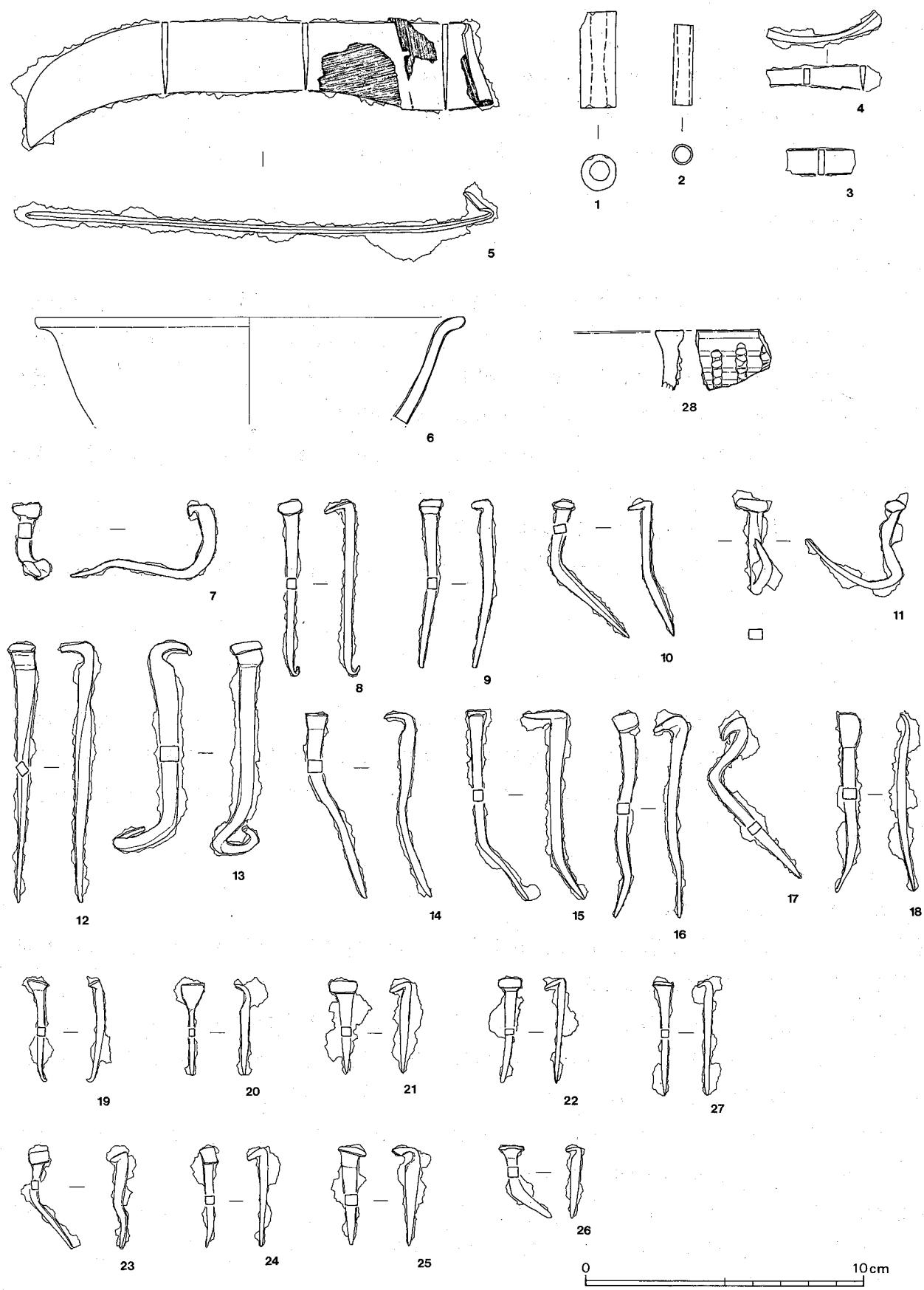
弥生時代に遡る遺構は確認されなかったが、T2-3、T2-4、T2-5からは弥生時代の土器が出土している。このうち、図示した土器（第26図28）はT2-3の最下段平坦面の埋土中から出土しているが、その特徴から中期中頃から末頃のもので、この時期の遺構の存在も想定されるものである。

c. 出土遺物（第26図・図版42）

青磁(6) T2-1の中世段階における、山城築造に伴う堀切跡埋土中から出土。碗形土器の口縁部の破片である。復元口径は15.2cmである。

鉄釘(7~27) T2-2のにぶい黄褐色土中や、T2-4の中世段階以降の堆積土中から出土した。両トレンチからは少なくとも50点以上出土しているが、ここでは遺存状況のよい一部を図示するに留めた。T2-2から出土したもの（7~18）は、長さ7~8cmのもので、重さは6.6g~19.5gとバリエイションがある。T2-4から出土したもの（19~27）は、長さ3.5cm~4.0cmのものが大半であるが、重量も1.3g~3.1gの範囲内で収まる。

弥生土器(28) T2-3から出土。高壙口縁部の破片で、断面T字状を呈する口縁部の下方に凹線文がめぐる。その上には縦方向に3条の突帯を貼り付ける。浅黄色を呈し、胎土は小砂粒を含み、焼成は良好である。



第26図 平成12年度遺構状況確認調査出土遺物実測図 (1・2; S=1:1, 3~27; S=1:2)

iv. 小結

調査の結果、本古墳においては、周辺の第4号古墳、第3号古墳同様、中世山城築造に伴う地形改変が行われていることが明らかとなった。また、墳頂から北約13mのところにある長さ・幅約7mの三角形状の平坦面上に造り出しの存在する可能性が指摘されたが、既述のとおり、中世の地形改変を考慮に入れても造り出しが付くことを想定することは難しい。

地形改変が著しいが、本古墳の墳形は円形で、前述したとおりT2-1における最深部が本古墳の南側墳丘端部としてみなすことができるのであれば、直径20m前後の規模の円墳と推定される。

なお築造時期については、埋葬施設から出土した遺物群、特に甲冑や鉄鎌の型式から5世紀前半から中葉頃と推定される（古瀬1999）。

上述した墳頂から北約13mのところにある長さ・幅約7mの三角形状の平坦面上には、埋葬施設が確認された。その確認状況から竪穴式石室と考えられた。このことはここに古墳が築造されていたことを意味する。この竪穴式石室の検出状況からすればこの平坦面も郭として利用されていた可能性が高く、著しく削平を受けていたため、墳丘や周溝については確認できなかった。この埋葬施設をもって第14号古墳と仮称するが、この規模や形状を明らかにすることが課題であろう。なお、埋葬施設の規模は未掘箇所が多いため不明であるが、蓋石の範囲については幅約1.5m、長さはボーリング調査の結果から約4mと推定される。

第14号古墳（仮称）の築造時期については、この竪穴式石室の蓋石直上や周辺から土師器が出土しているものの小片のため時期を決定できないが、蓋石直近から出土した鉄鎌は曲刃形式であることから5世紀前葉以降と考えられる。

石室外副葬の事例は、太田川下流域においては安佐南区権地古墳B主体があげられる（檜垣1984）。石棺と報告されているが、床面が舟底形状を呈しており、舟形木棺が納められた可能性もある。蓋石を何重も積み重ねる特徴を持ち、本古墳に類似する点も多い。出土遺物から5世紀代と推定されているが、第14号古墳（仮称）も同様な時期と考えられる。なお、市史跡長尾第1号古墳（全長約43m）も埋葬施設（第1主体）は同様な構造的特徴をもつ。この古墳の時期は明らかではないが、4世紀後半から5世紀初頭と推定されている（広島市教育委員会2001）。これらの類例を考慮すると、第14号古墳（仮称）の時期については5世紀前半期におさまると考えられる。

引用・参考文献

- 潮見浩編 1980『中小田古墳群』（広島市の文化財第16集）広島市教育委員会
檜垣榮次 1984「権地遺跡」「九郎杖遺跡・権地遺跡発掘調査報告」（広島市の文化財第26集）広島市教育委員会
広島市教育委員会 2001『長尾古墳群発掘調査報告』
古瀬清秀 1999「コラム4 中小田古墳群」脇坂光彦・小都隆編『考古学からみた地域文化 一瀬戸内の歴史復元一』
渓水社

5. 平成13年度

発掘調査は、平成14(2002)年2月25日(月)から3月28日(木)まで実施した。対象とした古墳は、第1号古墳である。

第1号古墳については昭和54年度の発掘調査において前方後円墳と推定されたものの、全体像を把握することができなかった墳形について明確にする目的で、くびれ部を中心に前方部と考えられている箇所に8本のトレンチを設定した。8本のうち5本は昭和54年当時発掘調査されたトレンチ箇所を拡張したほか、3本は新たに設置したものである。各トレンチの名称は、T1-○とし、T1-1から北側を向いて時計回りにT1-2からT1-8とした。

i. 第1号古墳(第27図)

第1号古墳は、「南北にのびる尾根上の標高97mの地点に位置する。石室のある円丘部北東にはあたかも前方部のような緩い傾斜地が続いている。この古墳は発見当初から流土が著しく、墳形は不明瞭であった」。昭和54年度の「墳丘の調査を一部実施した」結果、「円丘部とそれに続く北東側傾斜地では上面と側面を削平した地山整形が認められ、裾に平坦面をめぐらすことが確認された。しかし、北東側傾斜地の先端と東側斜面は流土が激しく、全容は把握できなかった」ものの、「当初は全長約30m・後円部径約20m・高さ4m前後の前方後円墳であった可能性が強い」ことが推定された。「埴輪、葺石などの外表施設は確認されていない」(潮見1980)。

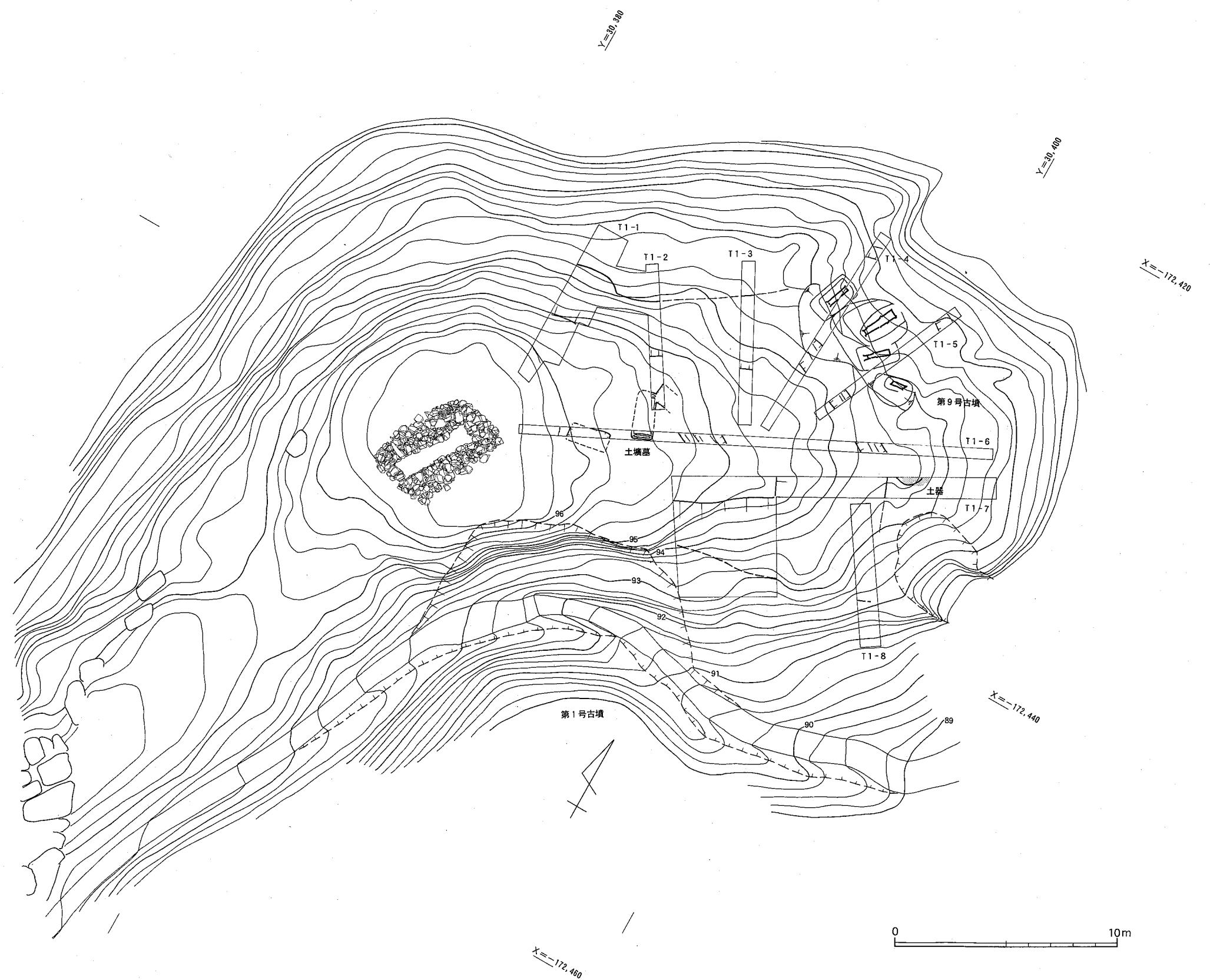
今回の発掘調査の目的は、明確に墳形、特にくびれ部と前方部を確認することにあった。

a. 墳形と規模(第27~31、33図・図版28~32、33b、34)

調査の結果、くびれ部に設定したT1-1・T1-2において、墳丘裾と考えられる傾斜変換点を確認し、それにつづく地山整形によって造り出された平坦面を確認することができた。これによつて後円部と前方部との境界に明確にくびれを認めることができた。また、この2箇所のトレンチの東側に設置したT1-3においても、墳丘頂部からの傾斜変換点と地山整形された平坦面が認められた。一方、本古墳の前方部東側、すなわち本古墳の北東側に接して築造されている第9号古墳側に設定したT1-4・T1-5や、前方部墳頂部から東側墳端にかけての箇所に設定したT1-6において、第9号古墳に伴う周溝が確認されたため、これらの箇所、すなわち本古墳の東側墳端についてはおさえることはできなかった。しかしながら、T1-6の南側に接して設定したT1-7においては東側墳端と考えられる傾斜変換点と地山整形された幅約2mの平坦面を確認することができた。

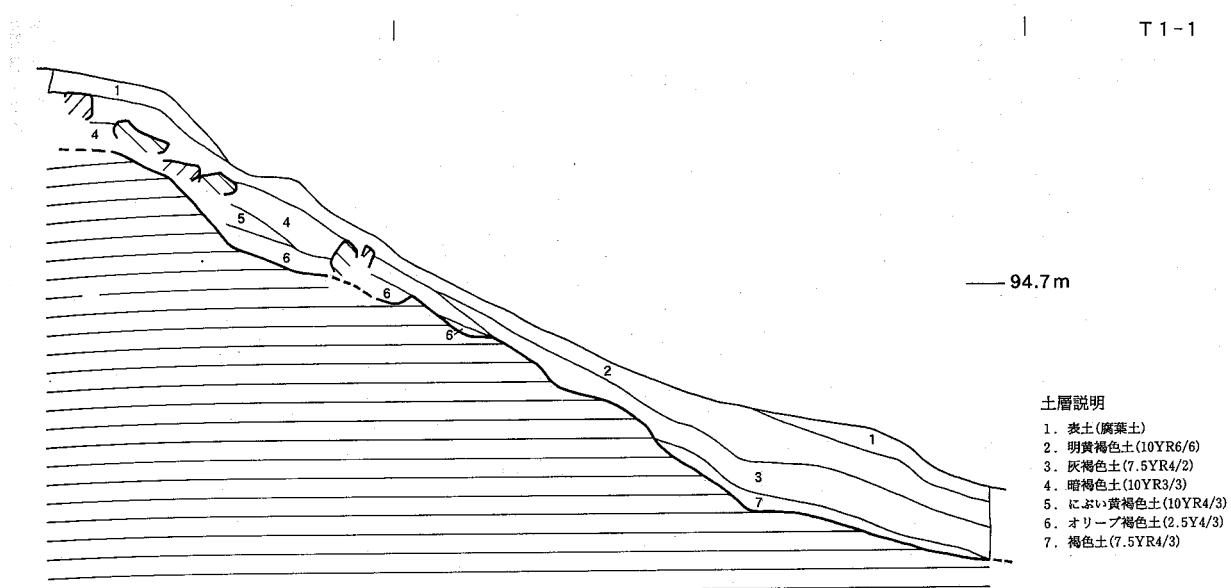
また、前方部については、南側にも、T1-7の南側一部を4m×5m拡張したグリッドや、T1-8を設定して墳丘ラインの把握に努めた。この結果、一部後世の搅乱を受けてはいたものの、墳丘裾と考えられる傾斜変換点を確認することができた。

以上のことから、本古墳が前方後円墳であることを確認できたとともに、前方部における墳丘ラインを描くことも可能となった。T1-7によって前方部東側墳端を把握できたことから、本古墳の規模は全長約28.5m(後円部径約18m、前方部長さ約10.5m)となる。

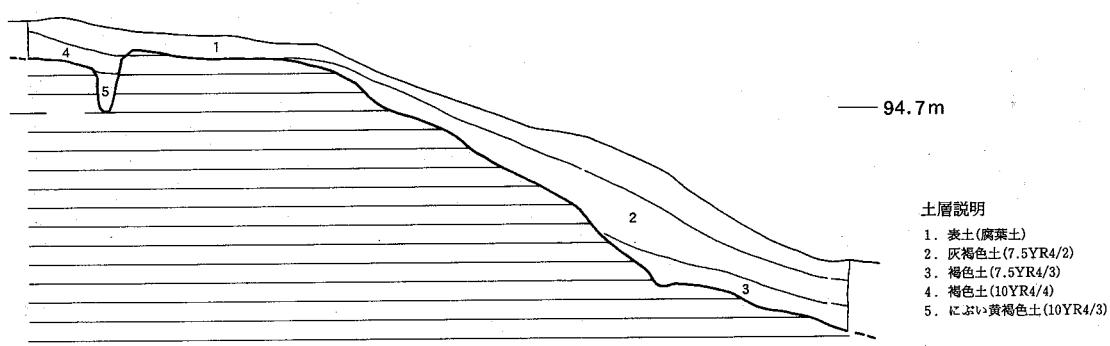


第27図 第1号古墳トレンチ配置図 (S=1:200)

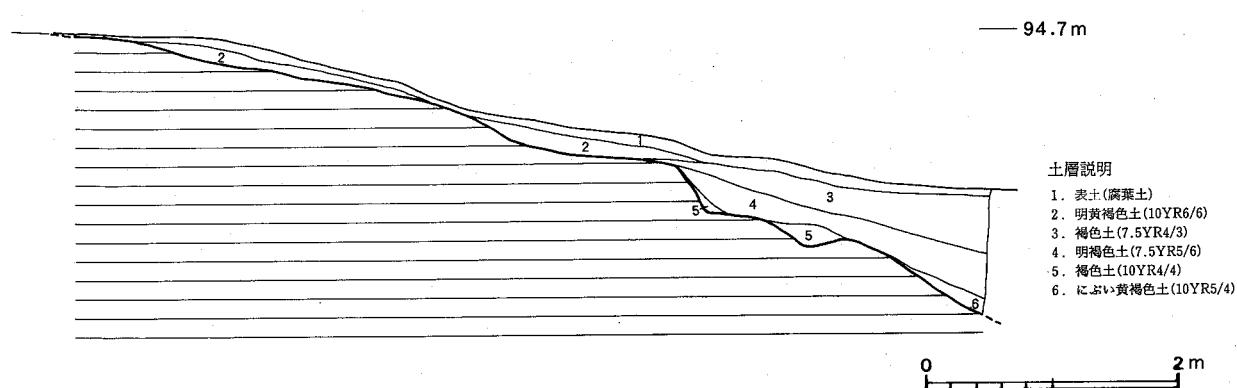
T 1 - 1



T 1 - 2

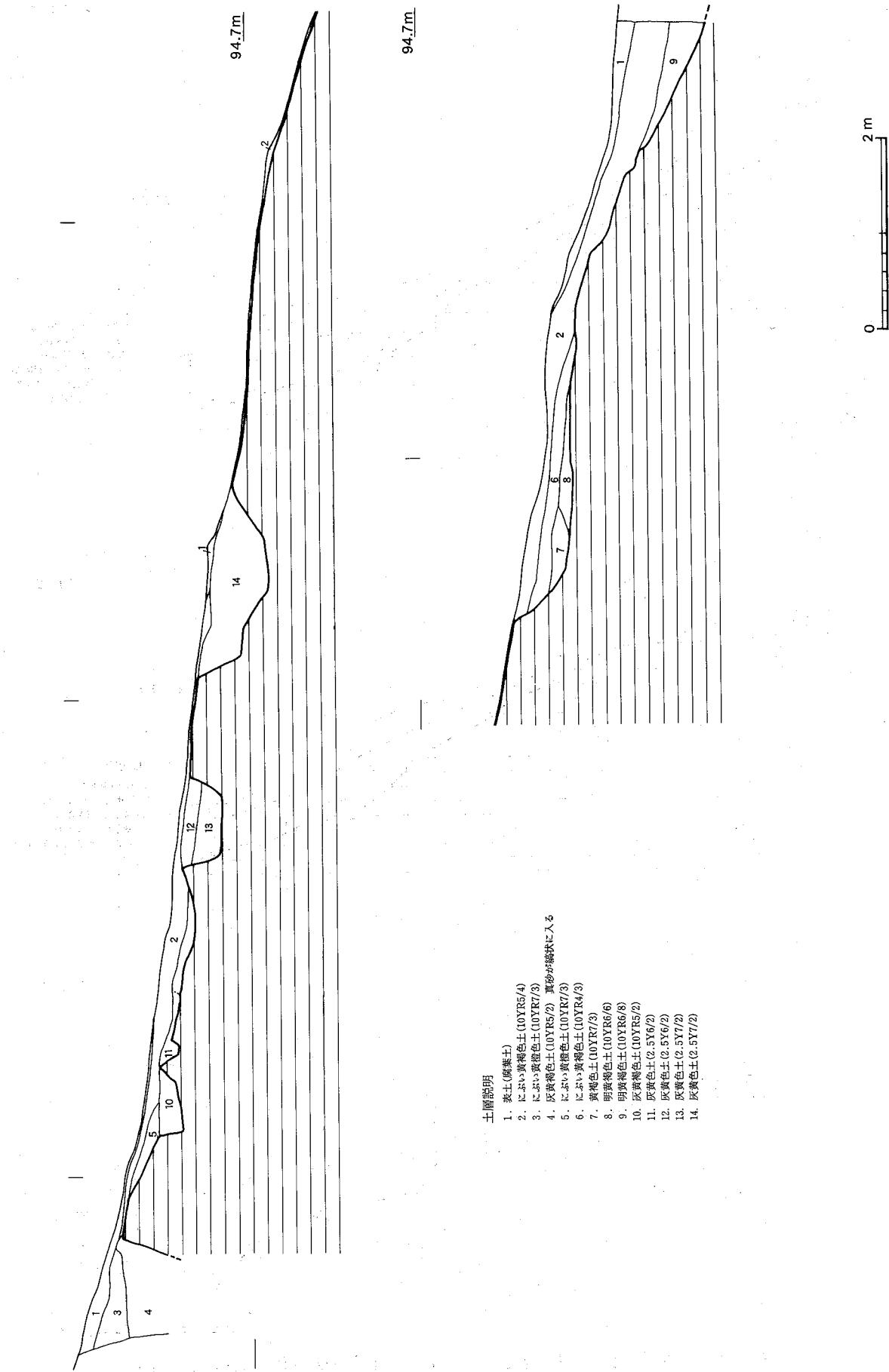


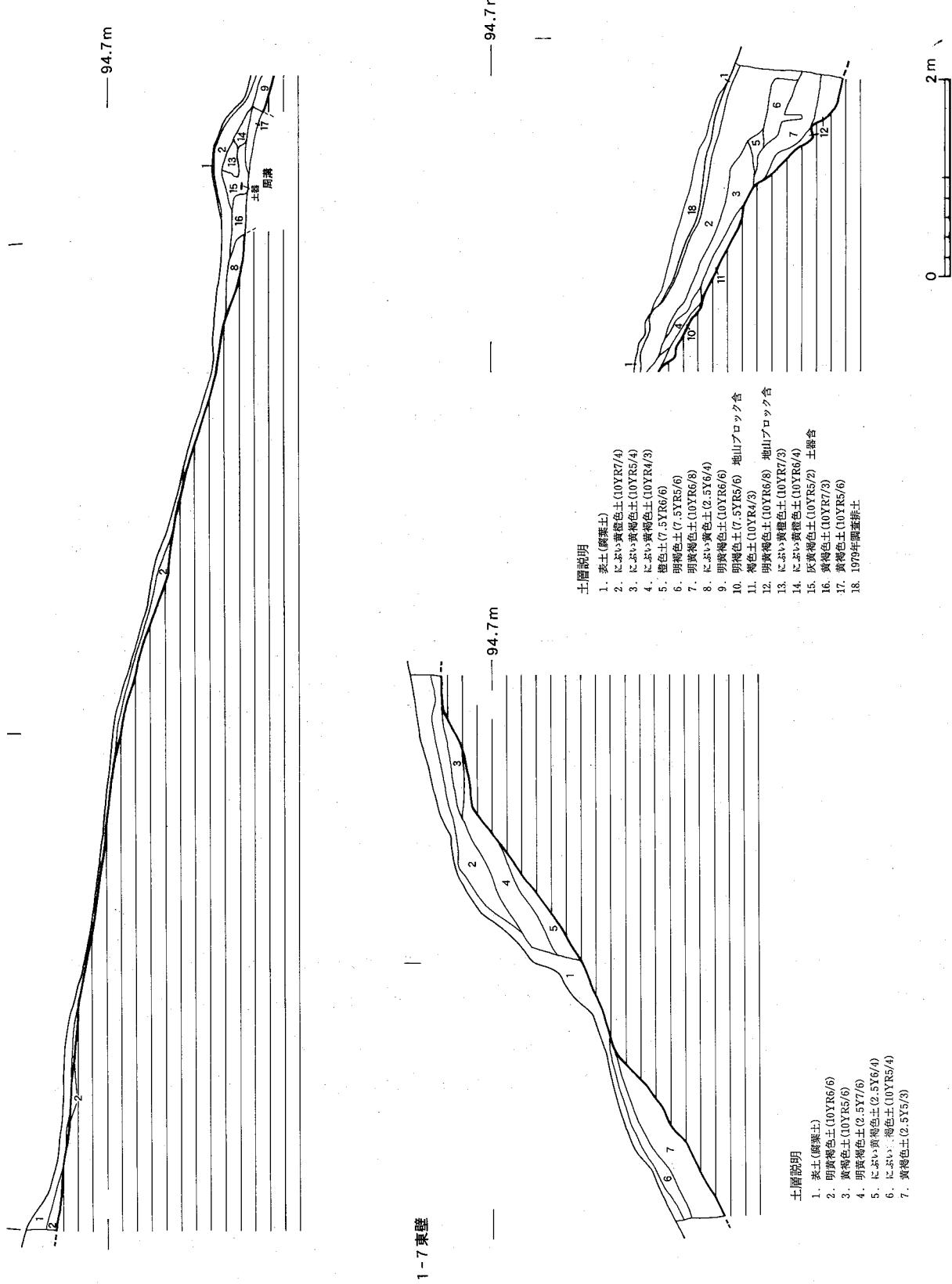
T 1 - 3



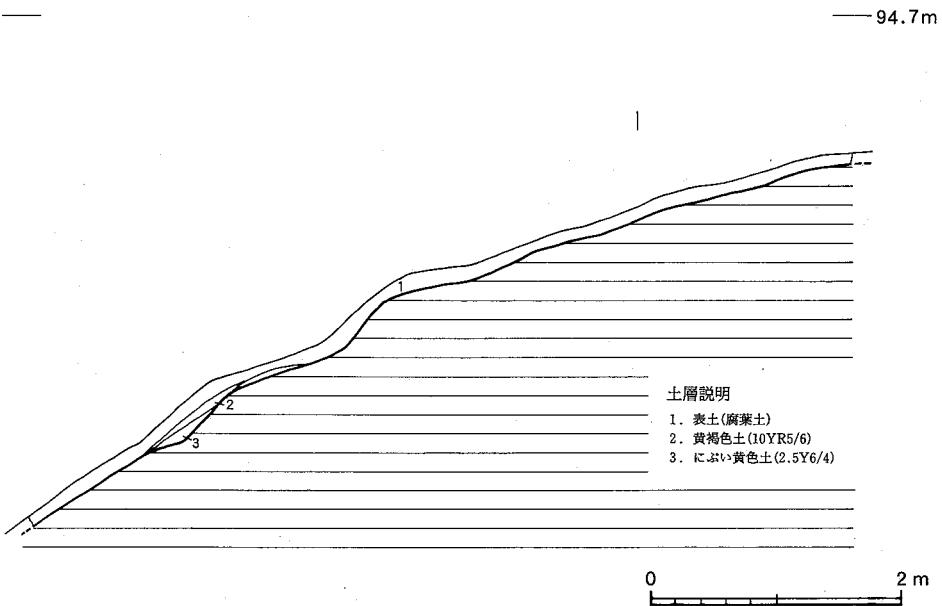
第28図 第1号古墳T1-1・T1-2・T1-3 土層断面図 (S=1:60)

第29図 第1号古墳T1—6 土層断面図 (S=1:60)





第30図 第1号古墳T1-7 土層断面図 (S=1:60)



第31図 第1号古墳T1-8 土層断面図 (S=1:60)

第1号古墳に伴う遺物については、土器片や鉄器片が出土している。前者については、T1-7の前方部東側墳端部にまとまって出土した。この箇所は第9号古墳に伴う周溝の南側端が確認されているが、この周溝の掘削の際に破損を受けた可能性が高く、一部は摩滅していた。1個体分と推定されるが、復元はできない（第32図1）。口縁部の形態などから甕形土器と推定されるが、恐らく古墳時代前期のものと考えられる。鉄器片については、T1-7の一部を南側に拡張したグリッドから出土しているものであるが、細片のため器種は不明である（第32図2）。

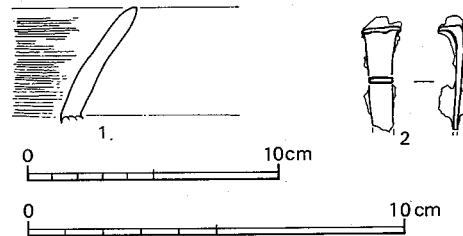
b. 出土遺物（第32図）

土師器（1） 甕の破片で、外反する口縁部で端部は尖り気味におわる。内面は横方向の刷毛目、外面はナデ仕上げ。同一個体と考えられる体部の破片が周辺から出土しているが、図示できなかった。淡い橙褐色を呈し、胎土は長石・石英などの砂粒を含み、焼成は良好である。

鉄製品（2） 幅0.7～1cm・厚さ1mm程度と全体的に薄造り。断面逆L字状を呈し一見釘のようであるが、扁平で形状が異なる。

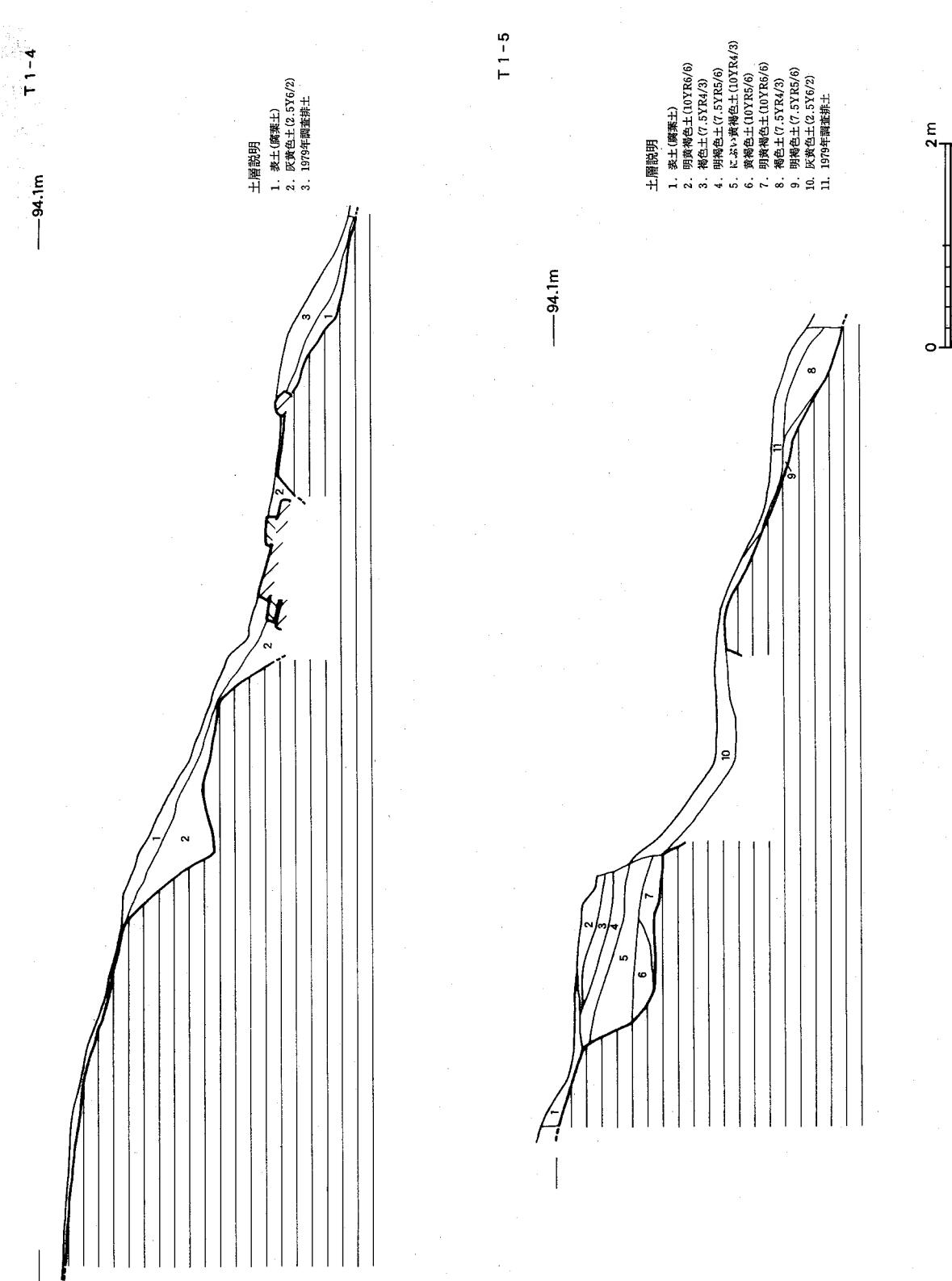
ii. 第9号古墳（第27、33図・図版31、32）

ところで、今回の確認調査では、T1-4・T1-5・T1-6及びT1-7において、第9号古墳に伴うと考えられる周溝を確認した。また、T1-4・T1-5において、それぞれ地山の傾斜変換点及びそれに伴うと考えられる平坦面を確認した。これによって、第9号古墳の規模・墳形について明



第32図 平成13年度遺構状況確認調査
出土遺物実測図
(1; S=1:3, 2; S=1:2,
いずれもT1-7出土)

第33図 第1号古墳T1—4・T1—5土層断面図 (S=1:60)



らかにすることことができた。すなわち、規模については南北約5m・東西約10mであり、墳形については橢円形を呈するものと考えられる。T1-5の土層観察によれば、第1号古墳よりも新しい時期に築造されていることが指摘できる。このことは、「昭和36(1961)年5月」に発掘調査され、『中小田古墳群』報告書(潮見1980)で報告されている出土遺物から推定される時期と齟齬をきたすものではない。

なお、この度の発掘調査では本古墳に伴う遺物は出土していない。

iii. その他の遺構(第27図・図版33a)

第1号古墳前方部墳頂部に設定したT1-6と、墳丘斜面側に設定したT1-2の墳頂部側において、土壙墓と推定される長方形の掘り込みを3基確認した。そのうちの1基は小口側に木棺を固定するために溝が穿たれているものである。規模については、明確にできた2基についてはいずれも長さ約2m・幅約1m程度のものである。これらは確認された位置などの状況から、本古墳に伴うと考えるよりも築造以前に構築された土壙墓群と考えたい。

そのほかに、小口側に溝を有する土壙墓の東側に、西側に段を持つ二段掘りの掘り込みを確認した。しかし、これについてはその西側にはT1-2で確認した、切り合って掘られた別の土壙墓が存在しているので、溝のような長く伸びるものではなさそうであり、それよりも土壙墓のようなものが想定できるが、現段階ではその性格を明確にできなかった。

なお、これらの遺構からの出土遺物はない。

iv. 小結

調査の結果、第1号古墳はこれまで曖昧だった前方部を中心として、墳丘の形状を描くことができ、前方後円墳であることが明らかとなった。また、T1-7で出土した土師器が第1号古墳に伴うのであれば、これまで竪穴式石室に副葬された遺物から築造時期が推定されてきたが(古瀬清秀は碧玉製車輪石、斜縁獸帶鏡の共伴を尊重して古墳時代前期中葉(4世紀中葉)と推定されている(古瀬1999))、土器からも築造時期を考えることができるようになろう。図示した口縁部は直線的に伸び端部は尖り気味であるもので、若島一則の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器編年におけるIII期、特にIII-2期の特徴に近い。このIII-2期は4世紀初頭から中頃までと推定されているが、この年代観は副葬品からの年代観と大きく齟齬をきたすものではなく、本古墳は前期中葉の築造と考えられる。

ところで、この度の調査では第9号古墳の墳形・規模も明らかにすることことができた。この古墳の築造時期については、出土した小型葉ロウ石製勾玉や細身の碧玉製管玉から、5世紀代と推定されている。この度の調査ではこの第9号古墳に伴う遺物は出土しなかったが、T1-4~7で確認した周溝は第9号古墳に伴うものであり、その位置関係や土層観察などから第1号古墳よりも後に築造されたことは明らかである。

第1号古墳前方部頂部からは土壙墓を少なくとも3基確認した。それらの確認状況や、第1号古墳の後円部の裾付近で土製勾玉が表採されていることから、第1号古墳に伴うものではなく、その

築造前、弥生時代に造られたものと考えられる。

引用・参考文献

- 潮見浩編 1980『中小田古墳群』(広島市の文化財第16集) 広島市教育委員会
古瀬清秀 1999「コラム 4 中小田古墳群」脇坂光彦・小都隆編『考古学から見た地域文化 一瀬戸内の歴史復元一』
溪水社
若島一則 2002「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌』I 財団法人広島市文化財団

6. 平成14年度

発掘調査は、平成15(2003)年2月17日(月)から3月31日(月)まで実施した。調査対象は、第10号古墳と弥生土器の散布地とした。

第10号古墳については封土の流出が著しく、埋葬施設である箱形石棺が里道上に露出しているため、本古墳の墳丘周辺等の部分的発掘調査及び露出している箱形石棺の清掃調査を実施することとした。トレンチは墳丘上に5箇所設定した。トレンチの名称についてはT10—○とし、T10—1から北側を見て時計回りにT10—2からT10—5とした。

弥生土器散布地については、散布状況、遺構の配置及び性格等を把握するため、遺構の存在の可能性が高い地点に部分的発掘調査を実施した。今年度は任意に設定した3箇所において発掘調査を実施した。トレンチの名称はT2003—○とし、北側からT2003—1からT2003—3とした。

i. 第10号古墳 (第34図)

第10号古墳は、第1号古墳及び第9号古墳が位置する尾根から北下手約90mのところに位置する。墳頂部の標高は63.59mである。「墳丘は削平を受け封土の流出が著しく墳形や規模は判然としないが、直径約5mの円墳と推定」されている(潮見1980)。しかし、露出している箱形石棺から約5m南側にわずかながら周溝の痕跡が認められ、この箱形石棺を中心としてこの周溝の痕跡をみかけの墳端とした場合直径約12m前後となる。『中小田古墳群』報告書によれば、この箱形石棺は既に蓋石の一部が開いていたのか、「長さ200cm・幅40cm・高さ35cm」という記述が見られる。またこの北側にも「小型の箱形石棺1基が存在する」とされる(潮見1980)。

トレンチは、露出した箱形石棺を中心として、東西方向にT10—2・T10—4、南北方向にT10—1・T10—3を、そしてT10—1に平行して、その1m東側にT10—5を設定した。

a. 墳形と規模 (第34, 35, 39図・図版35a, 37)

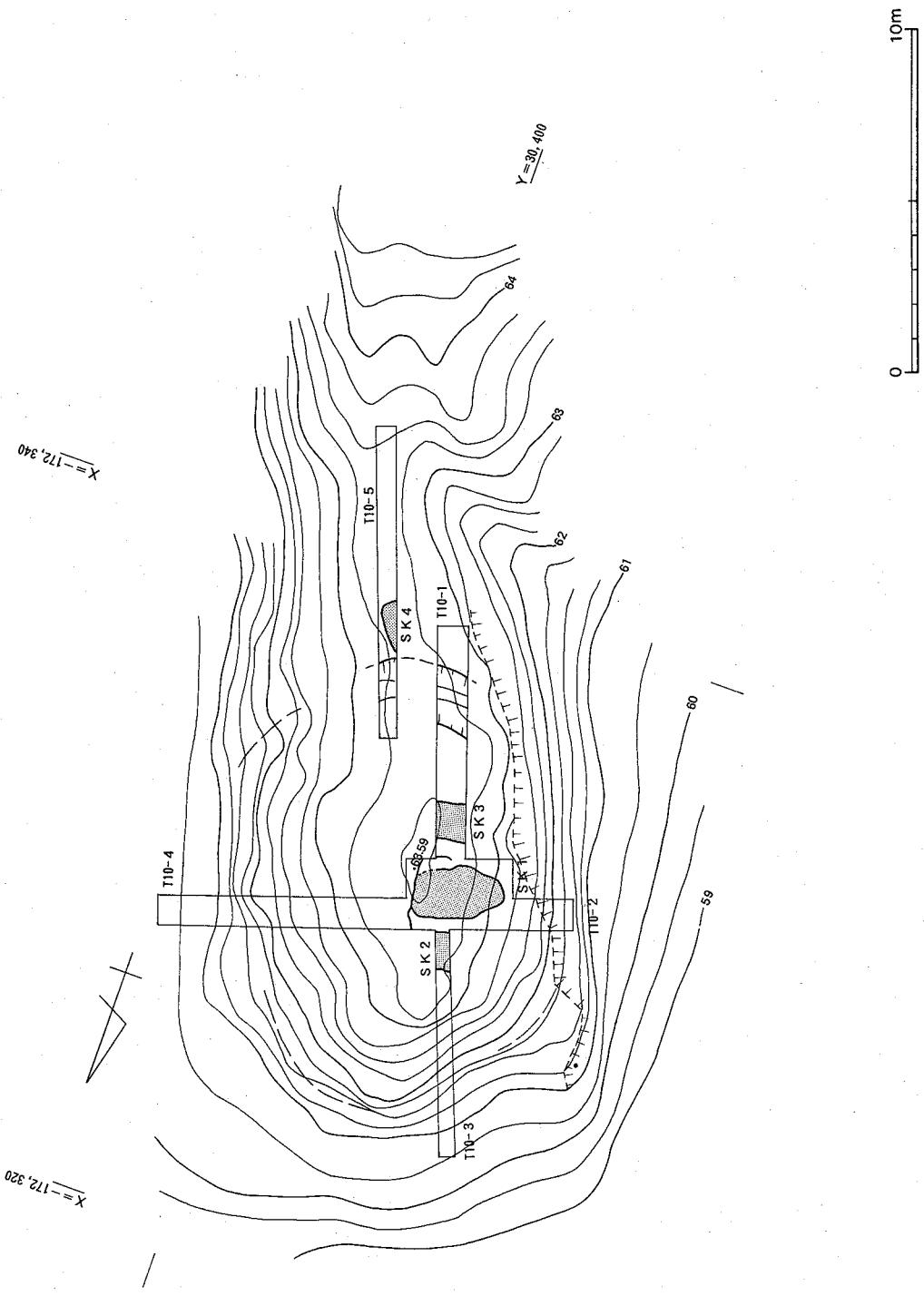
調査の結果、墳頂部は削平を受けていたものの、T10—1・T10—5において本古墳に伴う周溝を確認した。この周溝は、先述した地形観察で確認された周溝の痕跡と対応しており、推察どおりの結果が得られた。

そのほかでは、T10—2・T10—3・T10—4においては、後世の地形改変を受けているためか、墳端と考えられるような傾斜変換点は明確にすることはできなかった。しかし地形観察によれば、墳丘の東側や北側においては、T10—2やT10—3の箇所の周辺に僅かに傾斜変換する箇所が認められた。このことから、本古墳の規模・形状については、南北方向約12m、東西方向は西側が削平を受けており不明であるが約11m前後となるであろうから、やや南北に長い橢円形を呈するものと考えられる。現状での高さは周溝底部からは約0.4m、北側からは約1.8mである。

周溝については、尾根を寸断させるのみのものである。現状での規模は幅約150cm・深さ25~35cmである。なお、T10—1で確認された周溝埋土中上方から河原石が出土している。

周溝内やその周辺からは本古墳に伴う遺物は出土していない。

第34図 第10号古墳トレシチ配置図 (S=1:200)



第35図 第10号古墳T10-1~T10-3・T10-2~T10-4土層断面図 (S=1:60)

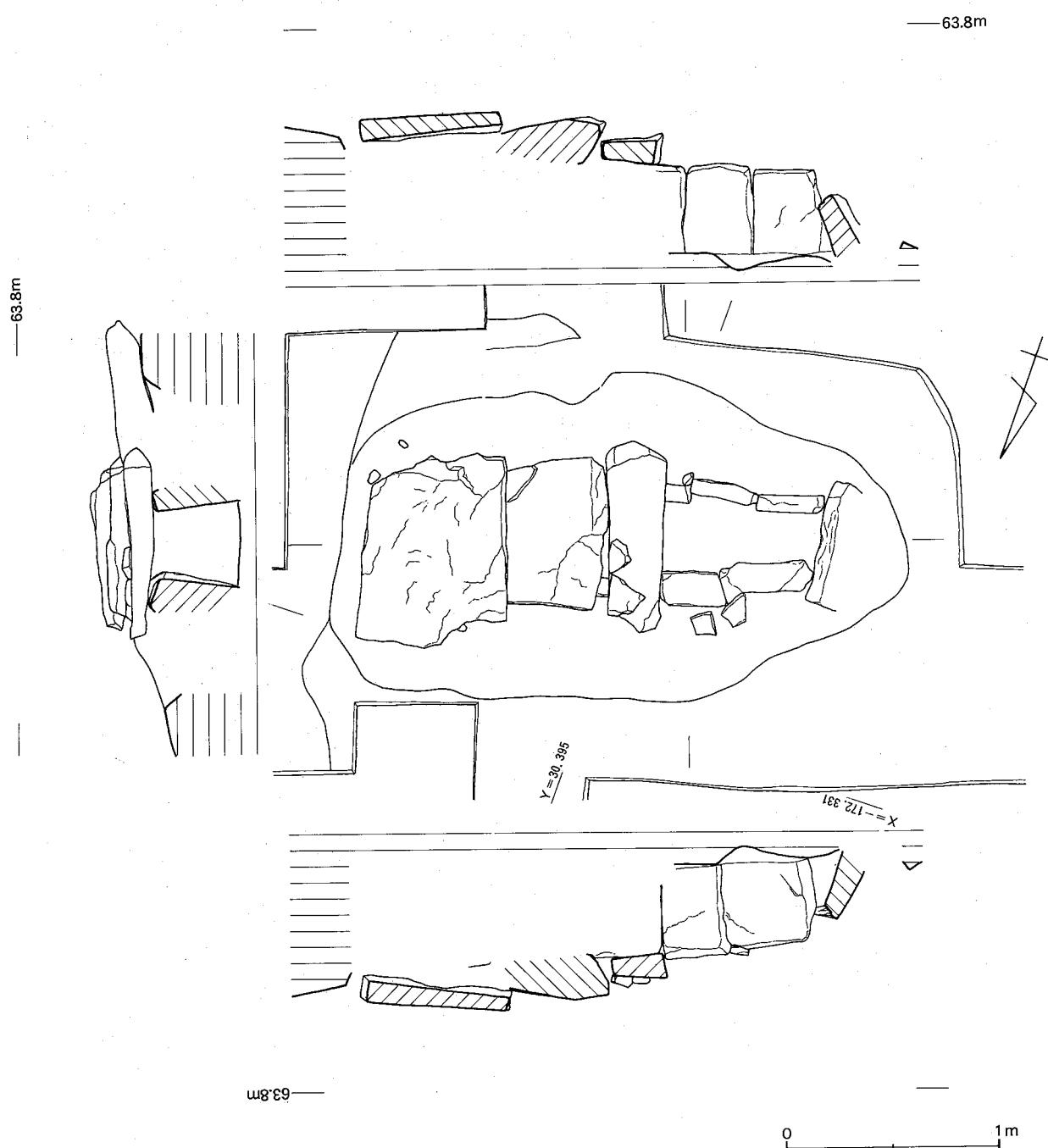


b. 埋葬施設（第36～38図・図版35b, 36）

『中小田古墳群』報告書によれば、埋葬施設については、露出している箱形石棺のほか、その北側にも箱形石棺が存在すると記述されている。この度の調査の結果、T10—3 からは露出していた箱形石棺の北側 1 m の位置に箱形石棺を、また T10—1 からは露出していた箱形石棺の南側 1.5 m の位置に土壙墓を確認した。このことから本古墳の埋葬施設は 3 基であったことが明らかとなった。

露出していた箱形石棺を SK1、その北側の箱形石棺を SK2、南側の土壙墓を SK3 と呼ぶ。

なお、いずれの墓壙からも出土遺物はない。



第36図 第10号古墳埋葬施設SK1実測図 (S=1:30)

① SK1 (第36図・図版36a)

SK1は蓋石の西側2枚が動いており、元位置を保っていない。その結果西側半分の壁面は露出し、西側小口石は東側に傾斜している状態であった。

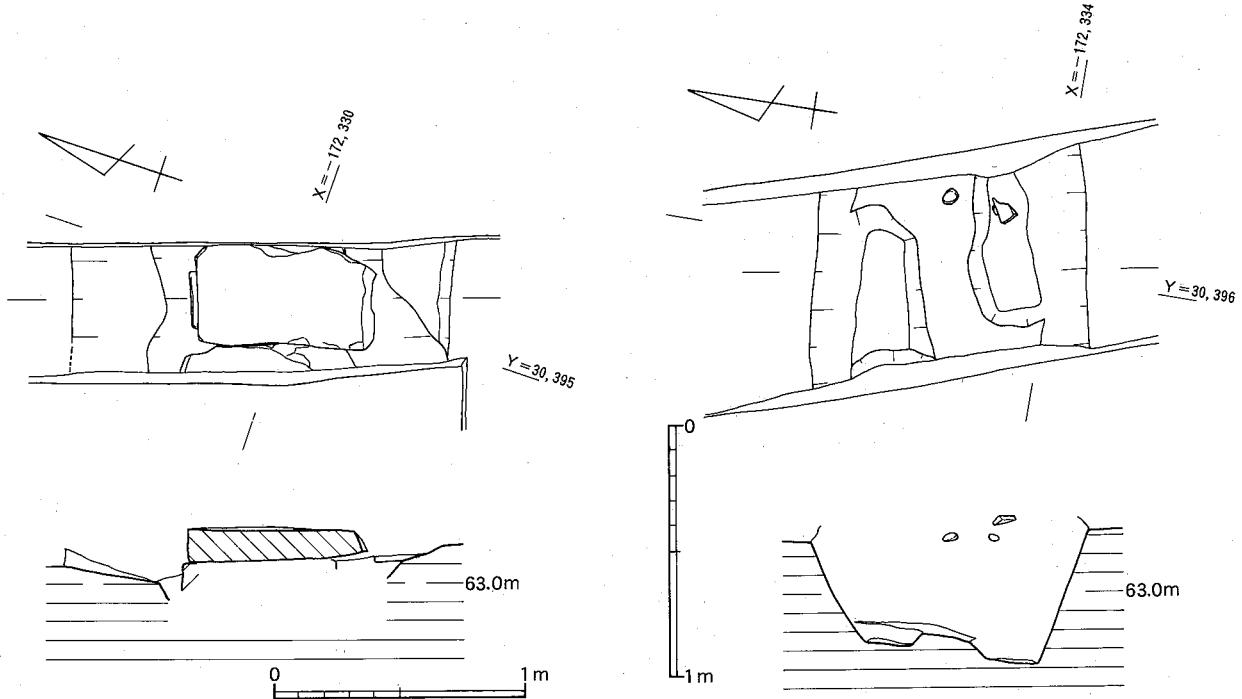
発掘調査については、墳丘上に設定した土層観察用畦を除去後、掘り方を確認できるよう拡張して掘り下げを行った。時間的な制約から、構架していた蓋石3枚を実測した外、内部は露呈している箇所のみを掘り下げ・実測を実施するに留めた。

確認された掘り方は、東側は一部二段掘りを呈し、石棺の構造に合わせて、西側に向けて幅狭になる傾向にある。長さは約260cm・幅は東側で約130cm、西側で約90cmである。

遺存した蓋石は3枚のみであったが、その規模は東側からそれぞれ90cm×65cm, 70cm×50cm, 90cm×25cmである。東側の2石と西側の蓋石との間には隙間が認められたこと、そしてその内部にも土砂がほとんど認められなかつたことなどの理由から、これらの遺存していた蓋石についても盜掘を受けた後再び戻された可能性が高い。なお西側3石目については、この上には板状の小礫が認められ、一部には目張りとして使用した粘土の付着も認められたことから、動いていない可能性もある。側壁や裏込め周辺から粘質土が認められたが、もともとは蓋石上面にも被覆していたと推定される。

側壁については、露呈している範囲内で、南側は3石分、北側は2石分が確認された。幅30cm程の板状の石材を縦方向に据えている。

箱形石棺の内法は長さ約200cm・幅は西小口側で30cm・高さは40cmである。石棺の幅は東側にいくに従って広くなる傾向にあり、埋葬頭位方向は東方位と考えられる。なお、石棺内面等には施朱は



第37図 第10号古墳埋葬施設SK2 実測図
(S=1:30)

第38図 第10号古墳埋葬施設SK3 実測図
(S=1:30)

認められなかった。掘り下げを実施した箇所からは副葬された遺物も認められなかった。

② SK2 (第37図・図版36b)

T10—3において確認された。先述したとおり、その存在については『中小田古墳群』報告書に記述されているが、地形観察によてもこの周辺地形は窪んでおり、その存在を窺わせた。

SK1の掘り方から北側50cmの位置に幅約1mの掘り方が掘り込まれている。なお、この埋葬施設については部分的に確認するに留めた。

確認できた範囲内では蓋石2石分を確認したが、大きさのわかるもので70cm×40cmである。ボーリング調査によれば、石材の存在する箇所は東西160cmの範囲内に収まるので、蓋石は4枚程度の石材を構架しているものと考えられる。この埋葬施設についても確認された蓋石間には隙間がみられたにもかかわらず、その内部には土砂がほとんど認められなかつたことから、盜掘を受けていると考えられる。

③ SK3 (第38図・図版36c)

T10—1において確認された。SK1の掘り方から南側約1.3mの箇所に掘り込まれた土壙である。部分的に確認しただけであるが、SK1とSK2の長軸方向と平行していることから墓壙と考えられる。また墓壙上面には河原石2個と小礫1個が確認された。墓標石のような役割を持っていた可能性もある。幅は105cm～110cm、深さは40cmである。墓壙床面は側壁側に幅25cm～30cm程度・深さ5cm～10cmの溝が掘り込まれていた。木棺を据えた痕跡とも考えられるが、溝の底面形状は不整形であり、かつ石棺の壁材の高さを揃えるために掘り込まれた溝に類似しているようにも見える。いずれにしても埋土は同一の土砂が堆積しており、墓壙として掘り込まれたけれども、使用されなかつた可能性もある。

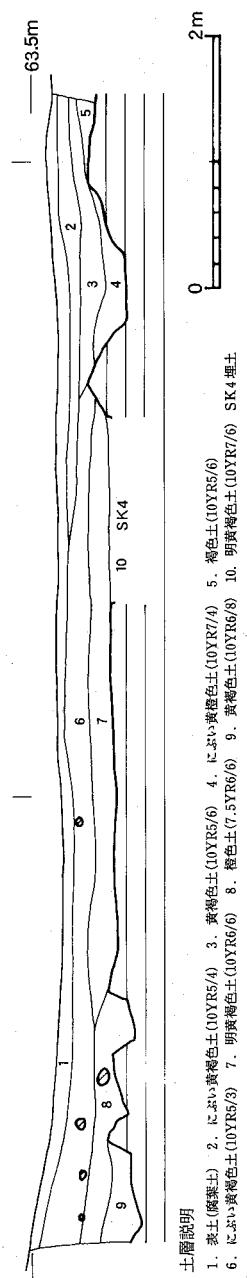
④ その外の遺構 (第34、39図・図版37c)

T10—5からは、周溝の掘削面よりも20cm～30cm下から地山面を確認したが、このトレンチの北端から2.4m南の位置で土坑(SK4)を確認した。このSK4は、トレンチの西側に延びることから、その範囲を把握することはできていない。

このSK4の所属する時期であるが、この周溝の掘削面から地山面までの堆積土中から弥生時代後期の土器が出土していることから、その時期かあるいはそれよりも以前の時期を想定しておきたい。

ii. 弥生土器散布地 (第40図)

『中小田古墳群』報告書によれば、「1965年以降第10号古墳西側下手の



第39図 第10号古墳T10—5土層断面図 (S=1:60)

認められなかった。掘り下げを実施した箇所からは副葬された遺物も認められなかった。

② SK2 (第37図・図版36b)

T10-3において確認された。先述したとおり、その存在については『中小田古墳群』報告書に記述されているが、地形観察によつてもこの周辺地形は窪んでおり、その存在を窺わせた。

SK1の掘り方から北側50cmの位置に幅約1mの掘り方が掘り込まれている。なお、この埋葬施設については部分的に確認するに留めた。

確認できた範囲内では蓋石2石分を確認したが、大きさのわかるもので70cm×40cmである。ボーリング調査によれば、石材の存在する箇所は東西160cmの範囲内に収まるので、蓋石は4枚程度の石材を構架しているものと考えられる。この埋葬施設についても確認された蓋石間には隙間がみられたにもかかわらず、その内部には土砂がほとんど認められなかつことから、盗掘を受けていると考えられる。

③ SK3 (第38図・図版36c)

T10-1において確認された。SK1の掘り方から南側約1.3mの箇所に掘り込まれた土壙である。部分的に確認しただけであるが、SK1とSK2の長軸方向と平行していることから墓壙と考えられる。また墓壙上面には河原石2個と小礫1個が確認された。墓標石のような役割を持っていた可能性もある。幅は105cm～110cm、深さは40cmである。墓壙床面は側壁側に幅25cm～30cm程度・深さ5cm～10cmの溝が掘り込まれていた。木棺を据えた痕跡とも考えられるが、溝の底面形状は不整形であり、かつ石棺の壁材の高さを揃えるために掘り込まれた溝に類似しているようにも見える。いずれにしても埋土は同一の土砂が堆積しており、墓壙として掘り込まれたけれども、使用されなかつた可能性もある。

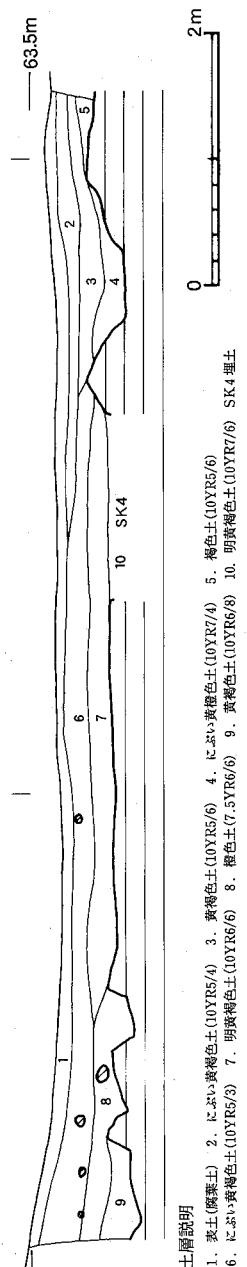
④ その外の遺構 (第34, 39図・図版37c)

T10-5からは、周溝の掘削面よりも20cm～30cm下から地山面を確認したが、このトレンチの北端から2.4m南の位置で土坑(SK4)を確認した。このSK4は、トレンチの西側に延びることから、その範囲を把握することはできていない。

このSK4の所属する時期であるが、この周溝の掘削面から地山面までの堆積土中から弥生時代後期の土器が出土していることから、その時期かあるいはそれよりも以前の時期を想定しておきたい。

ii. 弥生土器散布地 (第40図)

『中小田古墳群』報告書によれば、「1965年以降第10号古墳西側下手の



第39図 第10号古墳T10-5土層断面図 (S=1:60)

崖面に弥生後期土器をふくむ遺物包含層が露出し」(潮見 1980) ていると記述されているように、古くから土器が散布していることが知られていた。そこで、弥生土器の散布状況、遺構の配置及び性格等を把握するため、遺構の存在の可能性が高い地点に部分的発掘調査を実施した。今年度は任意に3箇所設定し、北側からT2003-1～T2003-3とする。

a. T2003-1 (第41図・図版38a, 39a)

史跡指定範囲内の最北端に位置する丘陵尾根上の平坦面に設置した。この平坦面は周囲の地形観察によれば人工的な印象を受け、後世の地形改変を受けていることが予測された。

① 調査概要

平坦面中央に12.5m×1mのトレンチを設定した。調査の結果、トレンチ南側に6mの範囲で遺構の存在（住居跡の可能性）を窺わせる掘り込み痕跡が確認されたため、その性格を確認するためその範囲内の掘り下げを実施した。しかしながら、その底面は平坦とはならず、また壁溝や柱穴等の住居に伴う施設については確認できなかった。この掘り込み痕跡範囲を中心とした本トレンチの埋土中からは土器細片、鉄斧片、砥石が出土している。このことから、当初は遺構が存在したのであろうが後世地形の改変を受け、搅乱を受けたのではないかと考えられる。そのほか、土層観察の結果、その北側に後世掘り込まれた穴を2箇所確認している。

② 出土遺物 (第44図1, 2)

鉄斧 (1) トレンチ内堆積土中出土。袋状鉄斧の基部の破片と考えられる。

砥石 (2) トレンチ内土層壁面出土。2.5cm×3.8cmの小型で、断面五角形を呈する。各面とも凹みや擦痕が認められ、使用面と考えられる。材質は砂岩製。

b. T2003-2 (第42図・図版38b, 39b)

T2003-1とT2003-3の位置する尾根軸線上から西側に派生する尾根上には平坦面が階段状に展開しているが、そのうち最も東側寄りに設置した。T2003-1から約30m南東に位置する。

① 調査概要

当初は6m×1mのトレンチで掘り下げを実施したが、住居跡らしき平坦面及び炉跡、柱穴跡が確認されたものの、東側壁面が確認できなかつたので、東側に3m拡張したものである。

調査の結果、西側壁面は確認できなかつたものの、直径ないし一辺6m以上の住居跡を確認した。深さは最大約80cmである。床面には柱穴と考えられるピット痕跡が6箇所認められた。また床面のほぼ中央部には炉跡が認められ、その内部は熱を受け赤色化していた。掘り方の東側上方については、地山が階段状に整形されている。土層観察によれば、同一の堆積土で覆われていることから、この住居跡を築造する際に加工された可能性が高い。住居跡埋土中から弥生土器片が多く認められたものの、床面直上からはひとつも出土していない。そのことからこの住居跡の時期を決める手立てはないが、住居跡廃絶後埋没過程で上方から流れ込んだ土砂中から出土した甕形土器(第44図3, 4)の形態的特徴が古墳時代前期初頭(若島編年III-1期)(若島2002)に位置付けられることから、



第40図 弥生土器散布地範囲内トレンチ配置図 ($S=1:1,000$)

住居の使用時期はそれよりも以前のものと考えられる。なお、住居跡の床面直上や埋土中から板状や棒状の河原石が計3点出土しているが、性格は不明である。

② 出土遺物（第44図3, 4）

甕形土器（3, 4） いずれも住居跡埋土中出土。3は、逆ハの字状に外反する口縁部で、端部は外側に屈曲させて尖り気味におわる。体部は倒卵形を呈し、肩や胴はあまり張らない。外面は刷毛目調整の後丁寧にナデ消し、内面は口縁部がナデ、体部がヘラ削りする。にぶい黄橙色を呈し、胎土は石英・長石・角閃石などの細砂粒を多く含み、焼成は良好である。復元口径は16.4cm、胴部最大径は13.7cmである。4は、逆ハの字状に強く外反する口縁部で、端部はさらに外側に強く屈曲する。端部は尖り気味におわる。体部外面は刷毛目調整のち丁寧にナデ消す。内面はヘラ削りする。口縁部は内外面とも丁寧なナデ調整である。黄褐色を呈し、胎土は石英・長石などの細砂粒を多く含み、焼成は良好である。

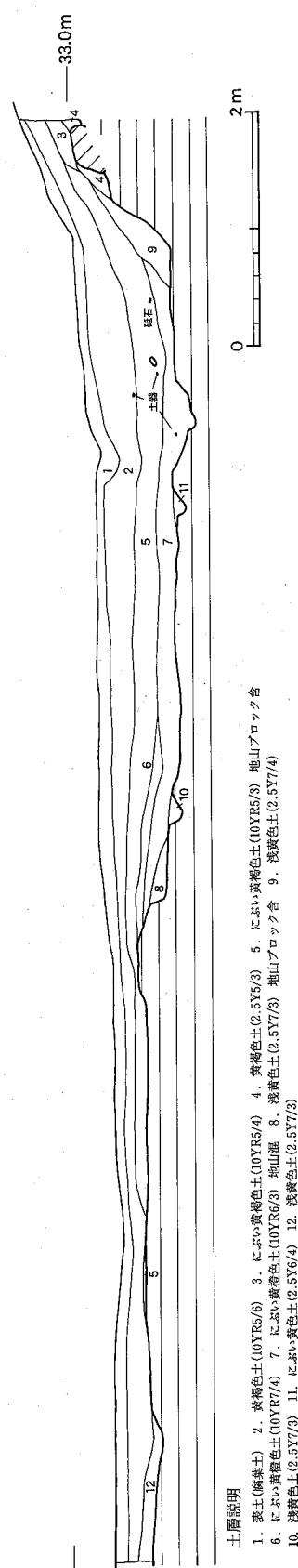
c. T2003-3（第43図・図版38c, 39c, d）

第10号古墳の位置する丘陵から北西方向に伸びる丘陵尾根上の平坦面に設定した約12m×1mのトレンチである。T2003-1から約50m南に位置する。

① 調査概要

トレンチの南端から約50cm北側の位置と、その1m北側に、それぞれ平行に掘り込まれた土坑を2基確認した。南側からSK5, SK6とする。SK5は主軸をほぼ東西方向にとる。規模は、長さは不明だが、幅は約1mである。深さは20~30cmと浅いことから削平を受けていると考えられる。床面の北壁側やトレンチ東壁付近には木棺を固定させたと推定される溝が確認され、また床面にはトレンチ西壁側から東小口側まで50cmの範囲に赤色顔料の塗布が認められた。このことから、このSK5は土壙墓と考えられる。ここから出土した遺物はないので築造時期は不明であるが、規模・形態的特徴や、この周辺の地形観察によれば周溝などの区画は認められなかったことなどの理由から、弥生時代に遡る可能性がある。

SK6は、SK5同様に尾根軸線に直交方向に掘り込まれたものであるが、その性格は把握できなかった。規模は、幅約1.5m・深さは1~1.2mである。床面から約5cm程度浮いた位置で、刀子が出土し



第41図 弥生土器散布地T2003-1土層断面図 (S=1:60)
土層説明
1. 美土(傳葉土) 2. 黄褐色土(10YR5/6) 3. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 4. 黄褐色土(2.5Y5/3) 5. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 地山プロック含
6. にぶい黄褐色土(10YR7/4) 7. にぶい黄褐色土(10YR6/3) 地山混
8. 淡黄色土(2.5Y7/3) 9. 淡黄色土(2.5Y7/4) 地山プロック含
10. 淡黄色土(2.5Y7/3) 11. にぶい黄褐色土(2.5Y6/4) 12. 淡黄色土(2.5Y7/3)

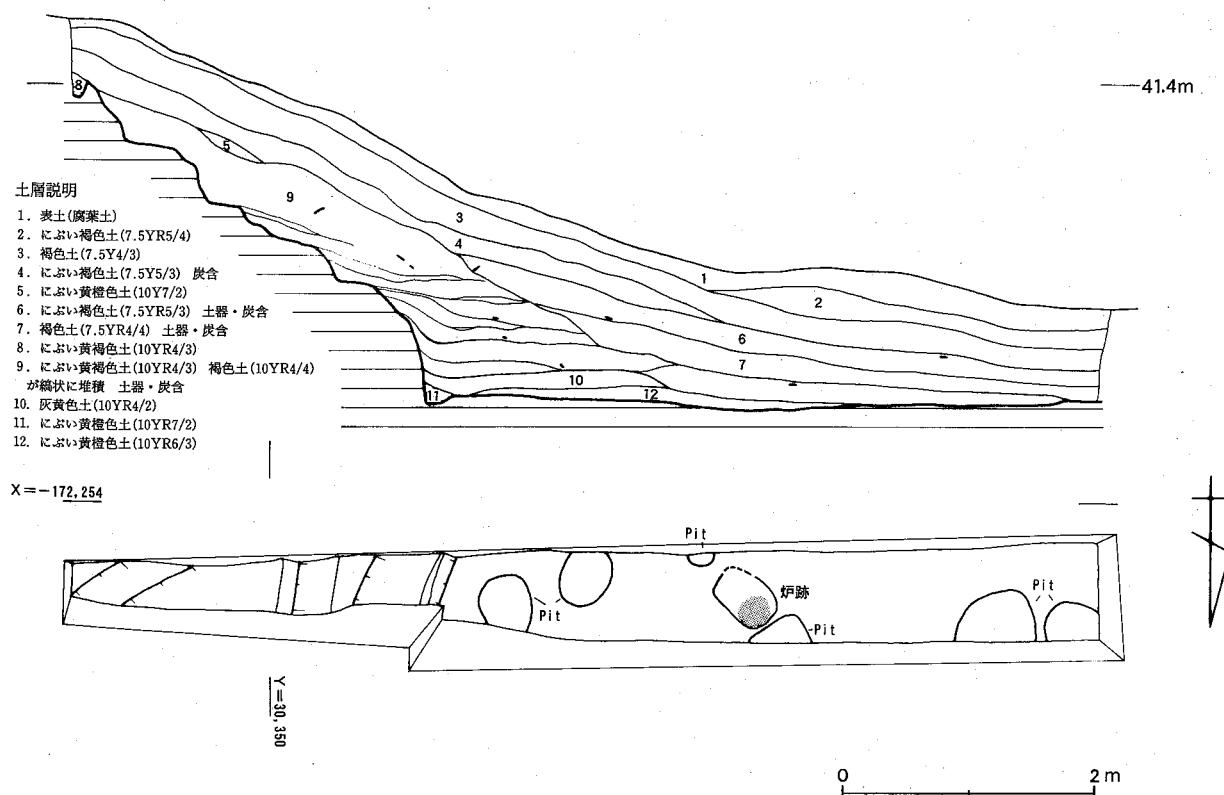
た(第44図5)。この刀子の出土状況は、ほぼ南北方向に置かれ、切先を南側、刃部を西側に向けていた。なお、このSK6については、深さが土壙墓に比べて6倍近くもあり、しかも堆積土も前者が褐色土系であるのに対して、後者のそれは真砂であった。先述のとおり、土壙墓の上面は削平されていること、また堆積土の状況が異なることから、両者の築造時期は異なる可能性がある。なお、埋土中からは土器の細片が2点出土しているが、時期を確定できるに至っていない。しかしながら史跡中小田古墳群内で中世遺構の堆積土はいわゆる真砂であることが多いことから、中世段階に掘り込まれた可能性がある。

② 出土遺物 (第44図5)

刀子(5) SK6の底面からほぼ直上出土。刃部に対して茎部は短い。刃部の脊はほとんど直線的で、端部は丸味を呈する。長さ11.8cm・刃渡り8.5cm・幅最大1.8cm・茎部厚さ0.4cmである。

iii. 小結

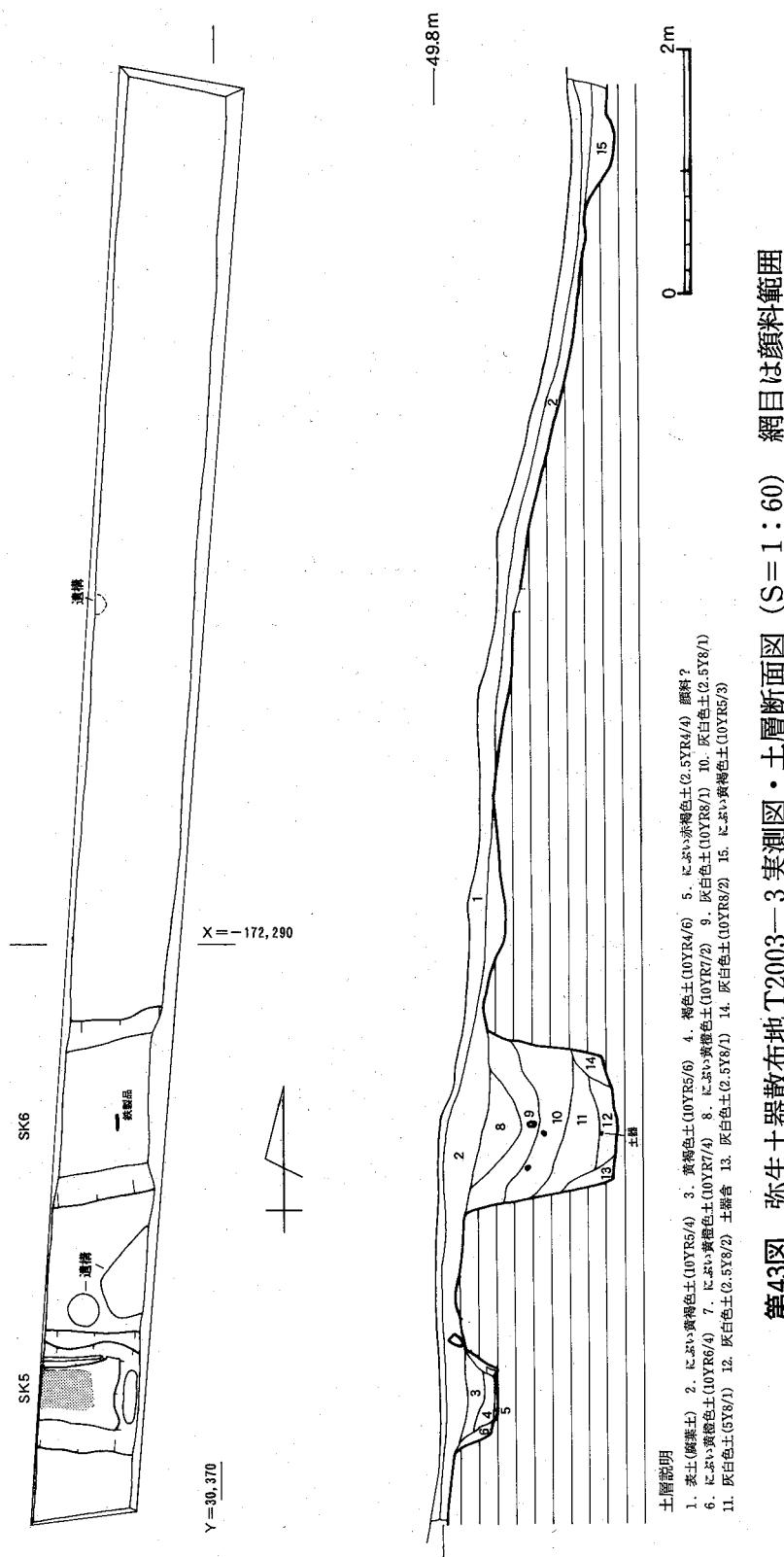
以上のことから、第10号古墳は、3基の埋葬施設が構築されていることが確認でき、少なくとも箱形石棺2基とも盗掘を受けているものと考えられる。墳丘の規模及び形状は約12m程度の円墳である。墳丘南側には尾根を寸断させるような溝が認められた。築造時期については出土遺物がないことから不明であるが、SK1のような構造形態は、太田川下流域における箱形石棺の構造形態の傾向から言えば、概ね5世紀代と考えられる。



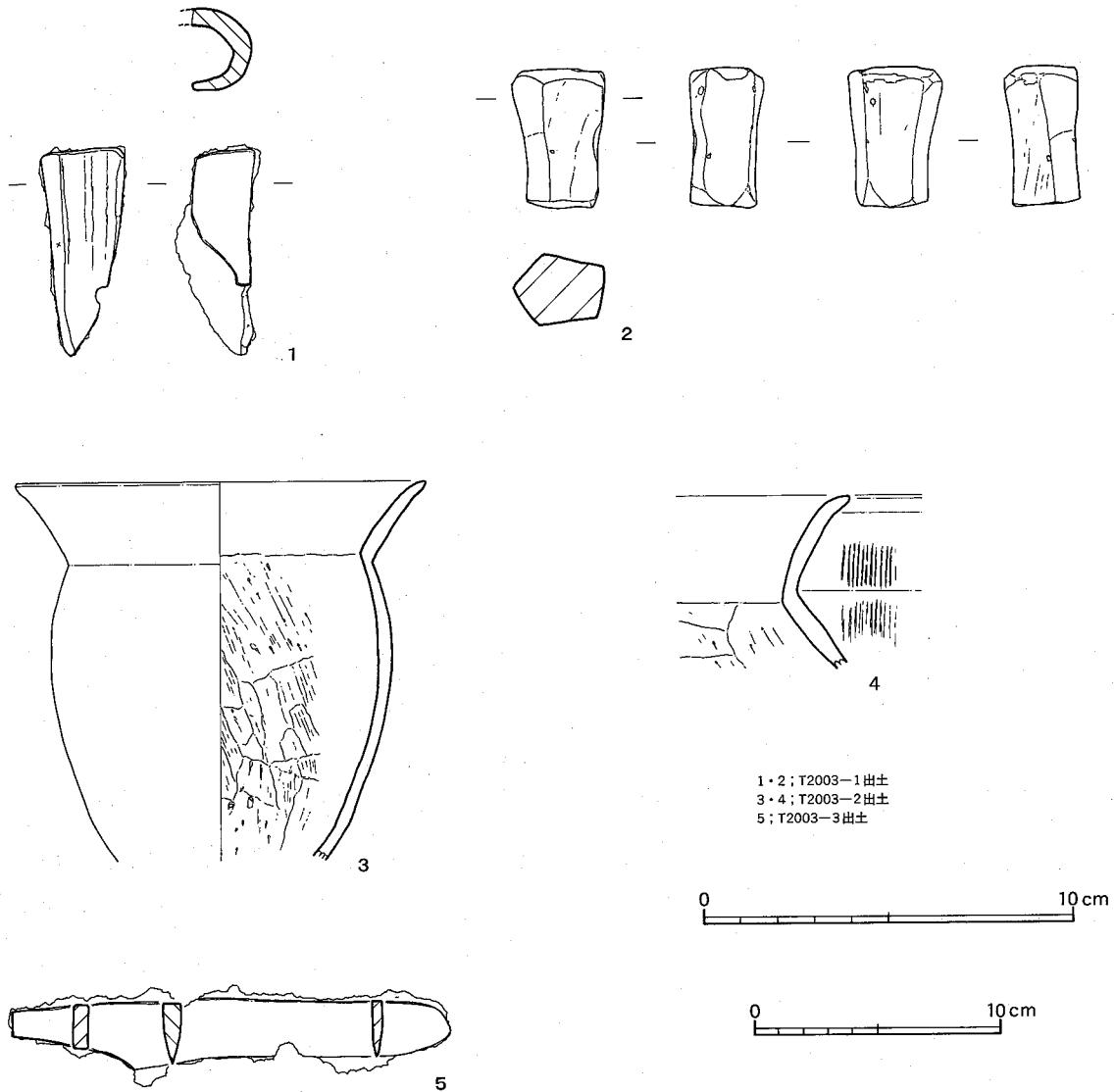
第42図 弥生土器散布地T2003-2 実測図・土層断面図 (S=1:60)
網目は焼土範囲、土層中の、は土器

弥生土器散布地内に設置したトレンチについては、T2003-1では遺構の遺存状況は悪かったが、その他ではT2003-2では弥生時代終末期の住居跡、T2003-3では土坑2基が確認できた。後者の土坑2基のうち、1基は弥生時代の土壙墓と考えられ、もう1基については時期を明確にできなかったが、床面近くから刀子が出土しており、その形態的特徴から時期が新しくなる可能性がある。なお、両土坑堆積土の土質に違いが認められたが、古墳群内の状況からすれば、この土質の違いは時間差と考えられ、中世段階に下る可能性が高い。

なお、今回設置した箇所のみならず、この遺物散布地範囲内の平坦面上にはなんらかの遺構が存在する可能性が高い。この中小田古墳群の立地する丘陵尾根上には、既に「この丘陵一帯には弥生後期の集落と墳墓が分布し、それにひきつづいて古墳が築造され」(潮見 1980) ていると報告されているように、弥生時代後期に集落や墳墓が点々と存在していたと思われる。集落廃絶の時期と古墳築造開始時期の間がどの程度あるか不明であるが、恐らくほとんど開きがないものと思われ、すでに指摘されているように「弥生時代後半～古墳時代前半期まで連続した



第43図 弥生土器散布地T2003-3実測図・土層断面図 (S=1:60) 緑目は頸部範囲



第44図 平成14年度遺構状況確認調査出土遺物実測図 (1・2・5; S=1:2, 3・4; S=1:3)

重要な遺跡群である」(潮見 1980) と言える。

引用・参考文献

- 潮見浩編 1980 『中小田古墳群』(広島市の文化財第16集) 広島市教育委員会
 若島一則 2002 「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌』I 財団法人広島市文化財団

7. 平成8年度

平成8年度は、測量調査が未実施であった、第7号古墳、第8号古墳、第11号古墳、第12号古墳の墳形・規模等の概要把握を行うため、地形測量を実施した。実施期間は、樹木の伐採を含めて、平成8(1996)年11月12日(火)から12月27日(金)までである。

このうち、第7号古墳と第8号古墳は近接しており、両者をまとめて報告するものとする(第45図)。また、第12号古墳と第11号古墳についても近接するが、第11号古墳周辺は地形改変が著しく、墳丘形状を描くことはできていない(第46図)。

なお、この測量調査に並行して周辺の現地踏査を行ったところ、第12号古墳の西側約10~20m下方に、古墳と思われる地形を2箇所確認した。ただし、その性格については明らかではないため、図示も行っていない。

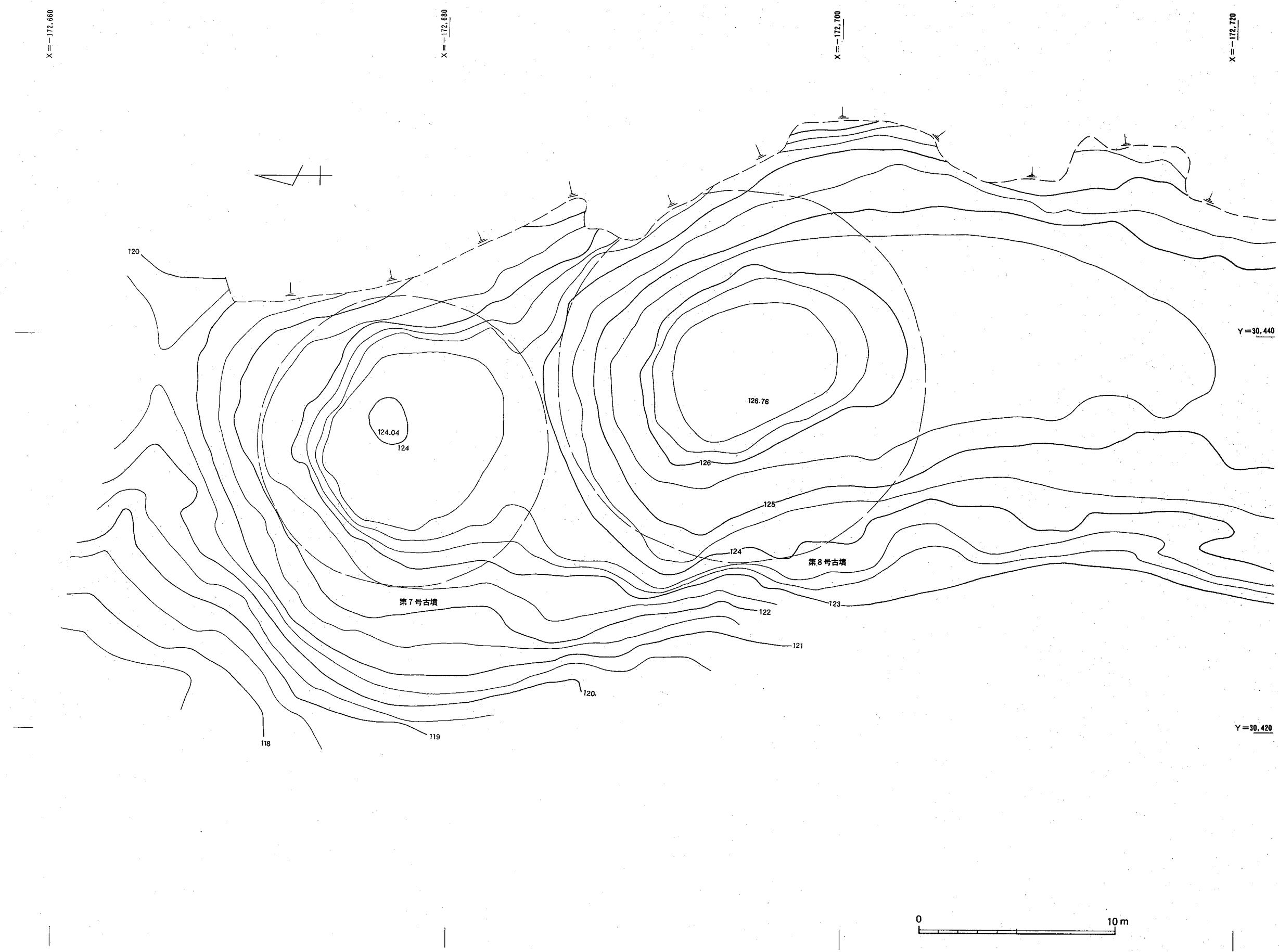
第7号古墳は、第6号古墳の南25mにあり、第8号古墳はその南側に近接するものである。両者は、あたかも一体とも受け取られ、「前方後円墳」の可能性も指摘されている(文化庁1998)。しかし地形測量によるかぎりでは、両者の間、標高123.5mの等高線のラインは東西側とも強く内側に抉れたように描かれており、それが第7号古墳の墳端を示していると考えられ、これらは別々の古墳と捉えたほうがよいと考える。第7号古墳はこの等高線のラインと北側における傾斜変換点を結ぶと直径約15m、高さ1mの円墳と推定される。第8号古墳については西側を中心に地形の改変が著しいが、南側の傾斜変換点にあたる標高126m以南は広い平坦面が認められこの傾斜変換を南側墳端と推定した。また北側は第7号古墳南端と接すると考えられ、他の箇所の等高線ラインを考慮して直径約20m、高さ1~2mの円墳と推定される。なお、墳頂部におけるボーリング調査によれば、第7号古墳は削平されているため埋葬施設は未確認で、第8号古墳については石室ないし石棺の存在が推定されている(潮見1980)。

第12号古墳については、第8号古墳の南約40mのところに位置する。後世の地形改変が著しかつたが、南側の鞍部周辺に認められる等高線や、丘陵北側の傾斜変換点はその北側に平坦面をともなうことから、これらが南側と北側の墳端と考えた。また、東側などで認められる等高線の傾斜変換点を結ぶと、直径約20m程度の規模の円墳と考えられ、高さは1m強と考えられる。その北側の第11号古墳の位置する箇所は後世の地形改変が著しく、遺存状況はよくなかったため、墳丘形状については明確にできなかった。

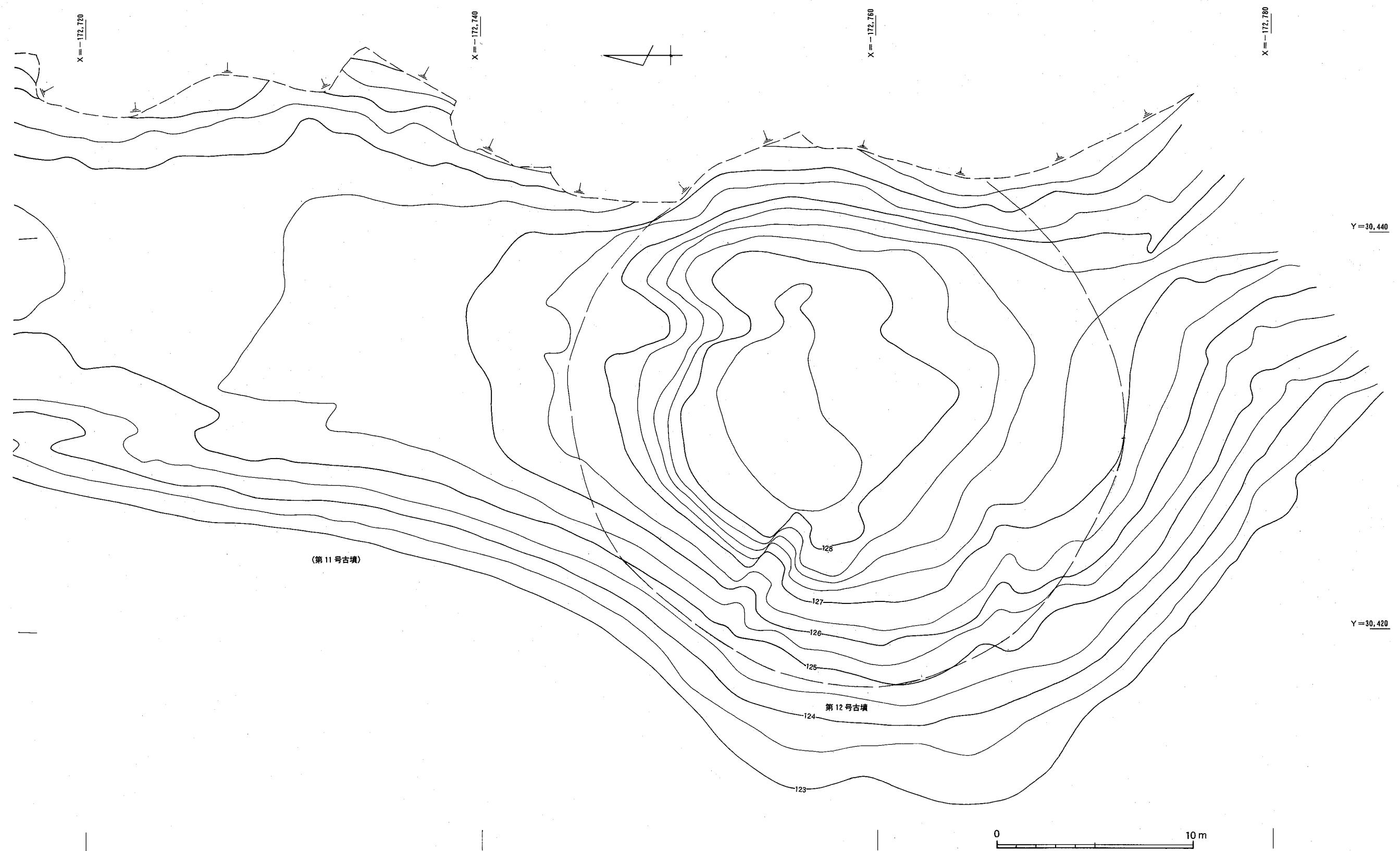
これらの古墳については、現地踏査で確認された2箇所の古墳状の地形を含めて、今後確認調査を実施し墳形や規模など明確にしてゆく必要があろう。

引用・参考文献

- 潮見浩編 1980『中小田古墳群』(広島市の文化財第16集) 広島市教育委員会
文化庁 1998「動向 平成6・7年度史跡の新指定 中小田古墳群」『考古学雑誌』第83巻第2号 日本考古学会



第45図 第7号古墳・第8号古墳測量図 (S=1:200)



第46図 第11号古墳・第12号古墳測量図 ($S = 1:200$)

IV まとめ

この度の7カ年にわたる遺構状況確認調査により、調査対象となった古墳について、これまで述べてきたように、様々な事項が明らかとなつた。また、新たに2基の古墳が確認され、合計14基の古墳からなる古墳群となり、太田川下流域では傑出した内容と規模を誇る、まさに国史跡に相応しい遺跡であることが再認識させられるものであった。一方、古墳群が築造される以前の弥生時代においては集落地・墓地として、またのちの中世段階においては当時の豪族の拠点となる山城として利用されていたことも明らかとなつた。太田川下流域における古代遺跡の豊富な地域の中にあって、まさにこの尾根丘陵がひときわ重要な地であったことを示すことにもなつた。今後これらの成果をもとに整備された史跡中小田古墳群が、この地が当時のひとびとにとって重要な地であったように、いつまでも市民の学習活動・文化活動・レクリエイション活動の場、憩いの場として、愛される場所となってゆくものと考える。

あらためてこの度の確認調査での成果を概述して、まとめとしたい。

1. 第5号古墳は、直径約12m・高さ約1~1.5mの円墳で、墳丘斜面に葺石を施していた。東側を除いて周溝が巡っている。築造時期は不明だが、5世紀頃と推定される。
2. 第6号古墳は、直径約23m・高さ2.8m~4mの円墳で、遺存状態のよかつた西側を中心に三段に葺石が巡ることが判明した。溝は南北側に尾根を断ち切るものである。築造時期は不明であるが、太田川下流域における他の古墳の状況からすれば、5世紀頃の可能性が高い。
3. この第5号古墳と第6号古墳の境西側には新たに土壙と箱形石棺を埋葬施設とする方形墳を確認した(第13号古墳(仮称))。長さ約10m・幅約7m・高さ最大1.2mの規模である。時期は、立地状況や土層観察などから、第6号古墳よりも新しく、第5号古墳よりも古い。
4. 第4号古墳については、中世段階において、この地が『芸藩通志』に見られる狐城築造とともに大きく地形改変が行われており、地形測量・観察などで推測された「帆立貝式」古墳となるかどうかについては明確にすることはできなかった。しかしながら、頂部において埋葬施設を確認することができた。この埋葬施設は削平を受けていたが、現状で長さ2.8m・幅1.2~1.4m・深さ0.05~0.4mの規模である。そのほぼ中央に170cm×65cmの木棺が納められていたと推定された。頭部側に鉄剣1・鉄斧1が副葬されていた。築造時期は不明であるが、副葬された鉄製品はいずれも古い様相を呈しており、4世紀代と推測される。
5. 第3号古墳についても中世山城の築造に伴って地形改変が行われていた。特に、南側墳丘斜面に埋葬施設を確認したことで、この古墳の現地形は後世の地形改変によるものと判明した。現地形からはもともとの墳丘形状を復元することは困難であるが、土層観察などから、一辺ないしは直径約13mの方墳ないし円墳と考えられる。埋葬施設は堅穴式石室で、中世山城築造に伴い半壌状態であった。元位置を保っていない鉄鏸9点と、石室床面から鉄剣1・性格不明鉄製品1が出土した。築造時期は、埋葬施設の構造や副葬された遺物の型式が第2号古墳に類似していることから第2号古墳の5世紀中頃に近い時期と推定される。しかしながら、第2号古墳に比べて副葬

品が少ないとこと、第2号古墳に見られた礫が敷いてなかつたことなどから、第2号よりも後出する可能性がある。

6. 第2号古墳についても、この地が山城築造に伴つて地形改変が行われていた。地形観察から北側平坦面に造り出しの存在が指摘されていたが、これについては、南側の墳端と推定される箇所とこの北側平坦面との標高差が3m以上あることから、北側裾に認められた郭や堀切形成による後世の地形改変を考慮しても、その存在を否定せざるをえない。このことから本古墳は直径20m・高さ2.5m程度の円墳と推定される。

7. なお、この第2号古墳の北側平坦面上に新たに竪穴式石室と考えられる埋葬施設を確認した。上述したようにこの平坦面に第2号古墳の造り出しあは存在しないため、この地に別の古墳（第14号古墳（仮称））が築造されていたと捉えた。この平坦面も削平が著しく、古墳の形状は不明である。また、この埋葬施設についても全貌は明らかになつてないが、ボーリング調査により長さ4m・幅1.5m程度の規模と推定される。掘り方内から鉄鎌が出土しており、築造時期は5世紀以降と考えられる。

8. 第1号古墳は、すでに全長30m・後円部径約20mの前方後円墳と推定されていたが、再度改めて確認を目的として、くびれ部から前方部を中心に確認調査を実施した。その結果、墳丘裾にあたる傾斜変換点と平坦面を確認し、全長約28.5m・後円部径18mの前方後円墳であることが分かった。前方部東墳端部から土師器が出土しており、このことから本古墳は4世紀中頃に築造されたと推定される。

9. 第1号古墳の北側墳端に位置する第9号古墳については、その南側に尾根を寸断する溝が巡ることが明らかとなつた。また、規模は10m×5mと東西方向に長い楕円形状墳と考えられる。

10. 第10号古墳は、直径11~12mの円墳で、南側に尾根を寸断させた溝が掘り込まれている。埋葬施設は、石棺2基と土壙1基の3基からなる。時期については不明であるが、5世紀代と考えられる。

11. 中小田古墳群については、古墳の位置関係から、第1号・第9号古墳のグループ、第2号～第4号古墳のグループ、第5号～第8号・第11号・第12号古墳のグループと大きく3群に分けられる。これが単なる地形的制約によるものなのか、又はこれらのグループには何らかの意味があるのか今回の確認調査では未確認である。少なくとも第2号古墳と第3号古墳は埋葬施設や副葬品で共通点が認められ、第5号古墳と第6号古墳はそのほかのグループの古墳には認められない外表施設を持つことで共通しており、それぞれ各古墳の被葬者間で何らかの関係が指摘できる。今後古墳群内でのグループが意味を有するのか否か、有すればそれはどういう意図のもとでなされたのかを確認してゆくことが課題であろう。

12. 第5号古墳の北側、第4号古墳南側平坦面上、弥生土器散布地範囲内において弥生時代後期と考えられる住居跡を確認したほか、第4号古墳南側平坦面上からは貯蔵用と考えられる土坑1基、第1号古墳前方部や弥生土器散布地範囲内において弥生時代後期と推定される土壙墓が確認された。こうした事例にとどまらず、各年度においては、各トレンチ内からはほとんど図示できていないが、土器片や鉄製品、石製品が出土している。このことから、この丘陵一帯、特に比較的広

い平坦面が形成された地点には、中小田古墳群が築造される直前まで弥生時代の集落地及び墓地として選ばれていたと考えられる。すでに昭和54(1979)年度の発掘調査において土器蓋土壙墓や貝塚が確認されてこうしたことは予測されていたが、このことを証明する結果となったといえよう(潮見 1980)。なお、土器片の中には中期中葉頃まで遡るものも少なくなく、太田川下流域においては大明地遺跡(妹尾・植田 1987)や弘住遺跡(石田 1983)など同時期の遺構が存在する事例があり、当該時期の遺構が存在している可能性もある。

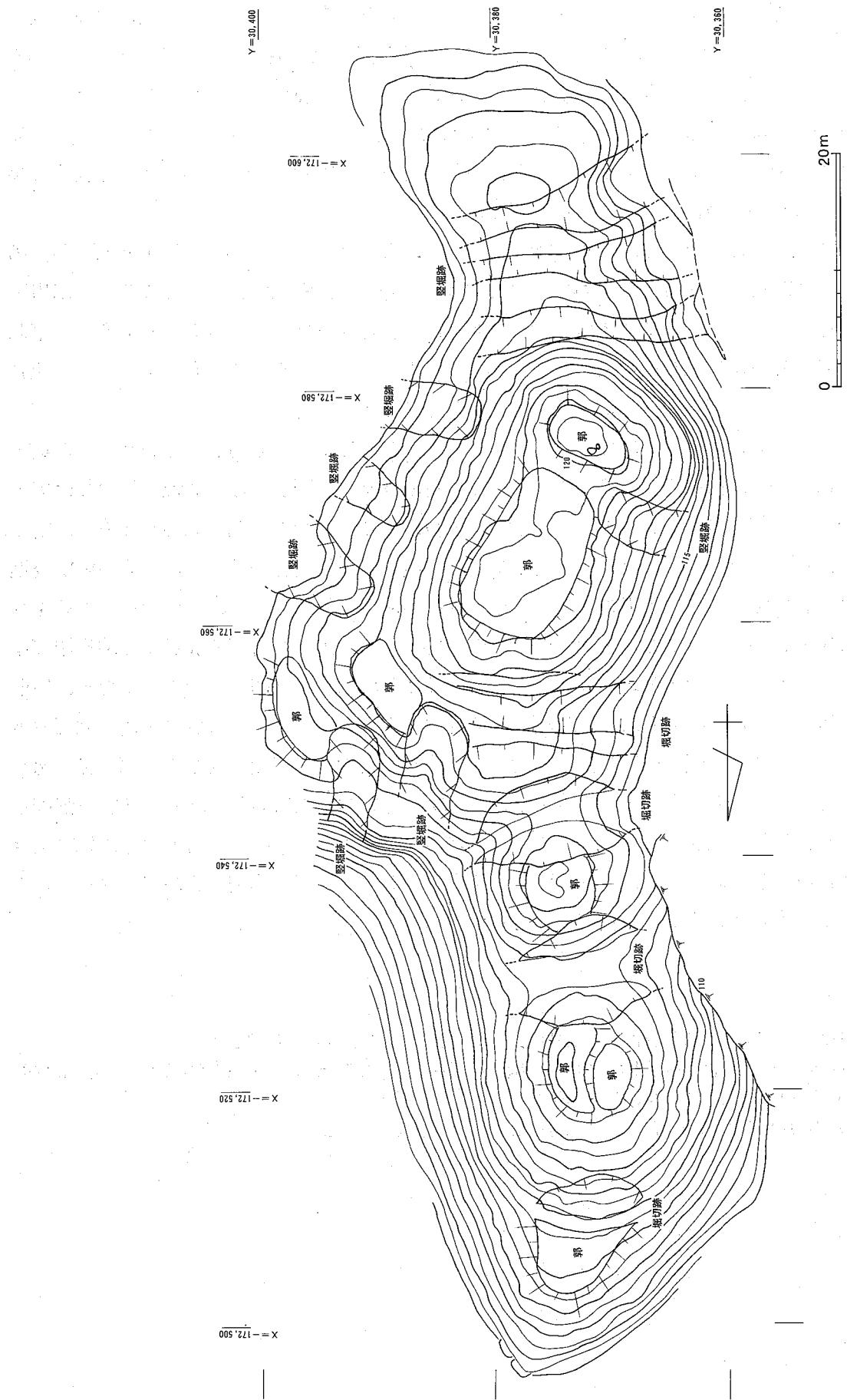
これらの弥生時代の遺構が確認された標高を見ると、散布地範囲内で30m~50mと低いが、第1号古墳付近で96m、第4号古墳南側平坦面で114m、第5号古墳付近で119mとなる。太田川下流域東岸で確認されている集落遺跡の中では比較的高所に遺構を構築している傾向にある。東側には比高差40~50mの谷地が尾根上辺付近まで入り込んでいることもある。恐らくこの谷に流れ込む小河川を利用して、この谷地に耕作が営まれたものと考えられる。

13. 中世段階においては第4号古墳の位置を中心として山城(狐城)が築造されていた。この縄張りについては、概ね北は第2号古墳から南は第4号古墳南側平坦面までの約90mに及ぶ範囲であったようである。第4号古墳を主郭として第3号古墳、第2号古墳との間に堀切を形成し、古墳の墳頂面を削平してそれぞれ郭として利用している。第4号古墳南側平坦面には3条の畝状堅堀が確認された。また、第4号古墳の北側には当初堀切が形成されていたが、その後その堀切を埋めて、そこを郭としていることも確認できたほか、主郭とした第4号古墳の周辺には地形観察などから小郭群や堅堀などの痕跡が各所に認められ、幾度か縄張りを強固なものにするため、地形改変を繰り返していたと考えられる(第47図)。確認された遺構をみると、東側や南側に堀切や堅堀が多く構築されている傾向にあり、地形的に比較的急斜面である西側に対して東側の谷や南からの攻めに弱いためであろう。また、第2号古墳や第3号古墳の位置の郭も北側の防御を強固なものにしようとした結果なのである。なお、主郭として利用された第4号古墳は太田川に突き出したように位置しており、この山城は西側を意識したものといえ、比較的急傾斜となっている西側斜面上にも山城に伴う遺構が存在する可能性が高い。

引用・参考文献

- 石田彰紀編 1983『弘住遺跡発掘調査報告』(広島市の文化財第25集) 広島市教育委員会
植田千佳穂・妹尾周三 1987「大明地遺跡」植田千佳穂・妹尾周三編『山陽自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(IV) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
潮見浩編 1980『中小田古墳群』(広島市の文化財第16集) 広島市教育委員会

第47図 山城（狐城）縄張り図（略測・一部）（ $S=1:800$ ）



図版



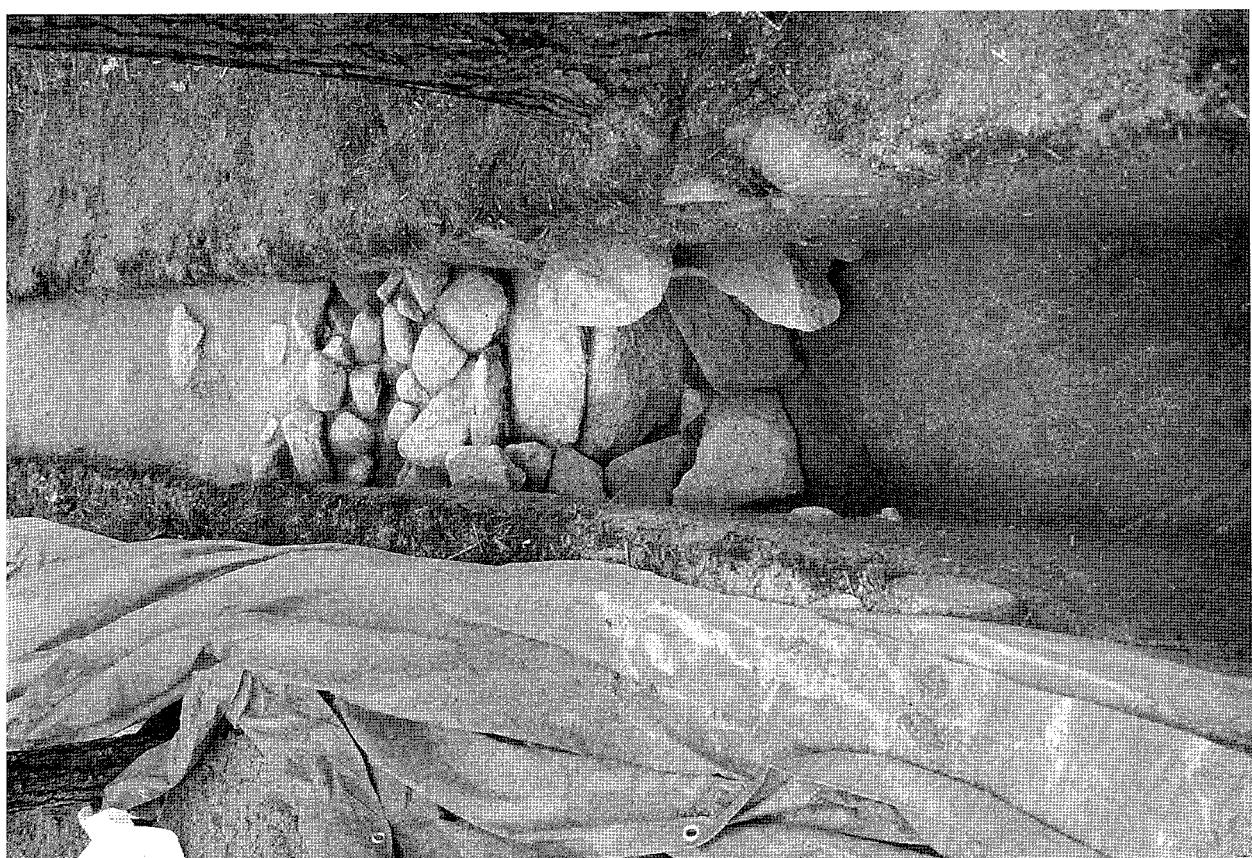
a. T5-1 磚石確認状況（北から）



b. T5-2 磚石確認状況（北から）



a. T5-3 磚石確認状況（東から）



b. T5-4 磚石確認状況（南から）



a T5-5 石確認状況 (西から)

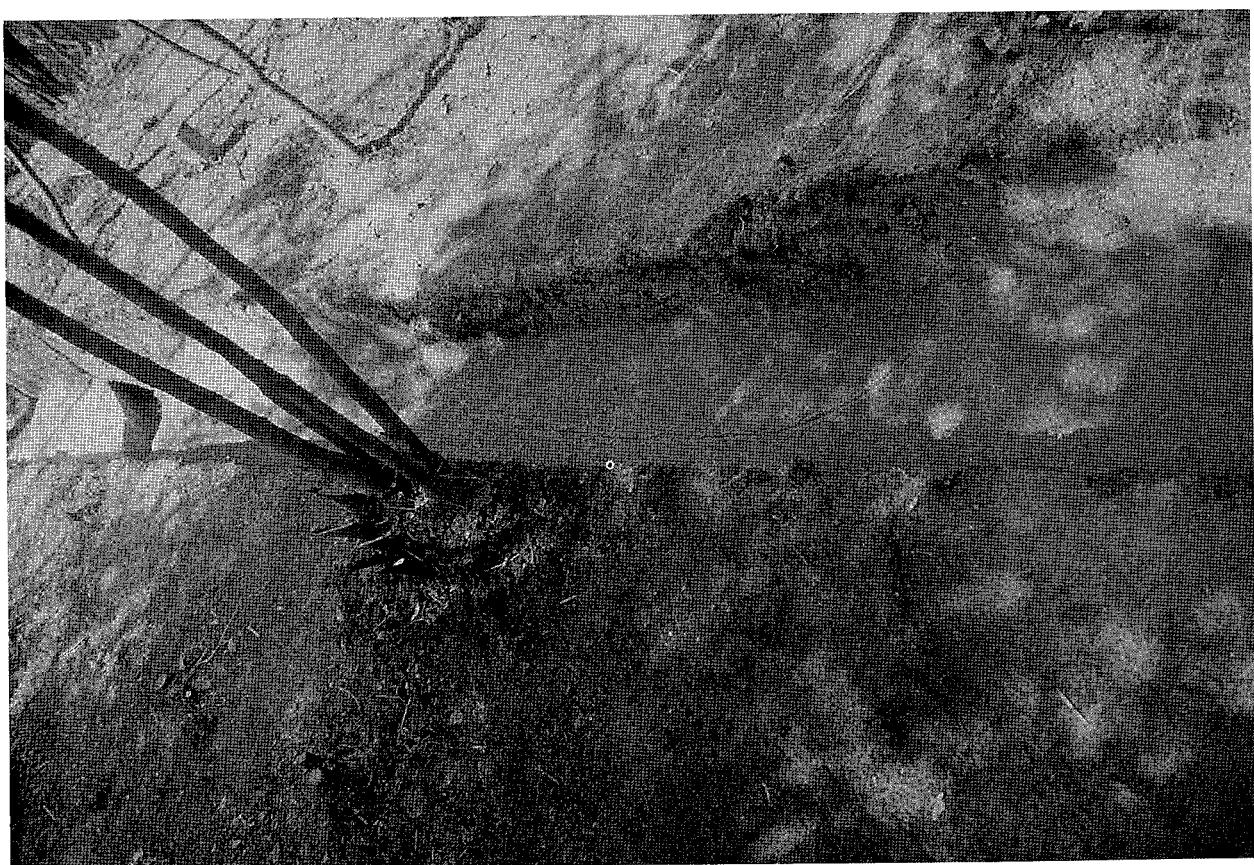


b T5-6 石確認状況 (西から)

a. 第13号古墳墳丘確認状況（西から）



b. 第13号古墳埋葬施設確認状況（東から）





a. 第13号古墳埋葬施設（箱形石棺）確認状況（北から）

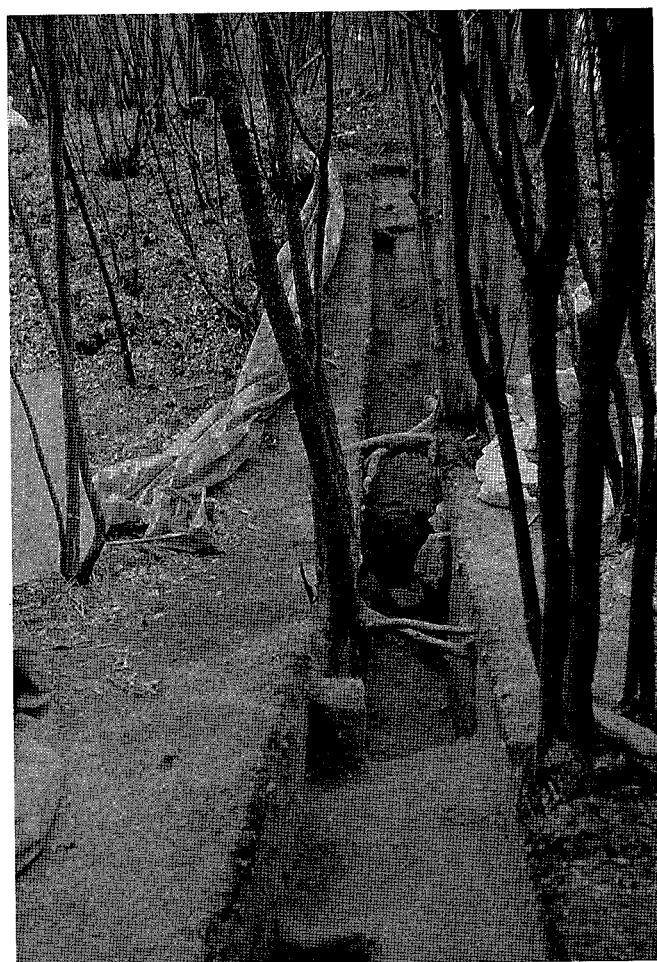


b. T5-3貝塚確認状況（東から）

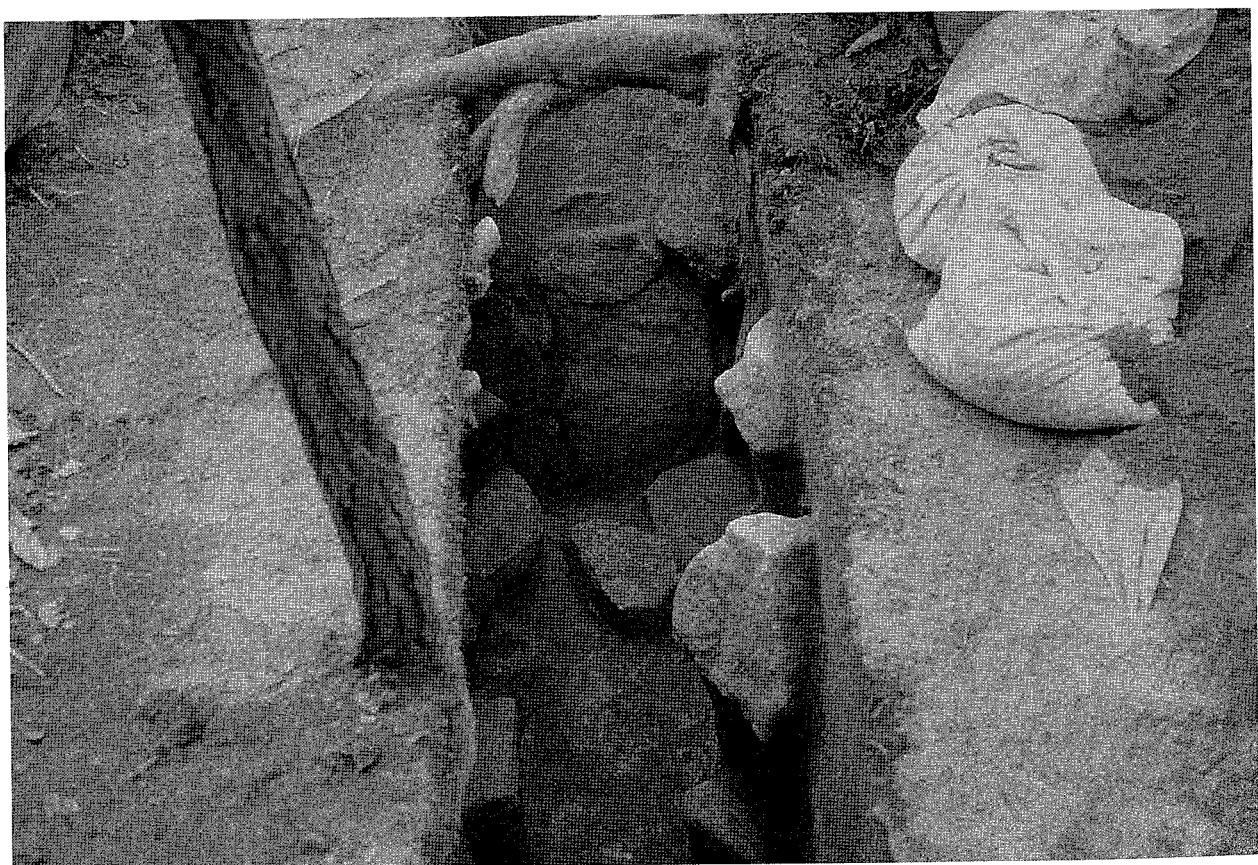


c. T5-1 SH1確認状況（南から）

a. T6-1 蓋石確認状況（北から）



b. T6-1 蓋石確認状況（北から）





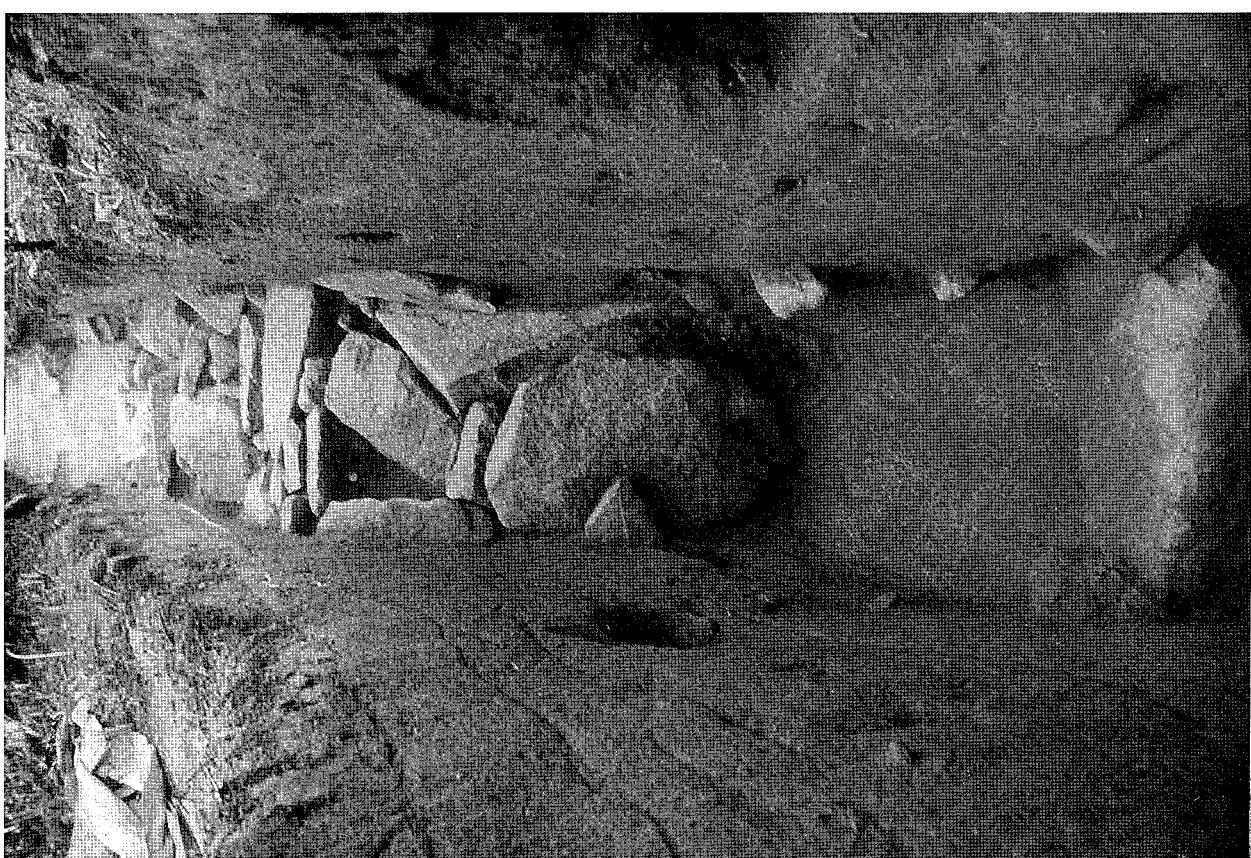
a T 6-2 草石確認状況（東から）



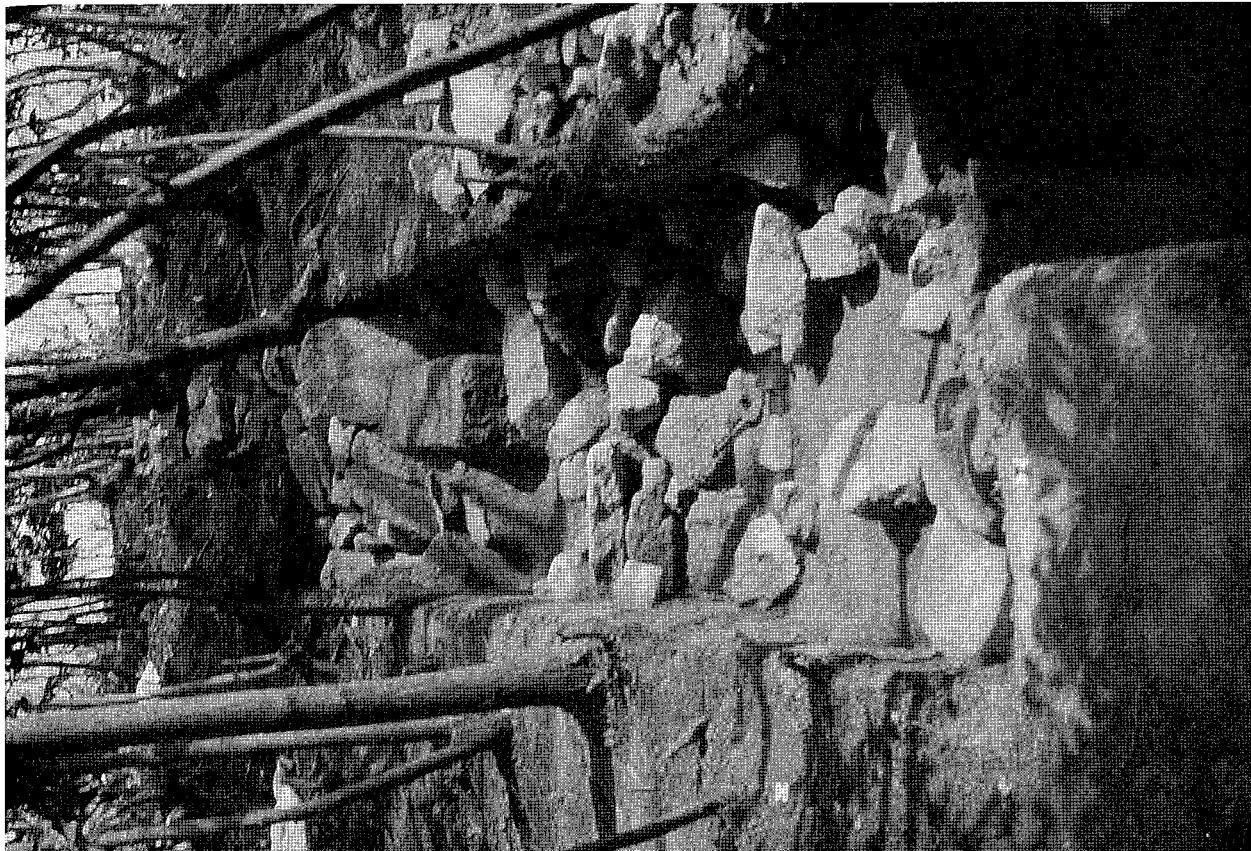
b T 6-3 草石確認状況（東から）



a. T 6-4 磚石確認状況 (南から)



b. T 6-4 磚石 (一部) 確認状況 (南から)



a. T 6-5 豊石確認状況（西から）



b. T 6-6 豊石確認状況（西から）

a. T6-5 葦石（一部）
確認状況（西から）



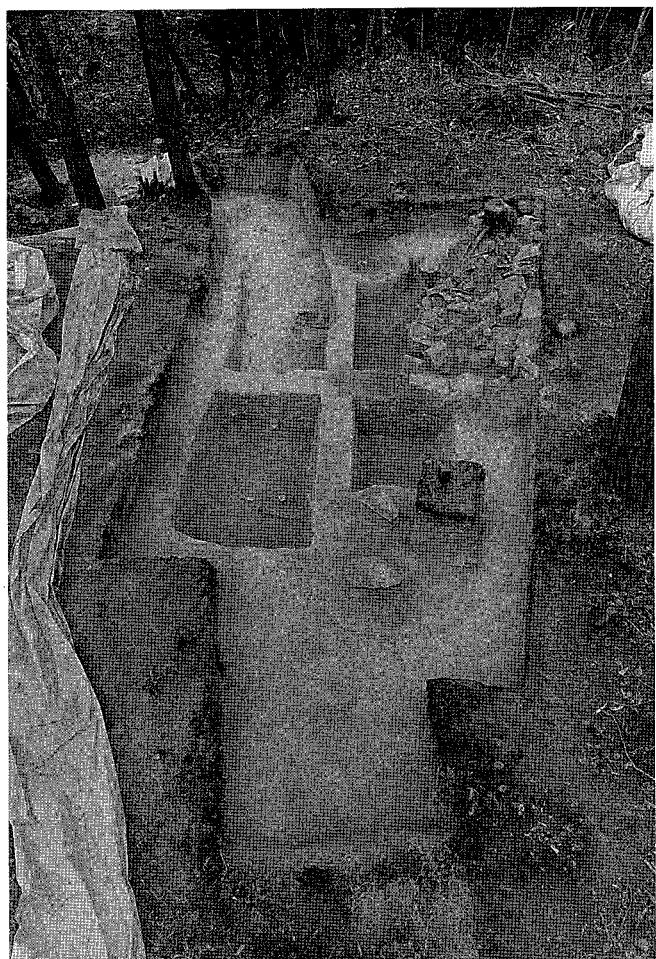
b. T6-6 葦石（一部）
確認状況（西から）



c. T6-6 葦石（一部）
確認状況（西から）



a. T4—1第4号古墳埋葬施設確認状況
(南から)



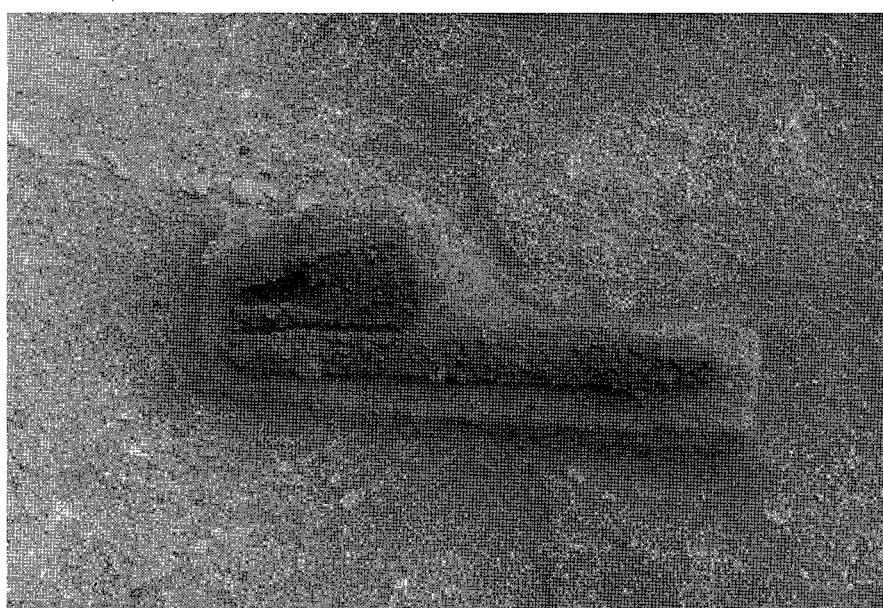
b. T4—1第4号古墳埋葬施設確認状況 (西から)



a. T4—1第4号古墳埋葬施設（西から）



b. T4—1第4号古墳埋葬施設内副葬品出土状況（南から）



c. T4—1
SK4内遺物出土状況
(北から)



a. T4-2 完掘状況（東から）



b. T4-3 完掘状況（西から）





a. T 4-4 完掘状況（南から）

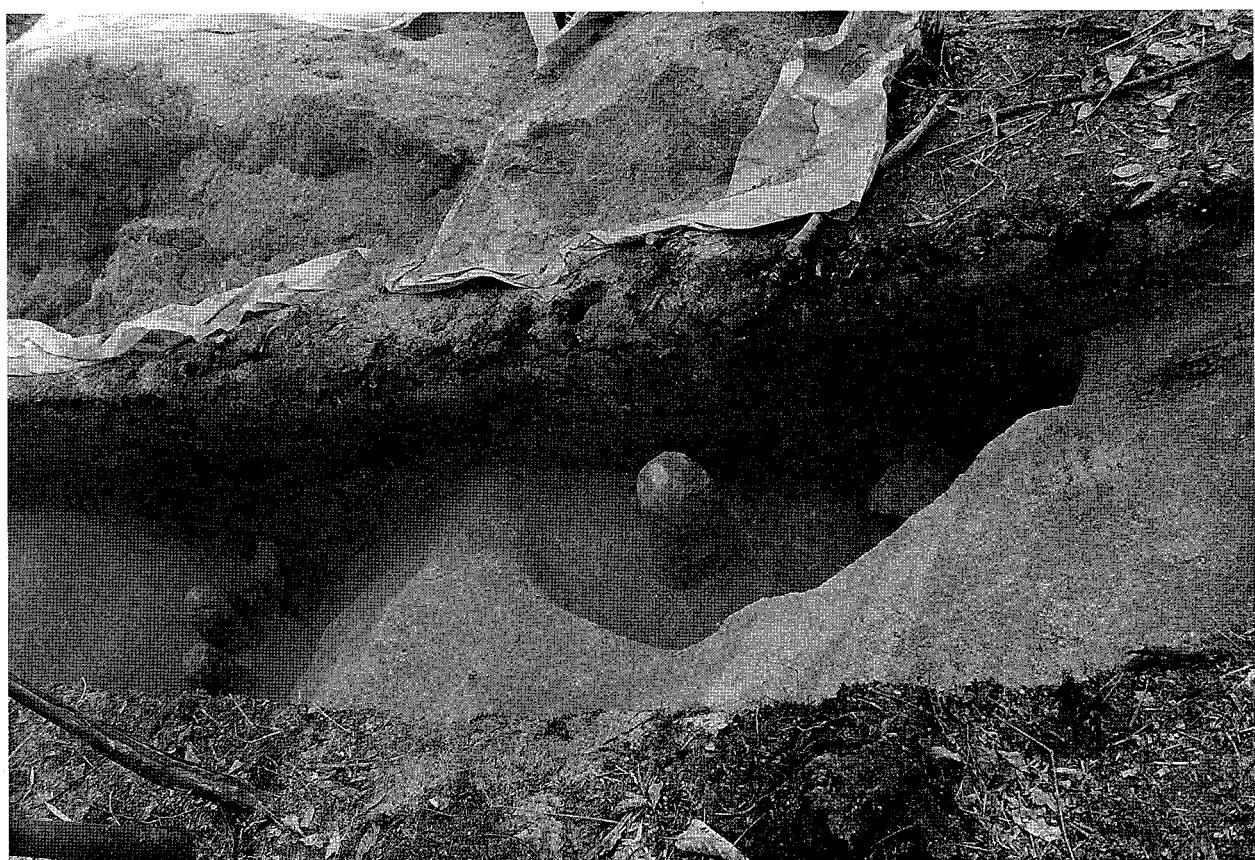


b. T 4-5 完掘状況（東から）

a. T1999—1 完掘状況（北から）



b. T1999—1 SK5・SDa確認状況（東から）





a. T1999-3 完掘状況（東から）



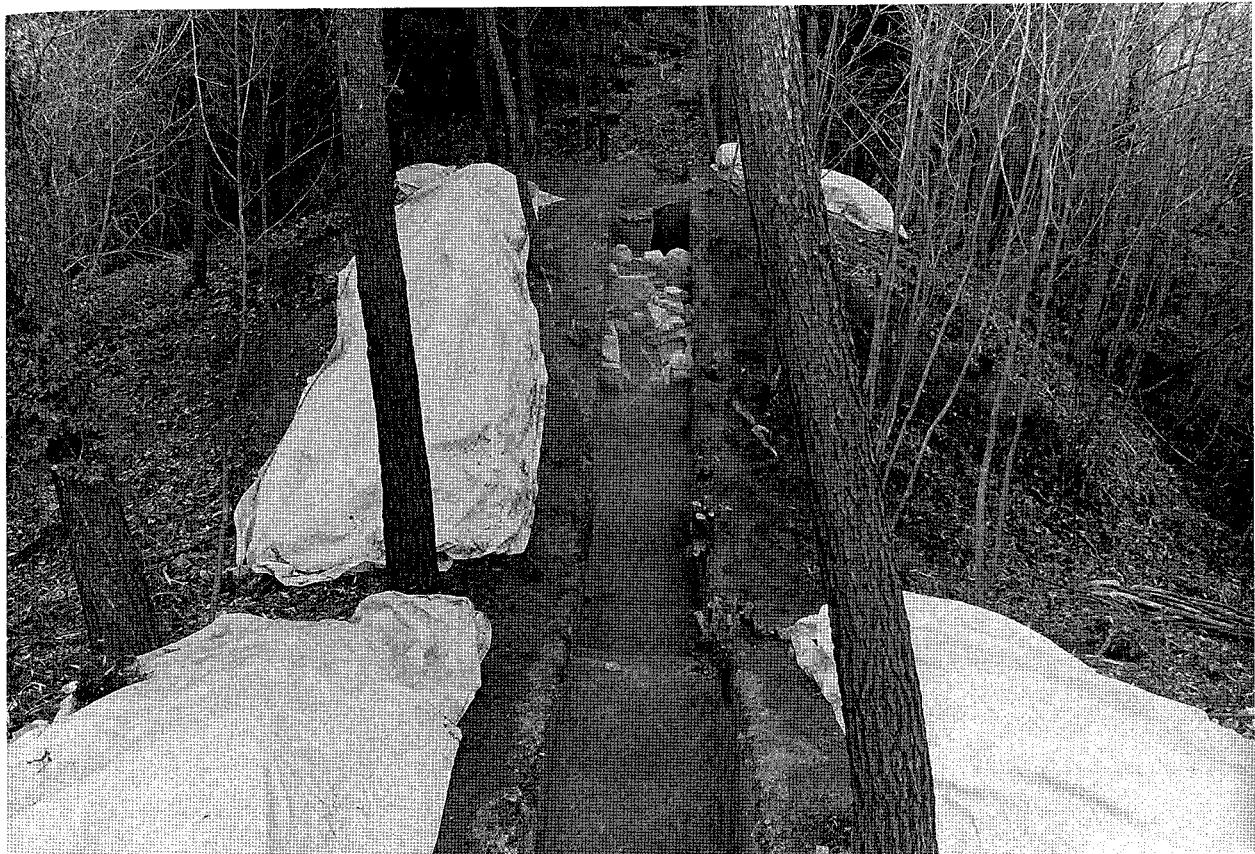
b. T1999-3 SX2 確認状況（東から）



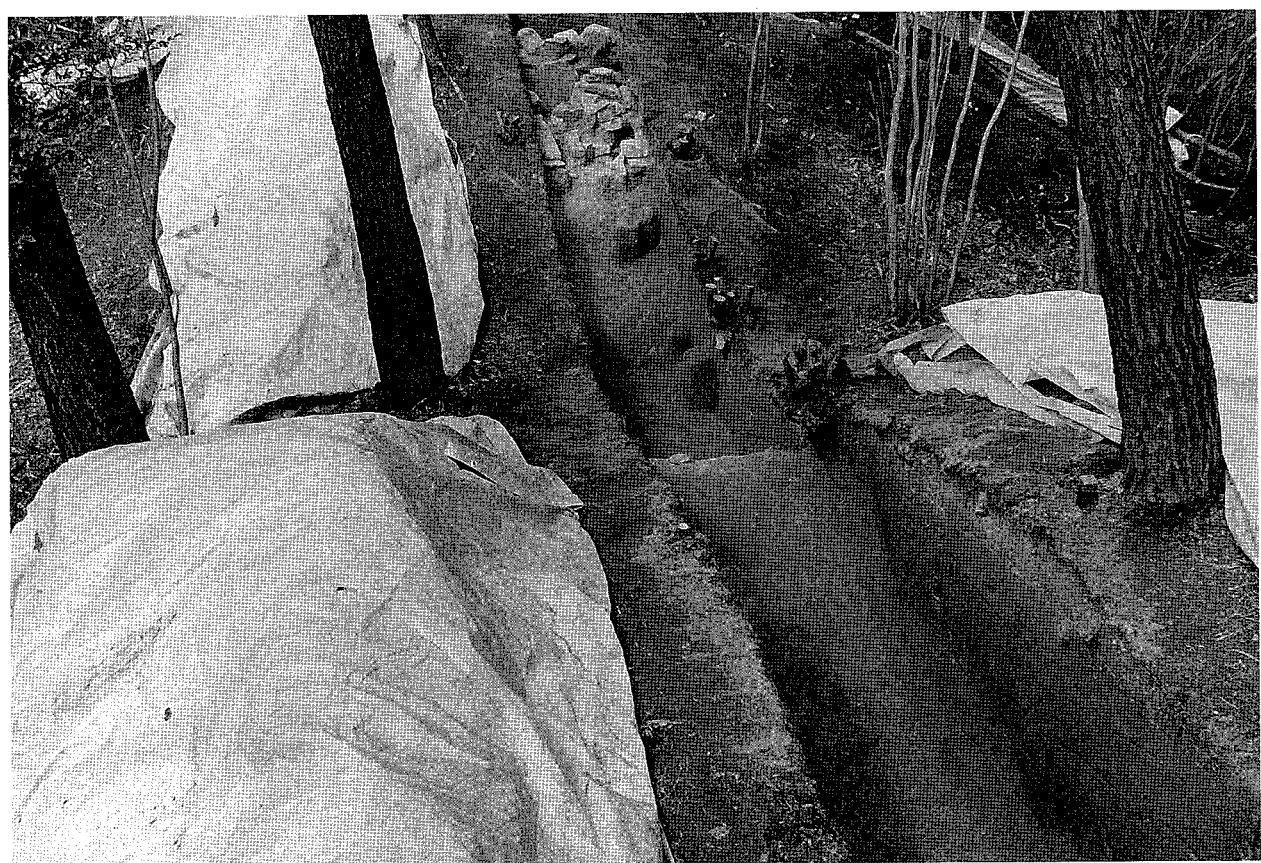
a. T1999-4 完掘状況（北から）



b. T1999-2 完掘状況（東から）



a. T3-1 完掘状況（南から）



b. T3-1 堆積状況（西から）



a. T3—1第3号古墳埋葬施設確認状況（東から）



b. T3—1第3号古墳埋葬施設（東から）



a. T3-1第3号古墳埋葬施設（南から）



b. T3-1第3号古墳埋葬施設副葬品出土状況（西から）

a T3-2 完掘状況
(東から)



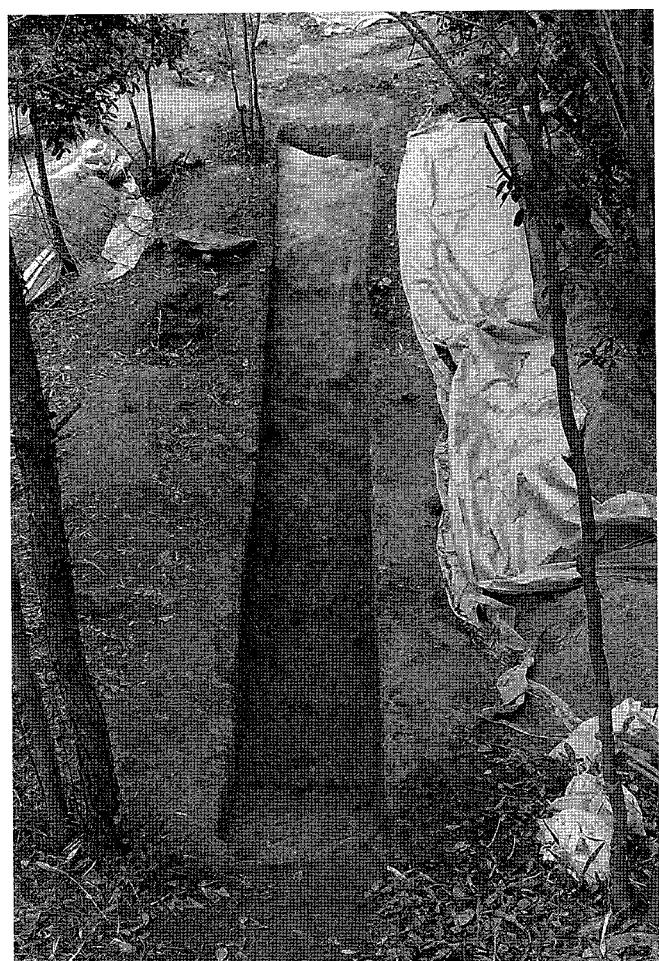
b T3-3 完掘状況
(北から)



c T3-4 完掘状況
(西から)



a. T2-1 完掘状況（南から）



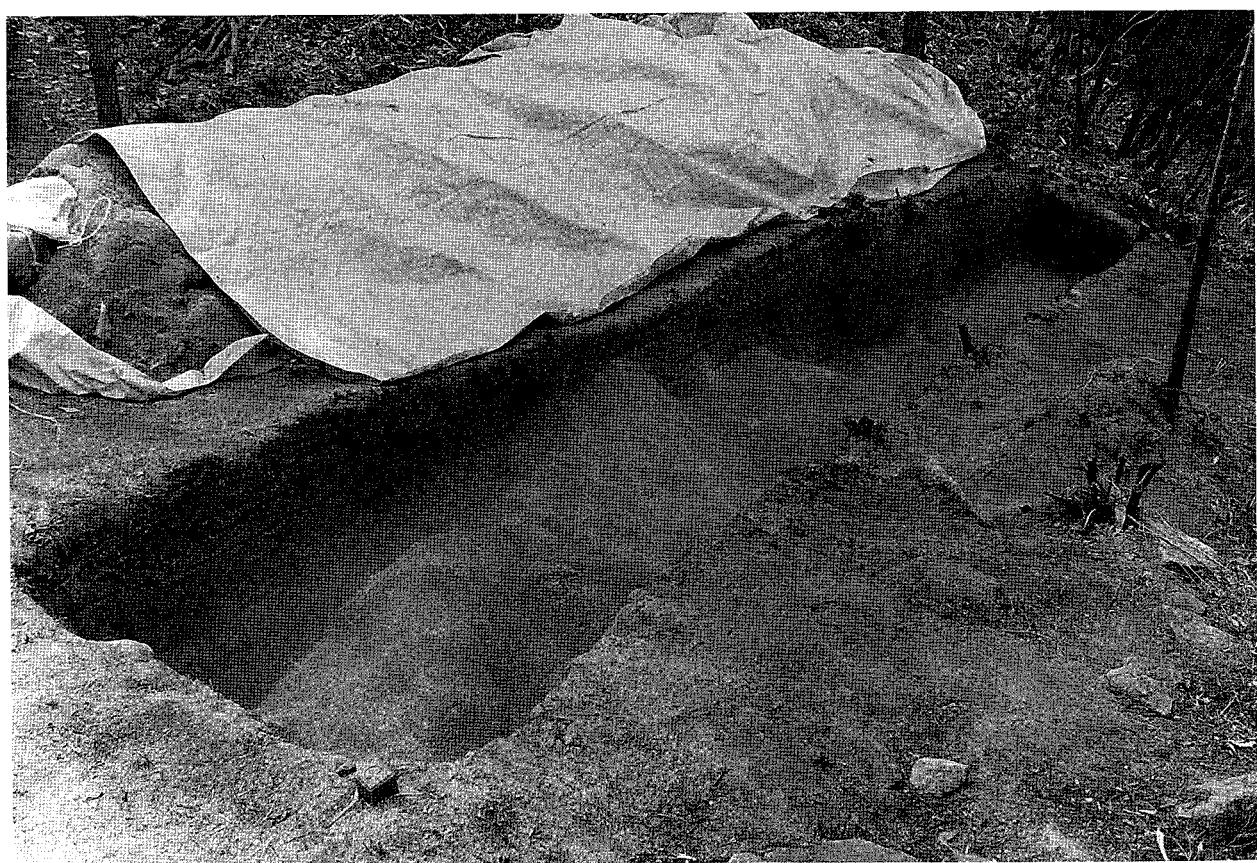
b. T2-1 堆積状況（西から）



a. T2—2鉄釘出土状況（東から）



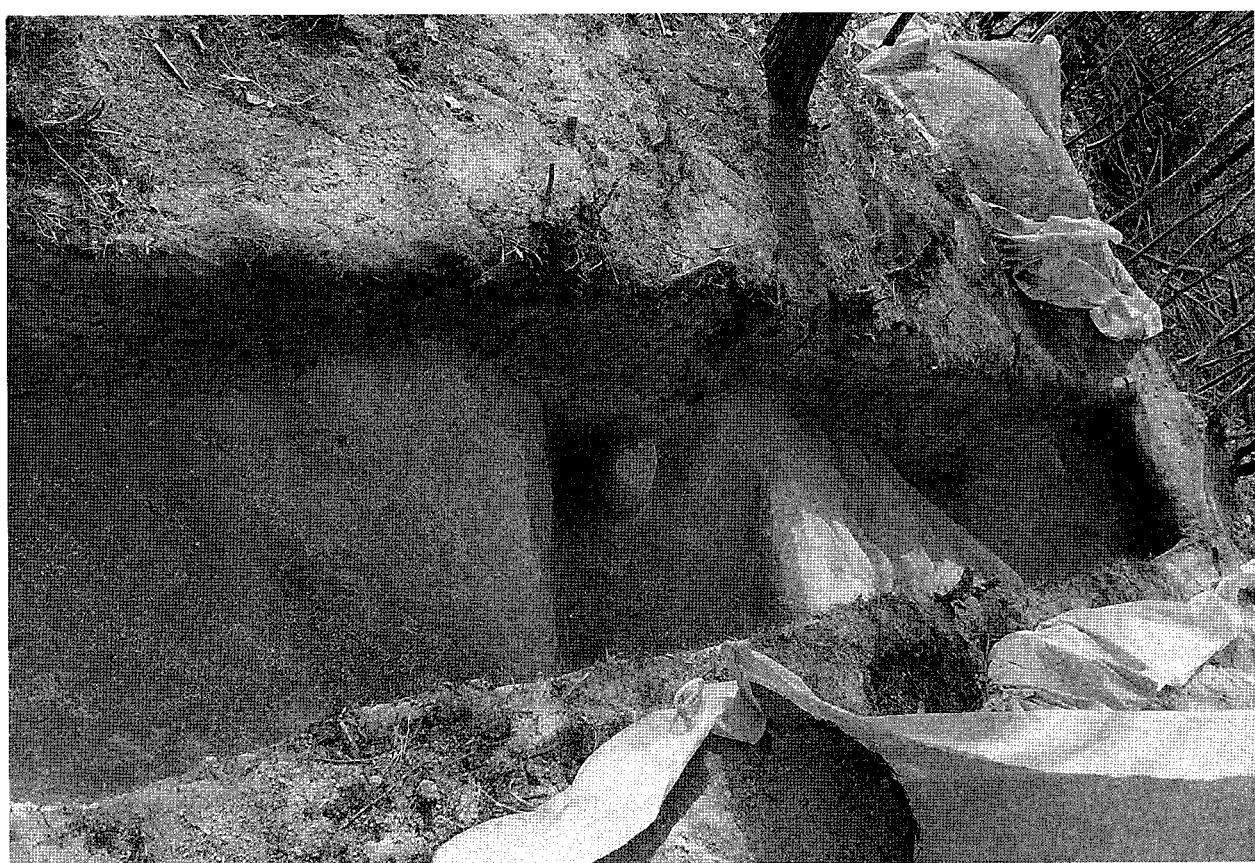
b. T2—2完掘状況（北から）



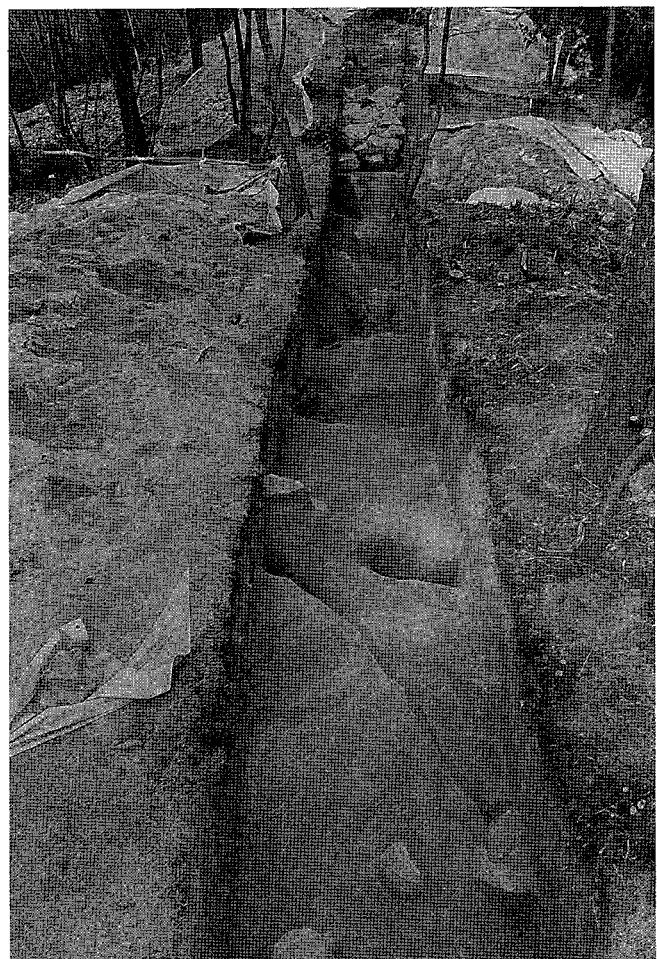
a. T2—3完掘状況（東から）



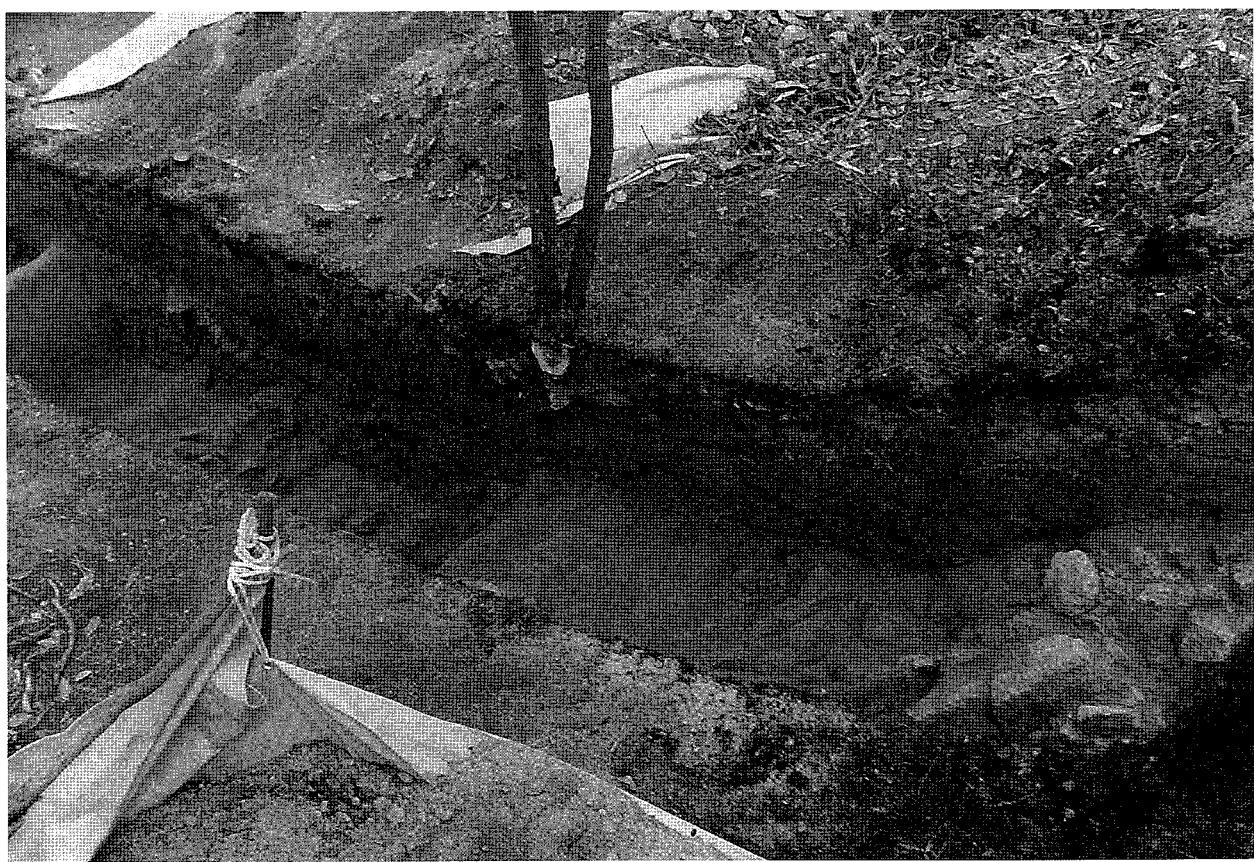
b. T2—3堆積状況（南から）



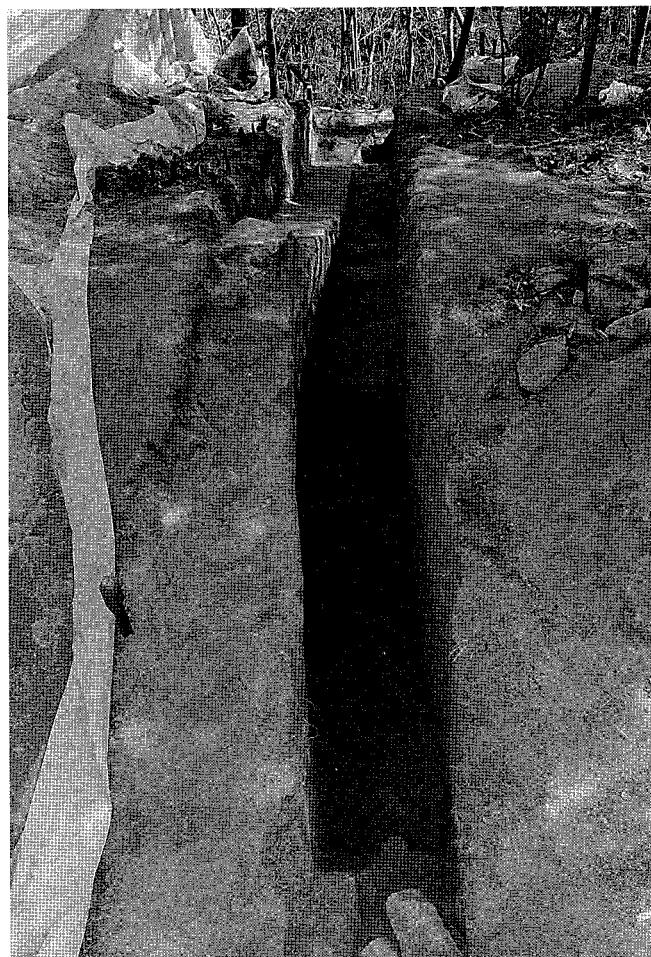
a. T2—4 完掘状況（南から）



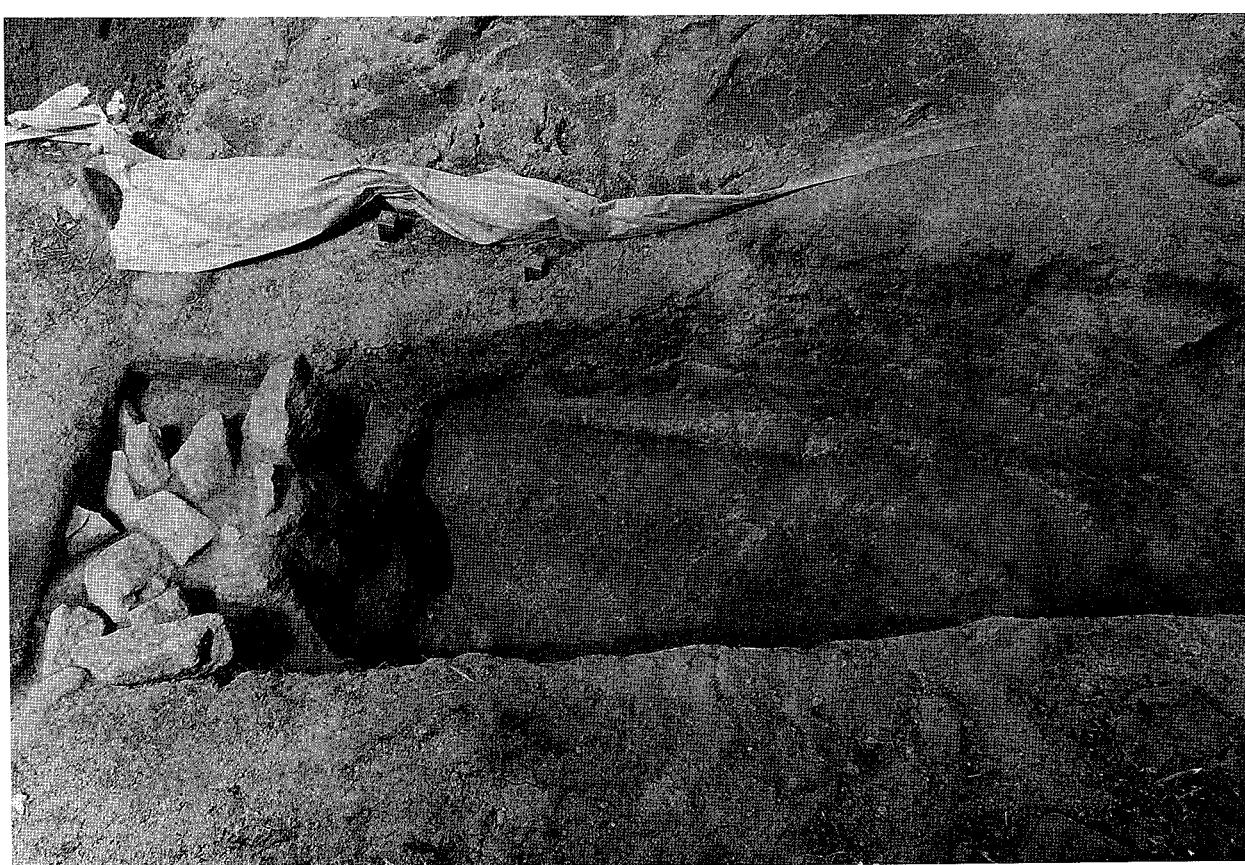
b. T2—4 堆積状況（西から）



a. T2—5 完掘状況（西から）



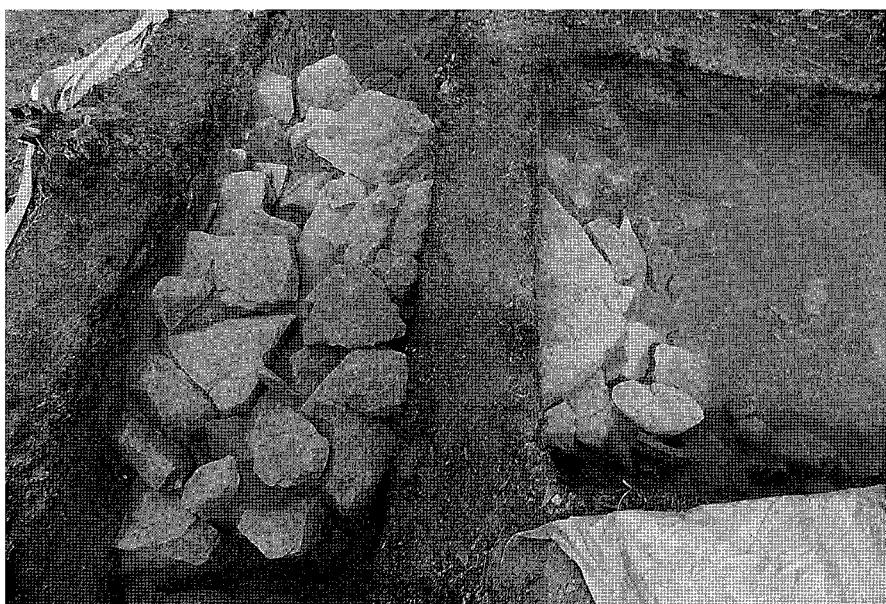
b. T2—5 堆積状況



a. T2—4第14号古墳埋葬施設確認状況（西から）



b. T2—4第14号古墳埋葬施設確認状況（南から）

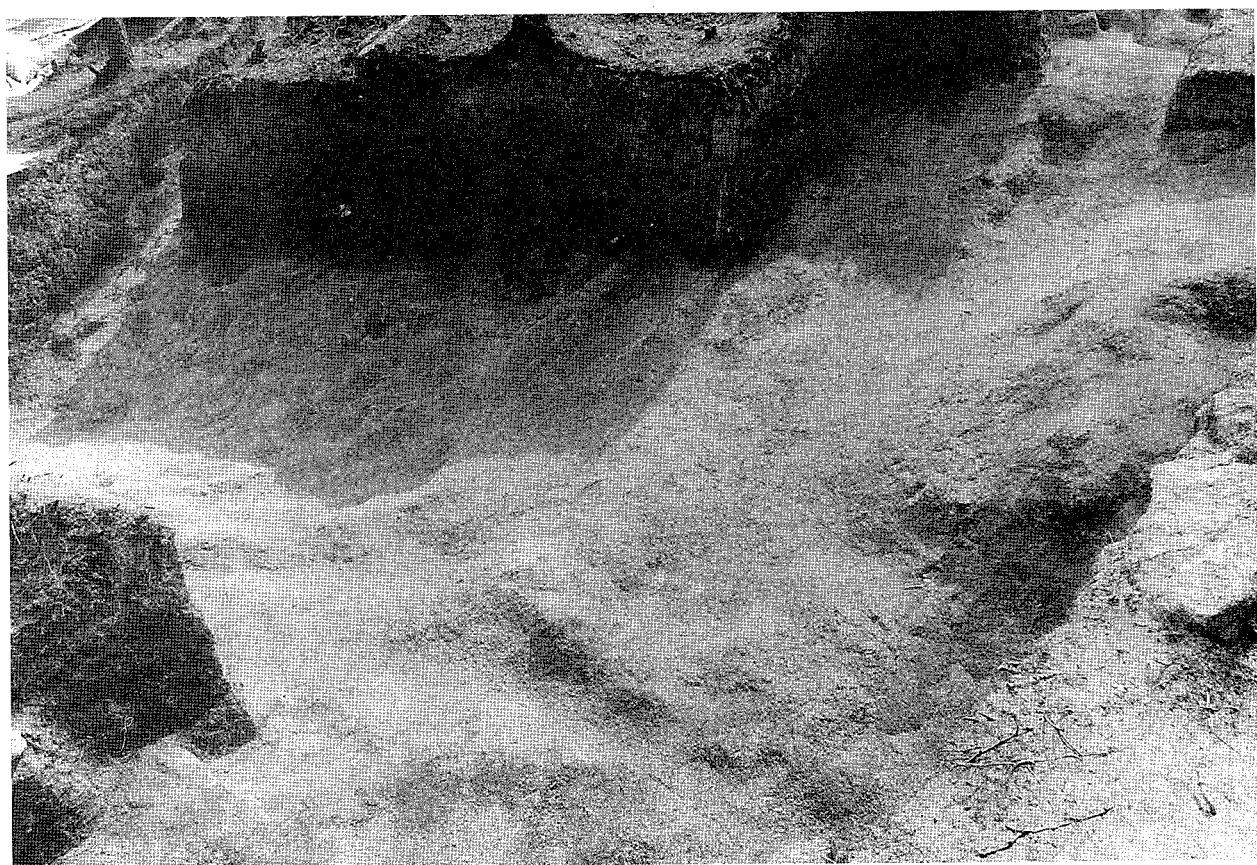


c. T2—4第14号古墳鉄製品出土状況（西から）





a. T1-1・T1-2 完掘状況（北から）



b. T1-1・T1-2 完掘状況（西から）



a. T1-1・T1-2 完掘状況（西から）



b. T1-1・T1-2 完掘状況（東から）



a. T1-2 完掘状況（南から）



b. T1-3 完掘状況（南から）



a. T1-4 完掘状況（南から）



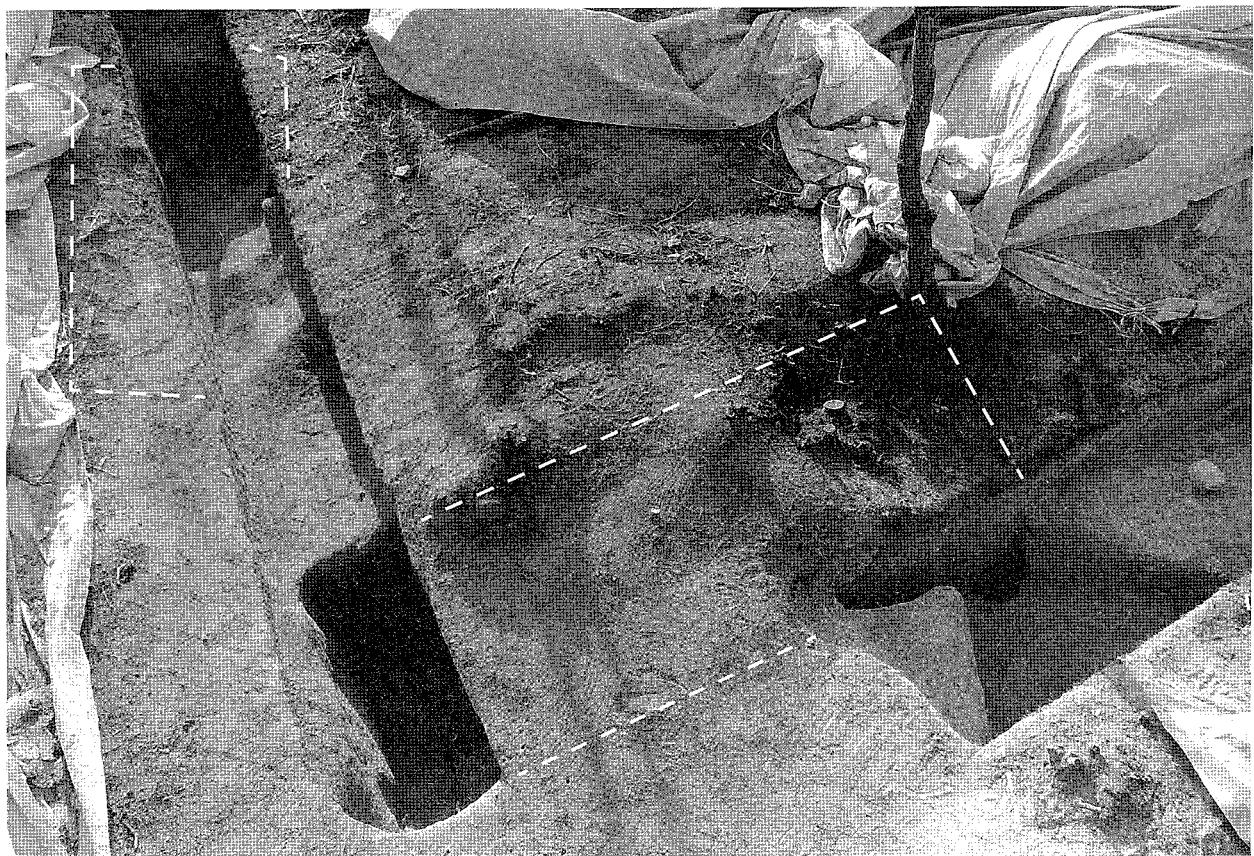
b. T1-5 完掘状況（南から）



a. T1-6 完掘状況（西から）



b. T1-7 堆積状況（東から）



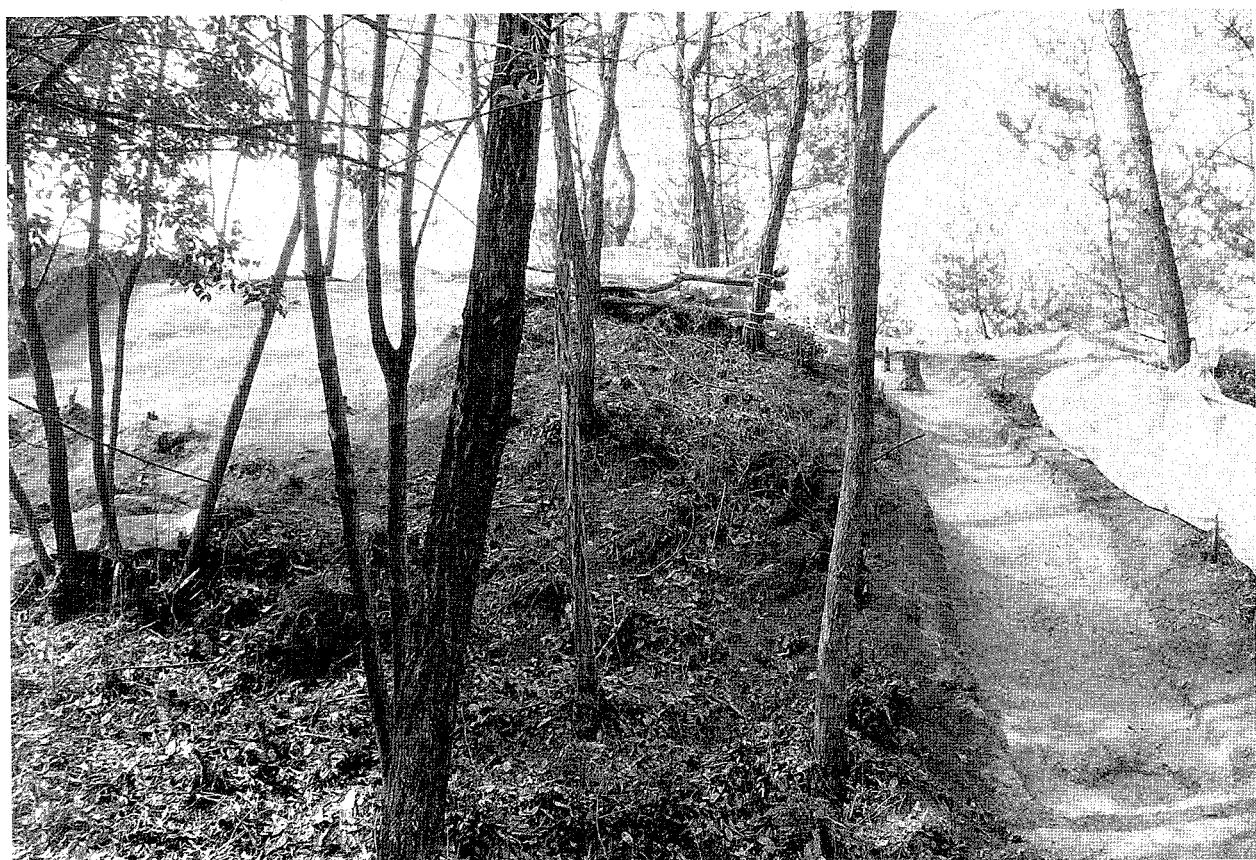
a. T1-6・T1-2 土壙墓確認状況（東から）



b. T1-7 土器出土状況（北から）



a. T1-7 拡張箇所完掘状況（東から）



b. T1-7・T1-8 完掘状況（東から）

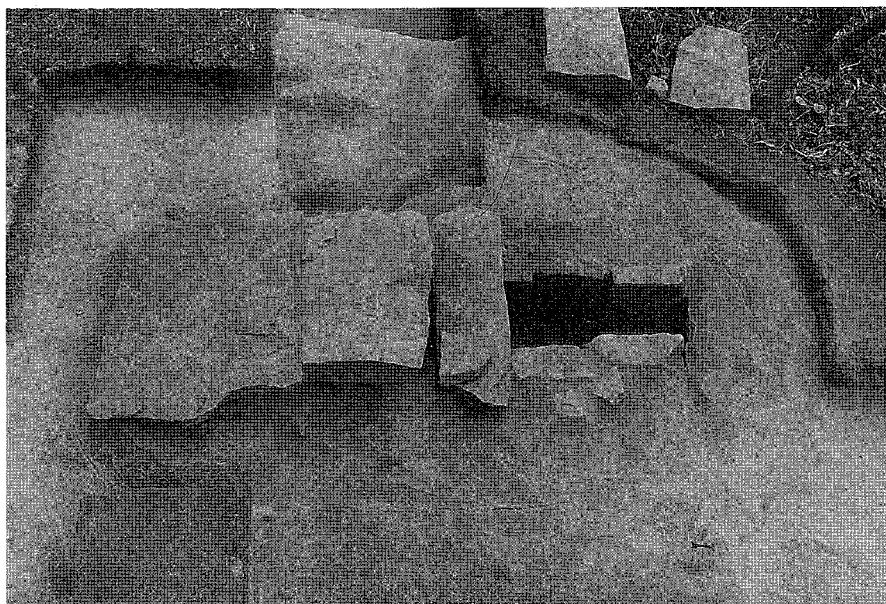
a. T10-1 完掘状況（南から）



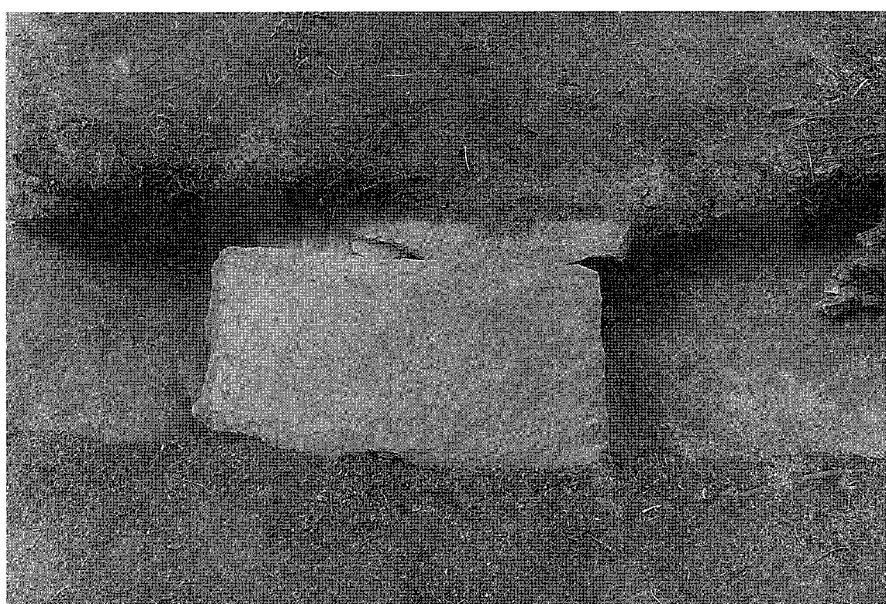
b. T10-1 第10号古墳埋葬施設確認状況（東から）



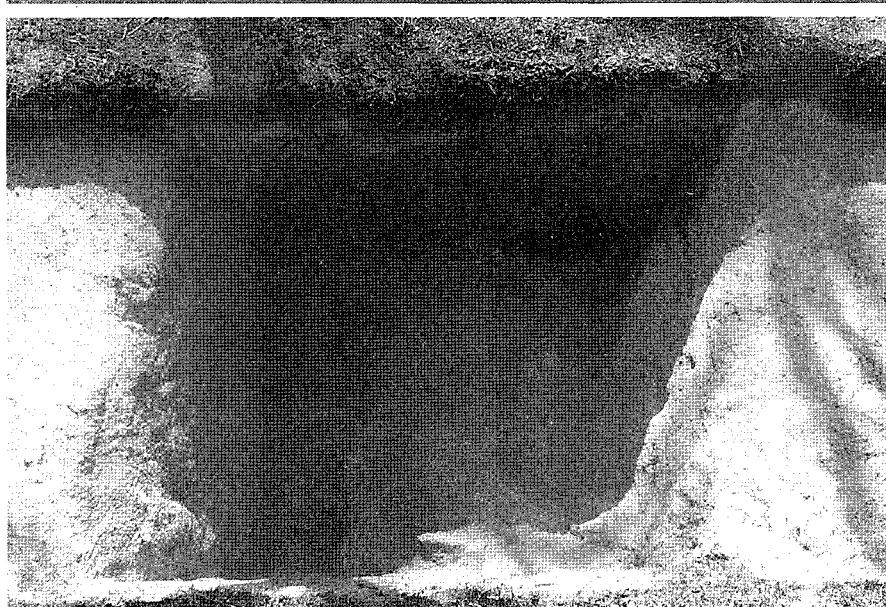
a. T10—1 第10号古墳
SK 1 確認状況
(北から)



b. T10—3 第10号古墳
SK 2 確認状況
(東から)



c. T10—1 第10号古墳
SK 3 確認状況
(東から)



a. T 10—3 完掘状況
(北から)



b. T 10—4 完掘状況
(東から)



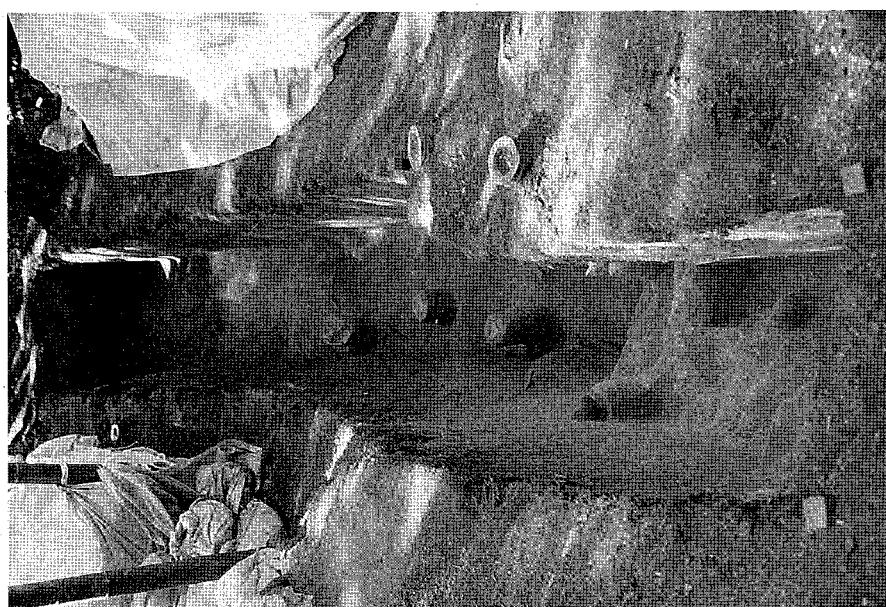
c. T 10—5 完掘状況
(北から)



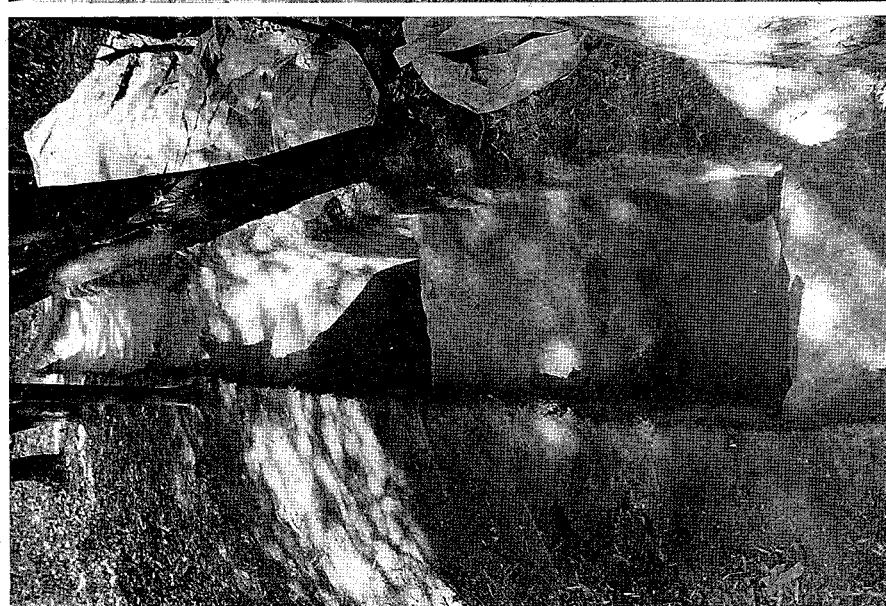
a. T 2003-1 完掘
状況(南から)



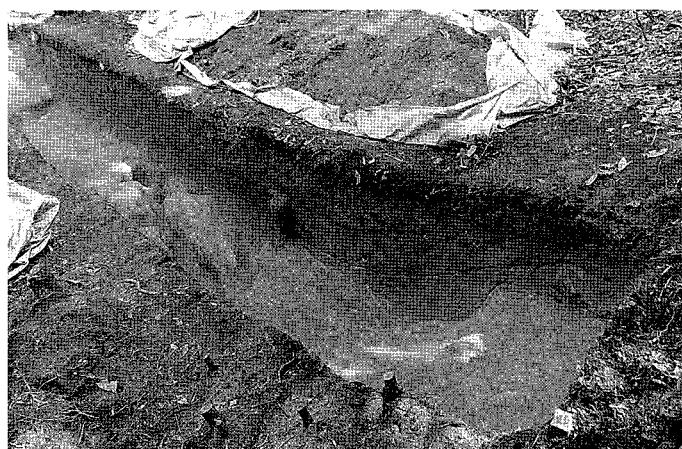
b. T 2003-2 完掘
状況(東から)



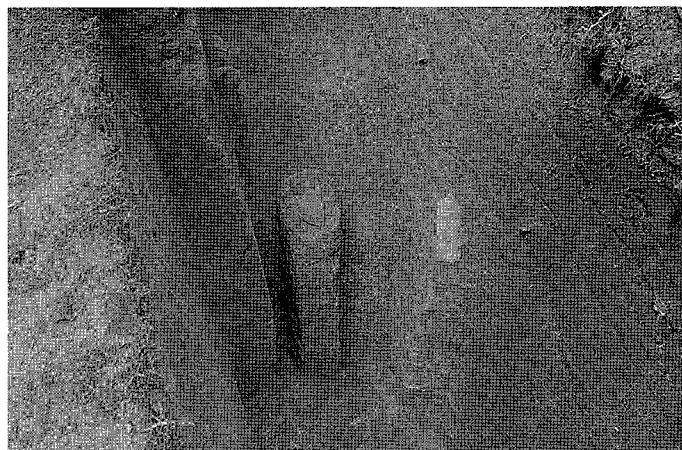
c. T 2003-3 完掘
状況(南から)



a. T2003-1 堆積状況（西から）



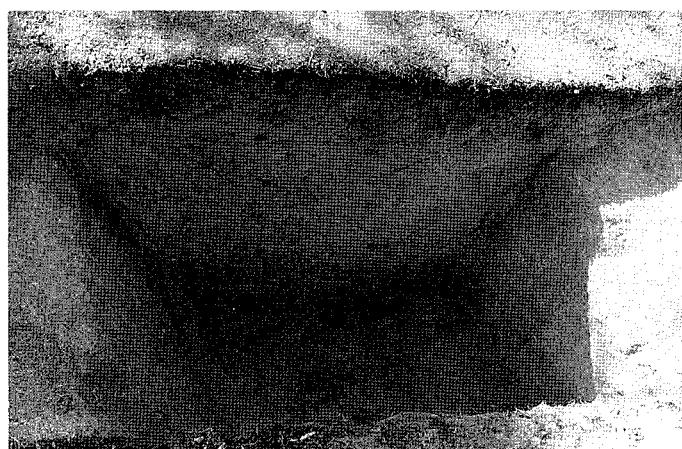
b. T2003-2 遺物出土状況（西から）

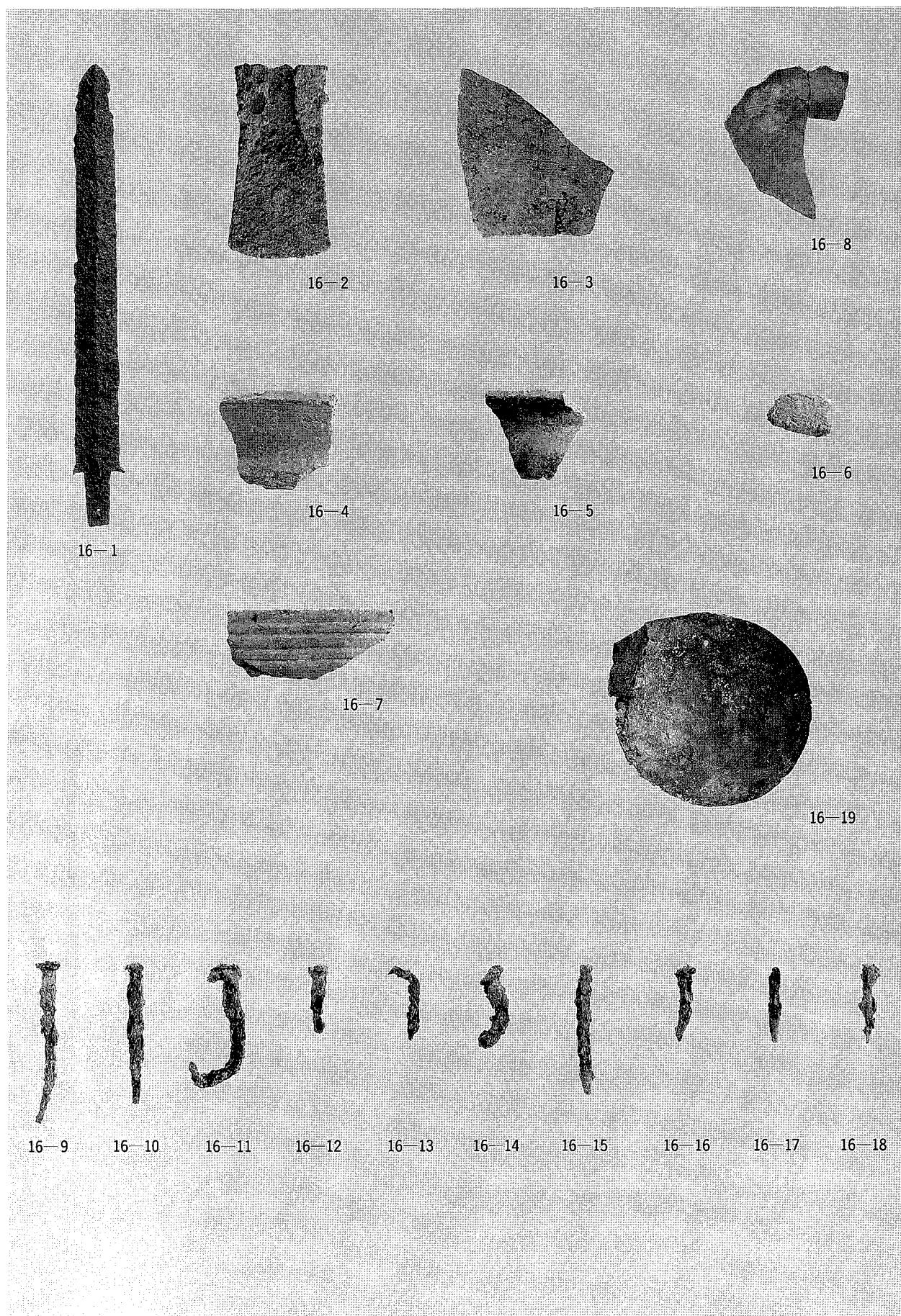


c. T2003-3 SK1 確認状況（西から）

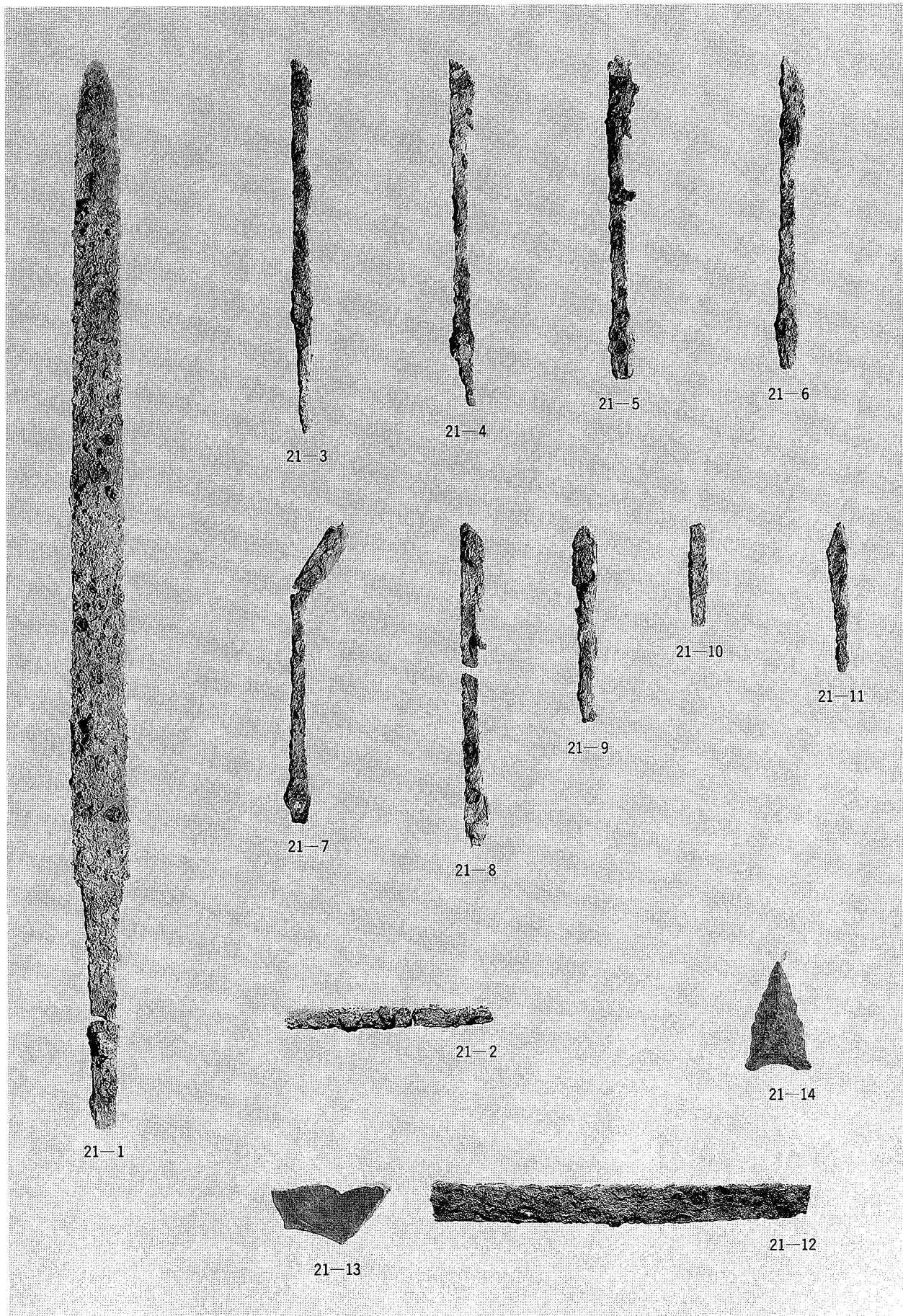


d. T2003-3 SK2 確認状況（東から）

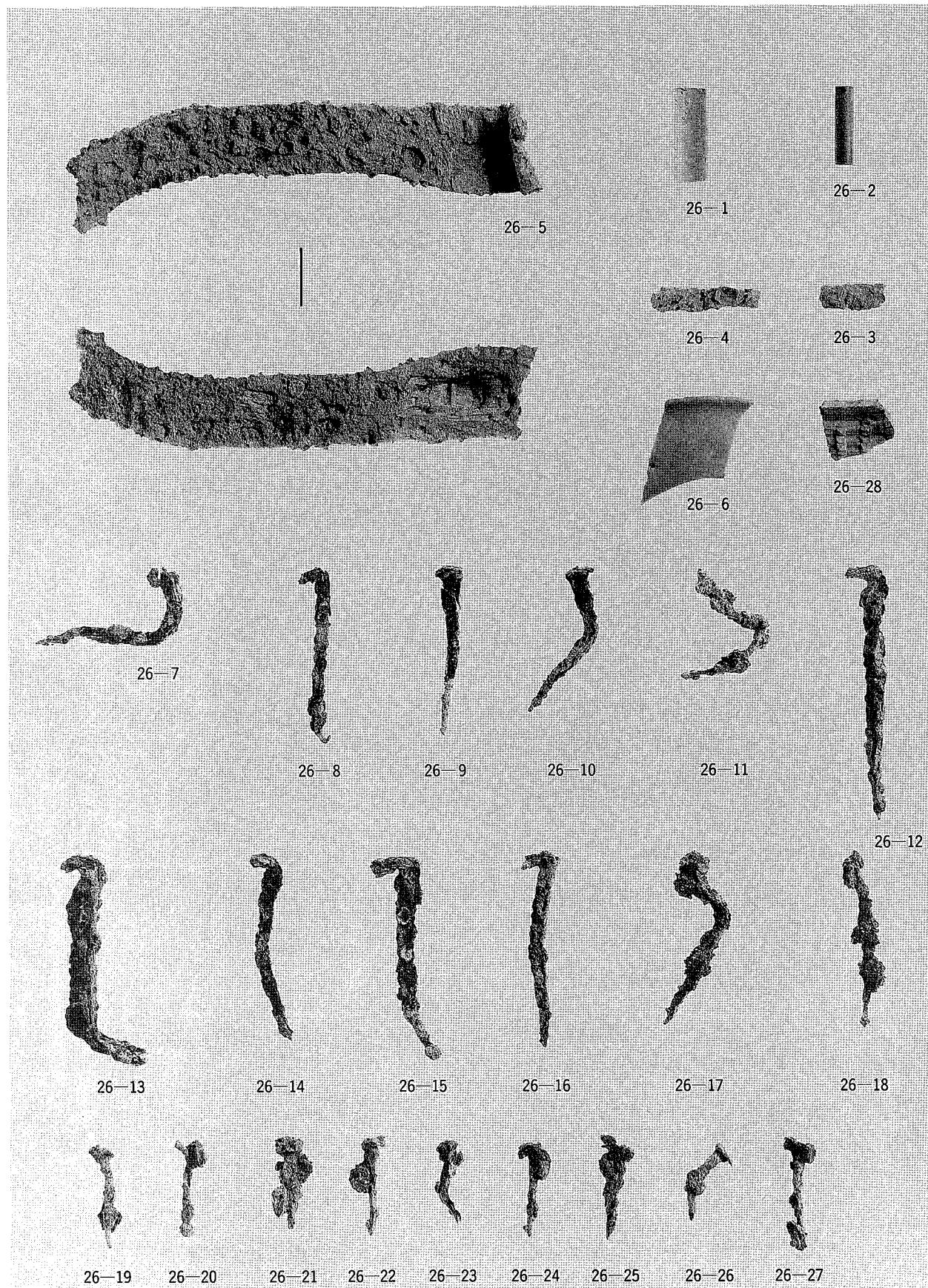




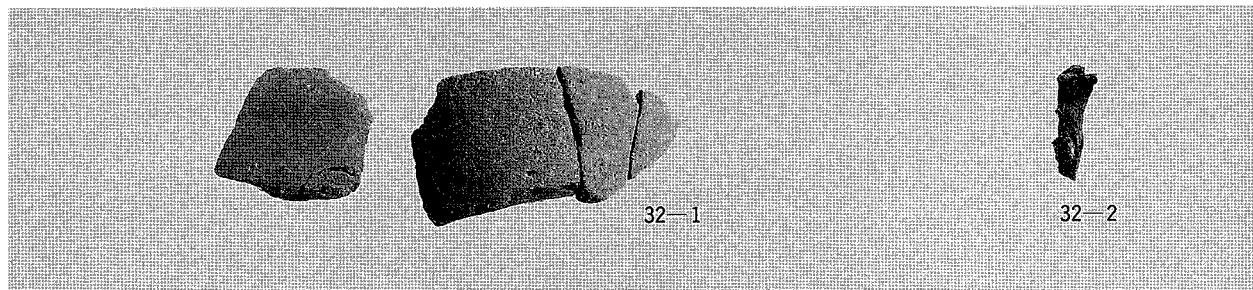
平成10年度遺構状況確認調査出土遺物



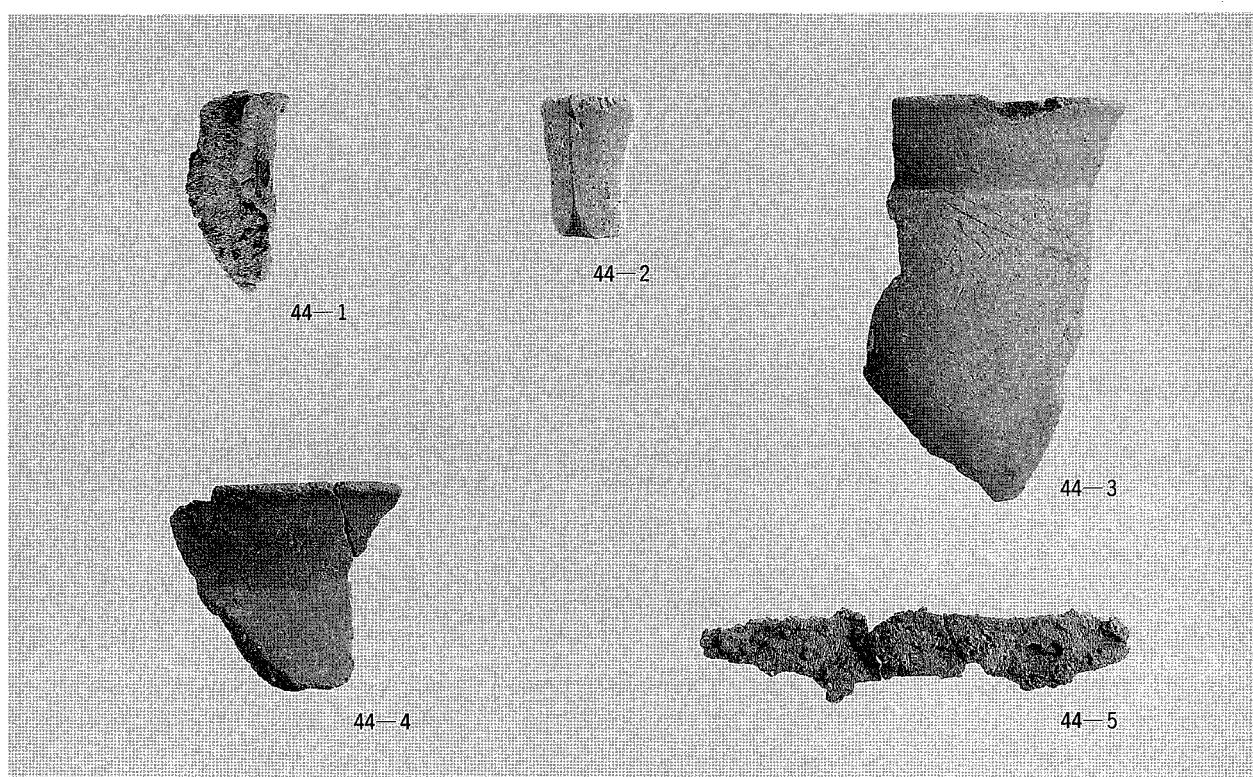
平成11年度遺構状況確認調査出土遺物



平成12年度遺構状況確認調査出土遺物



平成13年度遺構状況確認調査出土遺物



平成14年度遺構状況確認調査出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しせきなかおだこふんぐんいこうじょうきょうかくにんちょうさほうこく							
書名	史跡中小田古墳群遺構状況確認調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	財団法人広島市文化財団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	高下洋一							
編集機関	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課							
所在地	732-0052 広島県広島市東区光町二丁目15番36号							
発行年月日	西暦2004年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″				
しせきなかおだこふん 史跡中小田古墳 群	ひろしまけんひろ 広島県広 しまし あさ 島市安佐 きたくくちた 北区口田 みなみまち 南町	34107	—	34° 26' 68"	132° 29' 84"	19961112～ 20030331	500m ²	史跡整備の ための基礎 資料取得の ための部分 的発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
史跡中小田古墳 群	古墳群	古墳時代	古墳	14基	土師器 鉄製品 玉類	弥生時代後期集落跡・ 土墳墓群、中世山城跡 も確認される		